

仙台市文化財調査報告書第78集

中田畠中遺跡

— 第2次発掘調査報告書 —

1985年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第78集

中田畠中遺跡

— 第2次発掘調査報告書 —

1985年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序 文

仙台市街地を取り巻く近郊は、名取川や七北田川、広瀬川が形成する沃野であって、古くから肥沃な耕土として発展してきたところであります。ここ名取川下流南岸沿いの四郎丸地区は高燥な微地形を呈し、肥沃な農地が展開する中田畠中では、その開拓の歴史は古いとされています。城丸古墳、弁天岡古墳、四郎丸館跡の分布は当地の開拓史を物語っているといえましょう。近年の市街化の波は、宅地造成という形で近郊の農業生産地帯を蚕食しながら、その圏域を拡大しています。こうした動きの中で、先人が遺した埋蔵文化財は、その保護保存問題で常に表面化される実態があって、地区住民、市民一般の協力を仰がざるを得ないことがらとなっています。

今回の発掘調査もこうした協力のもとに実施されたものでここに報告する小論は、その成果の集成であります。調査に際しては多くの市民や関係当局のご支援協力をいただきましたこと深く感謝を申し上げる次第であります。

こうした機会に、文化財がもつてゐる意味や保護行政に対する理解の上に一石を投じることが出来れば、大変よろこばしいことと存じます。

昭和60年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黩

例　　言

- まかたはたなか
1. 本書は宅地造成に先立って行なった中田畠中遺跡（仙台市文化財登録番号C-201）の発掘調査報告書である。すでに公表された広報紙等に優先するものである。
2. 発掘調査・遺物整理は社会教育課文化財調査係 佐藤甲二・渡辺誠が担当し、陶磁器の鑑定は佐藤洋が行なった。また、本書の編集・執筆は佐藤甲二が行なった。
3. 本書に使用した建設省国土地理院発行の地形図は、図中に示した。
4. 本書中の土色については「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を使用した。
5. 方位は全て磁北を北としている。磁北方向は真北に対して西偏7°20'である。
6. ローマ数字使用の層位名は基本層位を表し、算用数字使用の層位名は遺構堆積土・埋土を表す。
7. 土器で中心線が1点鎖線のものは、図上復元実測図である。
8. 本書に関係する出土遺物・作成図面・写真は一括して仙台市教育委員会が保管している。

発掘調査参加者名

佐藤幸一郎 佐藤みよ 佐藤紀美 大山のり子 柏倉セツ子 浅見礼子 斎藤紀子 庄子敦
菊池豊 菅ノ又三千代 佐藤延子 菅井よね子

遺物整理参加者名

菊池豊 庄子敦 大宮裕二 宮崎進 村上篤 阿部多津子 小林充 大貫由美子 谷津妙子
石川勝子 神尾紀似子 神尾恵美子

本文目次

序 文	
例 言	
第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	1
第Ⅱ章 調査の方法と概要	3
1. 調査に至る経過	3
2. 調査方法	4
3. 基本層位	4
4. 調査概要	7
第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物	8
1. Ⅲb層上面検出遺構	8
(1) 1号溝跡	8
(2) 1号性格不明遺構	8
2. Ⅲa層上面検出遺構	8
(1) 1号土壙	8
(2) 2号土壙	8
(3) 3号土壙	10
(4) 4号土壙	10
3. Ⅲb層上面検出遺構	10
(1) 1号住居跡	10
(2) 2号住居跡	17
(3) 5号土壙	26
(4) 6号土壙	26
(5) 7号土壙	26
(6) 8号土壙	28
(7) 9号土壙	28
(8) 10号土壙	28
(9) 11号土壙	28
(10) 12号土壙	28
(11) 13号土壙	30
(12) 14号土壙	30
(13) 15号土壙	30
(14) 16号土壙	30
(15) 17号土壙	30
(16) 18号土壙	31
(17) 19号土壙	31
(18) 20号土壙	31
(19) 21号土壙	31
(20) 22号土壙	31
(21) 23号土壙	32
(22) 24号土壙	32
(23) 25号土壙	32
(24) 26号土壙	32
(25) 27号土壙	32
(26) 28号土壙	32
(27) 29号土壙	34
(28) 30号土壙	36
(29) 2号性格不明遺構	36
(30) 3号性格不明遺構	36
(31) 4号性格不明遺構	38
(32) ピット	38
4. IVa層上面検出遺構	38
(1) 小溝状遺構	38
(2) 2号溝跡	40
5. その他出土遺物	40
第Ⅳ章 出土遺物の検討	45

1. 繩文土器	45
2. 土師器	45
(1) 分類	45
(2) 所属年代	48
3. 赤焼土器	52
4. 須恵器	52
5. 陶磁器	53
6. 土製品	54
7. 石器、石製品	55
8. 鉄製品、鉄滓	56
第V章 檢出遺構の検討	57
1. 所属年代	57
(1) IIb層上面検出遺構	57
(2) IIIa層上面検出遺構	57
(3) IIIb層上面検出遺構	57
(4) IVa層上面検出遺構	58
2. 小溝状遺構と中田畑中遺跡の時代的変遷	60
(1) 小溝状遺構について	60
(2) 中田畑中遺跡の時代的変遷について	61
第VI章 まとめ	62

写真図版目次

図版1 遺跡全景	65
図版2 IIb層上面検出遺構	
図版3 IIIa層上面検出遺構2	67
図版4 IIIa層上面検出遺構3	68
図版5 IIIb層上面検出遺構1	69
図版6 IIIb層上面検出遺構2	70
図版7 IIIb層上面検出遺構3	71
図版8 IIIb層上面検出遺構4	72
図版9 IIIb層上面検出遺構5	73
図版10 IIIb層上面検出遺構6	74
図版11 IIIb層上面検出遺構7	75
図版12 IIIb層上面検出遺構8	76
図版13 IIIb層上面検出遺構9	77
図版14 IIIb層上面検出遺構10	78
図版15 IIIb層上面検出遺構11	79
図版16 IIIb層上面検出遺構12	
図版17 IVa層上面検出遺構2	81
図版18 基本層位	82
図版19 土師器壺1	83
図版20 土師器壺2	84
図版21 土師器壺3	85
図版22 土師器壺4	86

図版23	土師器環5、赤焼土器環	87	図版24	須恵器環、土師器壺1	88
図版25	土師器壺2	89	図版26	土師器壺3	90
図版27	土師器壺4、須恵器壺1、壺	91	図版28	ヘラ描き文字？土器、土製品	92
図版29	陶磁器	93	図版30	石製品、鉄製品	94
図版31	鉄滓、羽口、炉壁	95			

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	1	第2図	遺跡範囲と調査区位置図	3
第3図	第1～3次発掘調査位置図	4	第4図	各層上面検出遺構全体図、 調査区南壁セクション図	5～6
第5図	1～4号土壤平・断面図	9	第7図	1号住居跡出土遺物1	12
第6図	1号住居跡平・断面図	11	第9図	1号住居跡出土遺物3	14
第8図	1号住居跡出土遺物2	13	第11図	2号住居跡平・断面図	16
第10図	1号住居跡出土遺物4	15	第13図	2号住居跡出土遺物1	18
第12図	2号住居跡カマド平・断面図	17	第15図	2号住居跡出土遺物3	20
第14図	2号住居跡出土遺物2	19	第17図	2号住居跡出土遺物5	22
第16図	2号住居跡出土遺物4	21	第19図	2号住居跡出土遺物7	24
第18図	2号住居跡出土遺物6	23	第21図	5～10号土壤平・断面図	27
第20図	2号住居跡出土遺物8	25	第23図	19～26号土壤平・断面図	33
第22図	11～18号土壤平・断面図	29	第25図	5～29号土壤出土遺物	35
第24図	27～30号土壤平・断面図	34	第27図	2号性格不明遺構出土遺物	37
第26図	2～4号性格不明遺構断面図	36	第29図	基本層位出土遺物1	41
第28図	小溝状遺構・2号溝跡断面図	40	第31図	基本層位出土遺物3	43
第30図	基本層位出土遺物2	42	第33図	土師器環類別資料	46
第32図	基本層位出土遺物4	44			

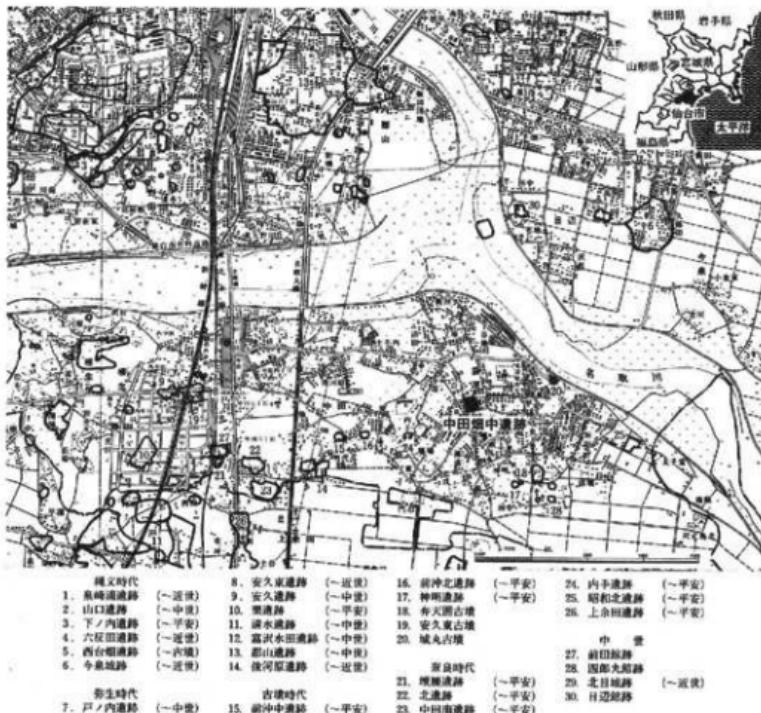
表 目 次

第1表	ピット観察表	39	第2表	ピット土層註記表	39
第3表	土師器環 底口比・高口比	46	第4表	土師器・赤焼土器・須恵器 類別資料(図化資料)出土地点	49
第5表	土師器環の各遺跡間における 比較(宮城県南部の集落遺跡)	51	第6表	遺物出土地点	59

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

中田畠中遺跡は、仙台市城南東の仙台市袋原字畠中10-1~4に所在する。国鉄東北本線南仙台駅より東へ約2.3kmの地点で、遺跡の西約1.5kmには仙台バイパスが南北に走る。海岸線まで南東へ約4km、北へ約1kmの地点には名取川と広瀬川の合流点がある。

仙台市は西側に丘陵地帯、東側には七北田川、名取川・広瀬川によって形成された海岸平野が広がる。この内、仙台市の南を東流する名取川は、奥羽山系の南大東岳付近に源を発する。名取川は仙台市西部で、高館丘陵と番山・青葉山丘陵の間を開拓しながら東流する。仙台市東部では、支流広瀬川と合流し、上流からの流出物を堆積させて沖積面を形成し、太平洋へと注ぐ。両岸の沖積面上には、自然堤防、後背湿地、旧河道、浜堤等の微地形が認められる。特に旧河道が複雑に入り組んでいることが特徴的で、今日までの間、幾度となくその流路



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡（国土地理院1/25,000「仙台西南部」「仙台東西部」を複製）

を変化させたことが窺える。その結果、流路沿いの自然堤防もその都度寸断され、その背後に形成された後背湿地とともにより複雑な様相を示している。このような状況は、右岸に於いてはより顕著である。

名取川右岸沖積面に位置する中田畠中遺跡は、上記のように複雑に入り組む地形の自然堤防上に立地する。標高は約5mである。昭和56年度、今回調査対象区の北西側隣接地が調査され、古墳時代・平安時代の住居跡等が検出されている。

中田畠中遺跡の所在する名取川右岸の袋原・中田地区及びその周辺には、数多くの遺跡が認められている。その多くは自然堤防上に立地するが、現在までのところ縄文時代の遺跡は確認されていない。遺跡は全て弥生時代以降のもので、その内でも明確な遺構が検出されているのは古墳時代以降の遺跡で、また遺跡数も古墳時代以降増加する。弥生時代の遺跡としては、南東0.9kmの戸ノ内遺跡(7)、西約2.5kmの安久東遺跡(8)、西南西約3kmの栗遺跡(9)等がある。また南西約1.4kmには、この時代の水田跡の可能性もある後河原遺跡(10)がある。古墳時代になると前期の遺跡には、方形周溝墓と住居跡を検出した戸ノ内、安久東遺跡が、南西約3kmには住居跡を検出した名取市清水遺跡(11)及び当遺跡があり、後期の遺跡としては、大集落を検出した栗遺跡がある。その他に前沖中(12)、前沖北(13)、神明(14)等の各遺跡、弁天跡(15)、安久東(16)、城丸(17)等の各古墳がある。これらの遺跡の多くはその後の奈良・平安時代の遺跡へと続く。奈良・平安時代になると遺跡数は一段と増し、新たに壇腰(18)、北(19)、中田南(20)、内手(21)、昭和北(22)等の遺跡が加わる。中世以降になると南東約1kmに四郎丸館跡(23)、西南西約2kmに前田館跡のような館跡の他、水田跡である後河原遺跡がある。このように袋原・中田地区及びその周辺は、弥生時代以降人々の生活の痕跡が絶えず刻み込まれてきた地域である。しかし、現在まで調査が加えられた遺跡は少なく、特に仙台バイパス以東では、当遺跡の他に後河原、戸ノ内遺跡が調査されたに過ぎない。これに対して対岸・名取川左岸の沖積面は、近年調査が進み多くの成果が得られている。山口遺跡(24)では縄文時代早期の遺物が発見され、隣接六反田遺跡(4)では縄文時代中期中葉の時期に、すでに沖積面に集落が形成されていたことが判った。また富沢水田遺跡(25)、山口遺跡では弥生時代から中世に渡る水田跡が、名取川と広瀬川の合流点に近い郡山遺跡(26)では、7世紀後半から8世紀初頭の多賀城創建前と考えられる官衙跡が検出され、今泉城跡(27)の調査では、中世から近世にかけての領主層の生活に関する貴重な資料を得ている。今後、名取川右岸の沖積面の調査が進めば、袋原・中田地区の歴史も徐々に明らかにされるであろうし、その時、初めて名取川下流域の沖積面に於ける各時代の遺跡が、一つつながりを持って歴史を物語っていくものと考える。

第Ⅱ章 調査の方法と概要

1. 調査に至る経過（第2・3図）

中田畠中遺跡の所在する袋原地区は、以前までは、仙台市内でも畠や水田が比較的多く残っている地域の一つであった。最近、当地区にも宅地化の波が押し寄せ、昔の面影を残す風景は徐々に失われつつある。昭和57年度には宅地造成に伴う事前調査が行なわれ（字畠中14-3）、古墳時代・平安時代の住居跡等が検出された。この都度、遺跡内（昭和57年度調査区の東側隣接地）、仙台市袋原字畠中10-1～4の畠地 989 m²が宅地造成されることとなった。仙台市教育委員会では、申請者、佐藤幸一郎氏と協議の結果、造成工事に先だち、地下遺構を損う部分を



第2図 遺跡範囲と調査区位置図

対象とする発掘調査を昭和59年4月16日より実施することとなった。

尚、本年度、当遺跡については別地点で、もう1件小規模な調査を行っている。これに加えて、昭和57年度の調査地点と区別するために、昭和57年度調査区を第1次発掘調査、当調査区を第2次発掘調査、今年度のもう1件の調査区を第3次発掘調査とした。それぞれの位置関係は第3図に示すとおりである。

2. 調査方法

調査区は調査対象区のほぼ中央に設定した（調査対象区は東西約70m、南北約14m）。調査区東西ライン（18m）は、調査対象区南端の東西に並ぶ境界杭を結んだ線と平行（北へ1.5m）とした。これと直交する調査区南北ライン（7.5m）は、磁北より約3°東へ傾く。調査は調査区北西杭を基準とし、南北ラインをA～C、東西ラインを2～7とする3×3mグリッドで実施した（東西ラインを2から始めたのは、調査区の拡張に備えてであったが、結果的には拡張は行なわなかった）。

3. 基本層位（第4図4、図版18-1）

基本層位はI～V層までの大別5層から成り、これらはさらに11層に細別される。

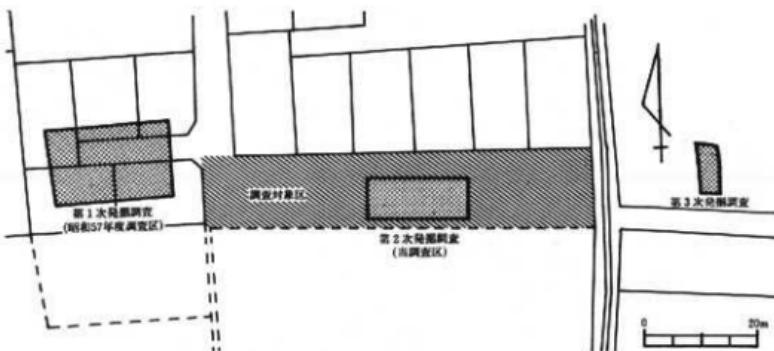
I層：シルトで粘性・しまりともなし。畑の耕作土で色調によりa・bに細分される。

I a層：2.5Y 4/6オリーブ褐色。層厚は15cm前後である。

I b層：10Y R 4/6に近い褐色。層厚は10cm前後である。

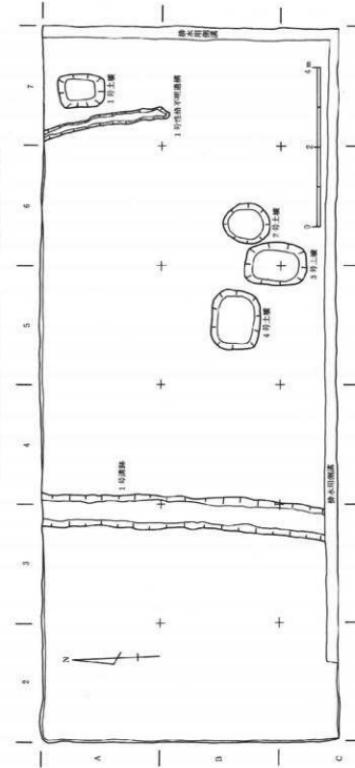
II層：暗褐色シルトで粘性・しまりともなし。混入物によりa・bに細分される。

II a層：10Y R 4/6に近い黄褐色シルトを斑点状に含む。層厚は5～15cm。

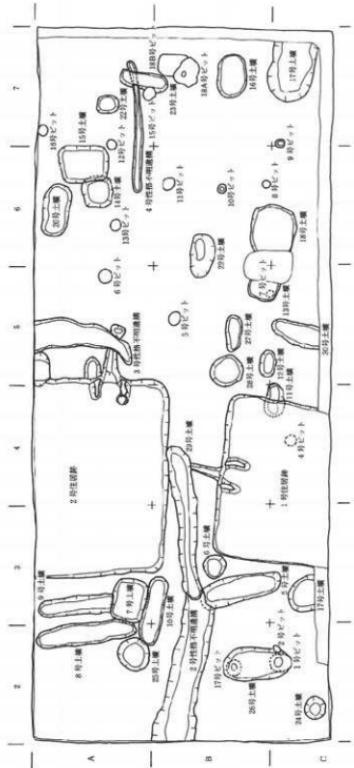


第3図 第1～3次発掘調査位置図

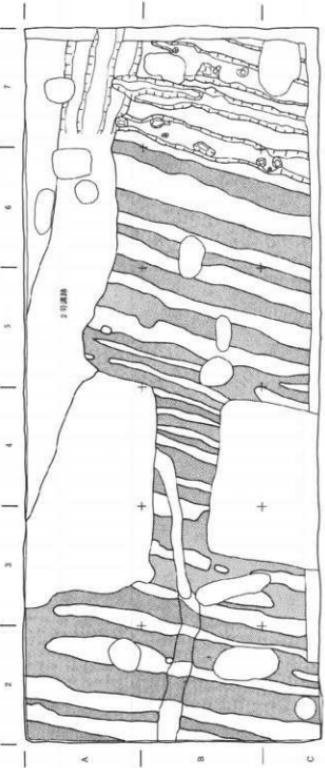
図1. Iib層・直角上面検出構造全体図



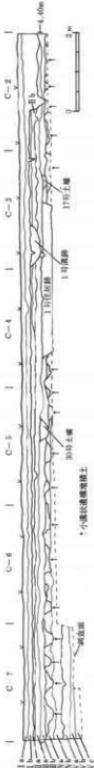
2. 直角上面検出構造全体図



3. M層上面検出構造全体図



4. 圖壁区検査セクション図



第4図 各層上面検出構造全体図、調査区南壁セクション図

II b 層 : 10Y R 4%。炭化物粒・焼土粒を含む。層厚は15cm前後で、調査区南東側には分布せず。上面が遺構検出面。

III 層 : にぶい黄褐色シルトで、粘性・しまりともなし。混入物により a・b に細分される。

III a 層 : 10Y R 4%。灰白色火山灰の小ブロックを少量含む。多量の炭化物・焼土粒・遺物(土師器・須恵器等)を含む。層厚は15cm前後。上面が遺構検出面。

III b 層 : 10Y R 4%。炭化物粒・焼土粒・遺物(土師器・須恵器等)を含む。層厚は15cm前後。上面が遺構検出面。

IV 層 : 暗褐色シルトで粘性・しまりともあり。混入物、明暗により a・b に細分される。

IV a 層 : 10Y R 4%。b 層に比でやや暗い。層厚は20cm前後。上面が遺構検出面。

IV b 層 : 10Y R 4%。灰黄褐色シルトを斑点状に含む。層厚は25cm前後。

V 層 : にぶい黄褐色粘土質シルトで、粘性・しまりともあり。若干の色調の違いで a (10Y R 4%), b (10Y R 4%), c (10Y R 4%) に細分される。それぞれ層厚は20cm前後である。

以上の内、I 層から IV a 層までは安定した層の堆積を示し、傾きも認められない。IV b 層以下は調査区を限ったため (3 × 2.5 m), 調査区全域にわたる分布状況は不明である。遺物は III b 層までみられるが、III a 層からの出土量が最も多い。IV 層以下は小範囲の調査ではあったが、遺物は出土しなかった。

4. 調査概要

昭和59年4月16日に調査を開始し、6月4日の終了まで、実働31日の調査日数を要した。調査面積は135 m²である。I 層(耕作土)は重機による排土を行い、II 層より人力による調査を実施した。遺構は II b 層上面、III a 層上面、III b 層上面、IV a 層上面の4面で検出された。II b 層上面では溝跡1条、性格不明遺構1基が、III a 層上面では土壠が4基検出されたのみであった。これに比べ、III b 層上面では住居跡2軒、土壠30基、性格不明遺構3基、ピット16個という多数の遺構が検出された。IV a 層上面では小溝状遺構と溝跡1条が検出されたが、IV 層面以下は造成工事による破壊が及ばない深度のため、7ライン (3 × 7.5 m) 分のみの調査を行った。IV 層以下についてはC-7グリッドを中心として (3 × 2.5 m) 70~100 cm掘り下げたが、遺構面、遺物は認められなかった。出土遺物は III b 層上面検出遺構内(特に住居跡)を中心として、楕円土器、土師器、赤焼土器、須恵器、陶磁器、土製品、石器、石製品、鉄製品等が平箱20箱程出土している。これらの多くは破片資料である。出土資料中、最も多いものは土師器で、全出土量の約9割を占める。

第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物

1. Ⅱ b 層上面検出遺構 (第4図1)

Ⅱ a 層排土後、Ⅱ b 層上面で検出された遺構である。溝跡1条（1号）、性格不明遺構1基（1号）が検出された。

(1) 1号溝跡 (図版2-2)

A・B・C-3・4グリッドにまたがり位置する。調査区をほぼ南北方向 (N - 5° E) に走行する。上端幅80cm前後、下端幅50cm前後で、深さは平均30cmを測る。底面は北端が南端より5cm程下っている。断面はひらたいU字状を呈し、下端ラインが不明瞭である。堆積土は黒褐色シルト質粘土の単層で、ややグライ化している。出土遺物は、堆積土中より土師器・赤焼土器・須恵器・識別不明な鉄製品の細片が出土したのみである。

(2) 1号性格不明遺構

A-7グリッドに位置する。南北に延びる細長い溝状の遺構で、北側は調査区外へ延びる。上端幅25cm前後、下端幅10cm前後で、深さは5cmと浅い。断面はひらたいU字状を呈す。堆積土は褐色シルトの単層で、出土遺物はない。

2. Ⅲ a 層上面検出遺構 (第4図1、図版2-1)

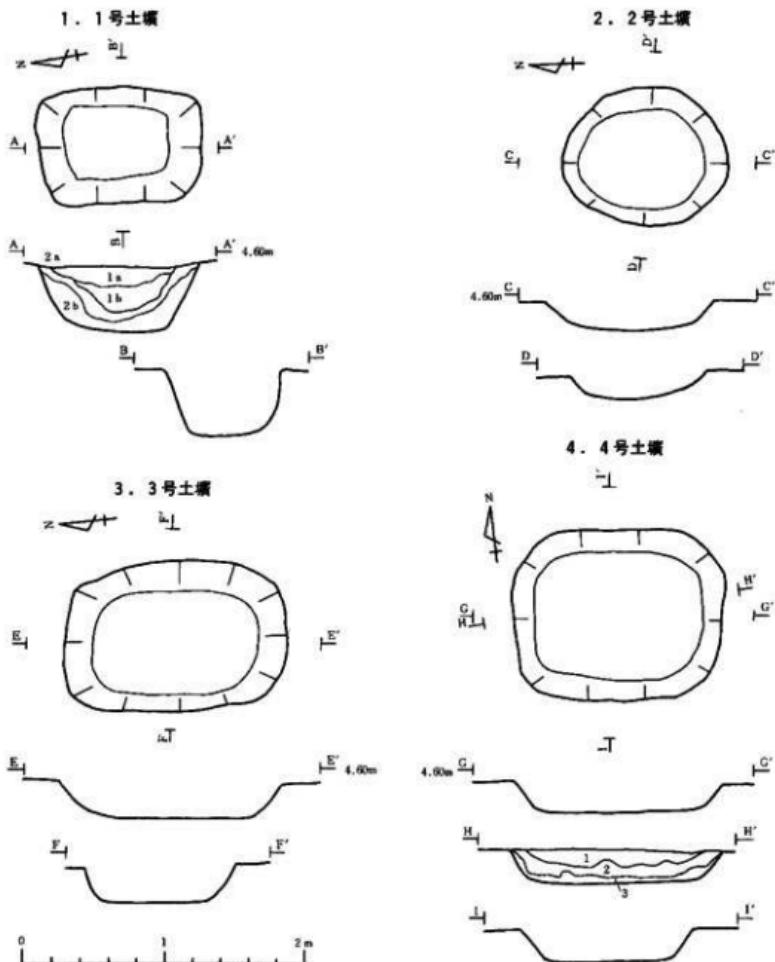
Ⅲ b 層排土後、Ⅲ a 層上面で検出された遺構である。土壙が4基（1～4号）検出された。

(1) 1号土壙 (第5図1、図版3-2)

A-7グリッドに位置する。上端・下端平面形ともほぼ長方形を呈する。上端規模115×85cm、下端規模75×50cm、深さ50cmを測る。壁面はやや強く立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は大別2層（細別4層）から成る。堆積土中からは、土師器・須恵器の細片が出土したのみである。

(2) 2号土壙 (第5図2、図版3-2)

B-6グリッドに位置する。上端・下端平面形とも円形にちかい楕円形を呈す。上端規模120×100cm、下端規模90×70cm、深さ20cmを測る。壁面は緩やかに立ち上り、底面はやや凹状である。堆積土は単層である。出土遺物は堆積土中より土師器片・須恵器片の他、中世陶器片（常滑産、甕）が1点（写真図版29-7）出土した。



選択名	剖面	土色	土性	粘性	しまり	混相物・備考
1号土壤	a	10YR4/2 黄褐色	砂	シルト	無	有 に似い黄褐色シルトを斑点状、炭化物。
	b	10YR5/2 黑褐色	色	シルト	有	褐色シルトを塊状。
	2a	10YR5/2 黑褐色	色	シルト	有	黒褐色シルトに似い黄褐色シルトを網状。
	b	10YR5/2 黑褐色	色	粘土質シルト	有	暗褐色シルトをブロック状。
2号土壤	单	2.5YR4/2 黄褐色	色	シルト	有	上部に炭化物(3~8mm)、礫土(1cm)を斑点状。
	单	2.5YR4/2 黄褐色	色	シルト	有	炭化物少量。
4号土壤	1	10YR4/2 黑褐色	色	シルト	無	礫土ブロック、炭化物を斑点状。
	2	2.5YR4/2 黑褐色	色	シルト	無	礫土、炭化物を斑点状。
	3	10YR4/2 に似い黄褐色	色	シルト	無	基本岩柱(3cm)解離。

第5図 1~4号土壤平・断面図

(3) 3号土壙 (第5図3、図版4-1)

B・C-5・6グリッドにまたがって位置する。上端・下端平面形とも隅丸長方形を呈する。上端規模160×110cm、下端規模120×75cm、深さ30cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がる。底面は平坦で、部分的に炭化物が付着していた。堆積土は単層である。出土遺物は堆積土中より、土師器・須恵器の細片が出土したのみである。

(4) 4号土壙 (第5図4、図版4-2)

B-5グリッドに位置する。上端・下端平面形とも隅丸長方形を呈する。上端規模150×120cm、下端規模120×90cmを測る。壁面・底面とも3号土壙と同様な状況を示す。堆積土は3層から成る。出土遺物は堆積土中より、土師器・須恵器の細片が出土したのみである。

3. III b層上面検出遺構 (第4図2、図版5)

III a層排土後、III b層上面で検出された遺構である。今回の調査で最も検出遺構数が多い調査面である。住居跡2軒(1・2号)、土壙26基(5号~30号)、性格不明遺構3基(2~4号)ピット16個が検出された。

(1) 1号住居跡 (第6~10図、図版6・7)

B・C-3・4グリッドに位置し、煙道の先端部を29号土壙、東壁の一部を11号土壙、堆積土を4号ピットにそれぞれ切られている。住居跡の南側(全体の約1/4)は調査区外のため未調査である。

【規模・平面形】南北辺の長さは不明であるが、東西辺は約4mである。平面形はほぼ方形を呈すると思われる。

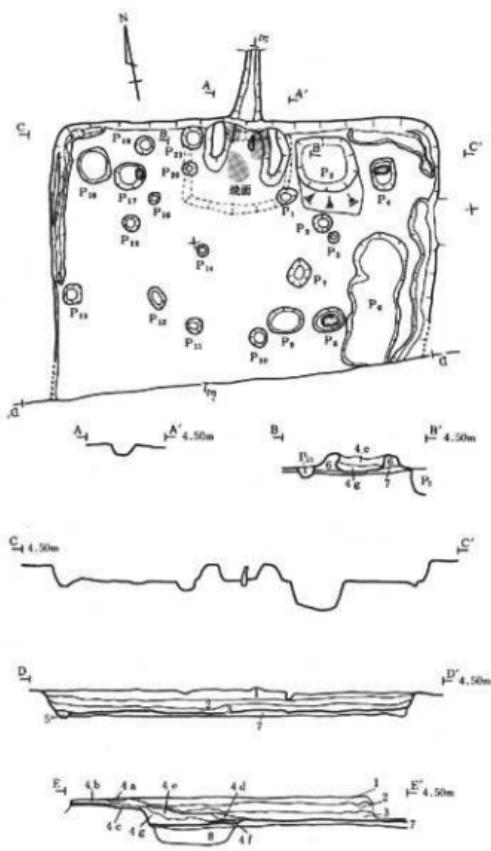
【堆積土】3層から成り、自然堆積状況を示す。カマド前面の床面上では、炭化物の広がりが認められた。堆積土1層中には灰白色火山灰の小ブロックを少量含む。

【壁】床面より急な角度で立ち上る。壁高は良好な部分で約25cmを測る。

【床面】やや中央部が盛り上る。全面に貼床が施されている。貼床の厚さは5cm前後である。

【ピット】22個検出された。柱痕が認められず、明確に柱穴と呼べるものはない。P4・P8・P17は底面に礫が置かれており、その間隔・配列よりP4・P17が柱穴となる可能性もある。この場合、柱間距離は約2.7mである。カマドの東に位置するP2は、貯蔵穴状のピットである。内よりは、廃棄したような状態で、ほぼ完形品を中心とする土師器环等が多数出土した。

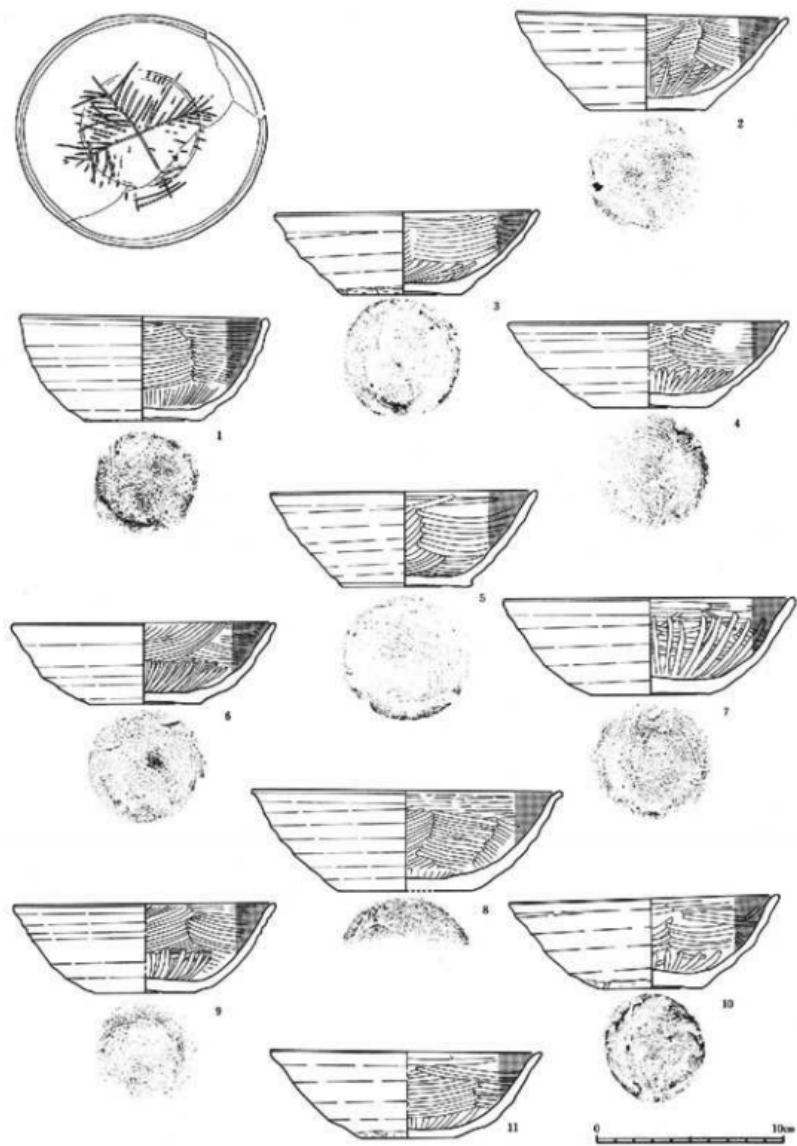
【周溝】全周はしておらず、断続的に壁際をめぐる。上端幅は10~15cm、深さは10cm以下で、横断面はひらいたU字状を呈す。



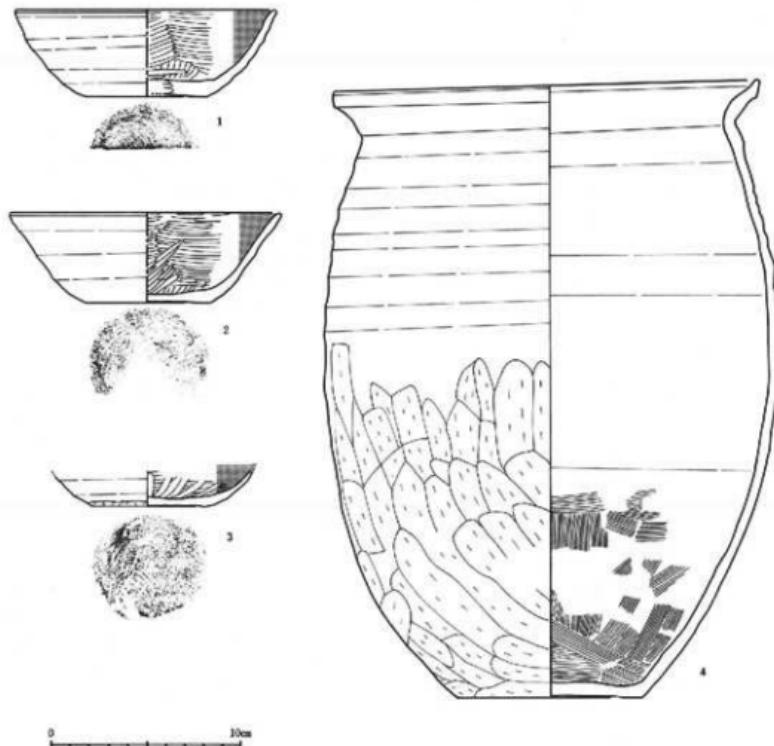
土庫註記

No.	細 部	土 色	土 性	粘 性	しまり	混 合 物	備 考
1	住 居 内 堆 積 土 1 層	10YR4/6 褐色	シルト質粘土	無	無	炭化物鉱、鐵土鉱を少量。	淡白色由山脈の小プロック少量。
2	住 居 内 堆 積 土 2 層	10YR4/6 に似る黃褐色	シ ル ト	無	無	炭化物鉱、鐵土鉱を少量。	
3	住 居 内 堆 積 土 3 層	10YR4/6 褐色	シ ル ト	有	有	炭化物鉱、鐵土鉱を多量。	
4	カ マ ド 内 埋 積 土 ① 層	10YR4/6 褐色	シ ル ト	や 有	有	炭化物鉱、鐵土鉱を少量。	
4a	カ マ ド 内 埋 積 土 ② 層	10YR4/6 に似る黃褐色	シ ル ト	無	無	無	鐵土プロック。
4c	カ マ ド 内 埋 積 土 ③ 層	10YR4/6 に似る黃褐色	シ ル ト	有	有	炭化物。燒土プロック。カマド埋積土。	
4d	カ マ ド 内 埋 積 土 ④ 層	10YR4/6 褐色	シ ル ト	無	無	炭化物。	
4f	カ マ ド 内 埋 積 土 ⑤ 層	10YR4/6 に似る黃褐色	シ ル ト	有	有	炭化物。燒土プロック。カマド埋積土。	
4g	カ マ ド 内 埋 積 土 ⑥ 層	10YR4/6 褐色	シ ル ト	有	有	無、炭化物。燒土鉱を多量。	
4h	カ マ ド 内 埋 積 土 ⑦ 層	10YR4/6 褐色	シ ル ト	有	有	無、炭化物鉱、燒土鉱を多量。	
5	底 溝 堆 積 土	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	有	有	炭化物。	
6	カ マ ド 通 過 土	10YR4/6 に似る黃褐色	粘 土	有	有		
7	住 居 敷 き 理 工 (動)土	10YR4/6 褐色	シルト質粘土	有	有	炭化物鉱。	
8	カ マ ド 下 方 理 工 (動)土	10YR4/6 に似る黃褐色	シルト質粘土	有	有	暗黃褐色シルト質粘土の小プロック。炭化物鉱を少量。	

第6図 1号住居跡平・断面図

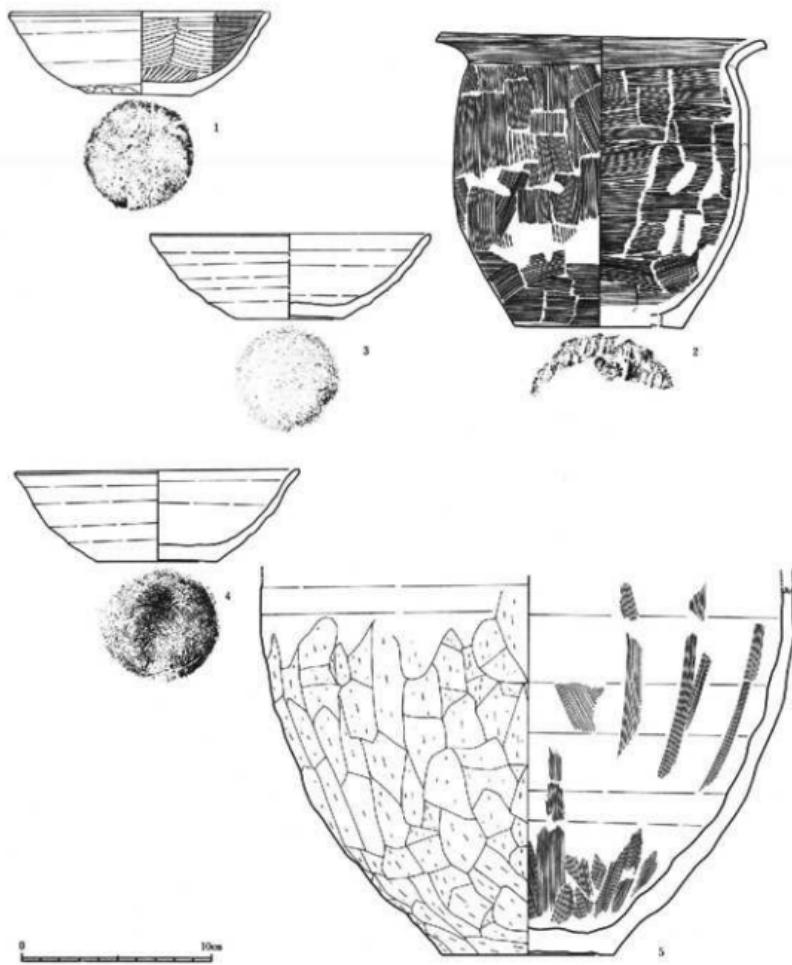


第7図 1号住居跡出土遺物1(土師器)



番号	出土 場所	登録 番号	種類	量				法 量cm ()内は復元 寸法	残存	分類	草 高 四 面
				外 面	内 面	口 径	体 径				
7-1	P.2	D-7	土器器 瓢	口一様：ロクロナデ 底：回転糸切り 手縫ちハラケズリ(縫跡)	ハラミガキ→ハラ支拂+	13.2	—	6.0	5.7	片	II B 19-3
7-2	P.2	D-11	土器器 瓢	口一様：ロクロナデ 底：回転糸切り	ハラミガキ→黑色處理	14.6	—	6.2	5.2	片	III 21-3
7-3	P.2	D-3	土器器 瓢	口一様：ロクロナデ 手縫ちハラケズリ(縫跡)	ハラミガキ→黑色處理	14.1	—	6.3	4.5	片	III 19-4
7-4	P.2	D-6	土器器 瓢	口一様：ロクロナデ 底：回転糸切り	ハラミガキ→黑色處理	(15.0)	—	6.1	4.6	片	—
7-5	P.2	D-2	土器器 瓢	口一様：ロクロナデ 底：回転糸切り	ハラミガキ→黑色處理	14.2	—	6.5	5.2	片	III 20-1
7-6	P.2	D-10	土器器 瓢	口一様：ロクロナデ 底：回転糸切り	ハラミガキ→黑色處理	14.0	—	5.8	4.4	片	III 20-2
7-7	P.2	D-5	土器器 瓢	口一様：ロクロナデ 底：回転糸切り	ハラミガキ→黑色處理	15.6	—	6.3	5.2	片	III 20-3
7-8	P.2	D-8	土器器 瓢	口一様：ロクロナデ 底：回転糸切り	ハラミガキ→黑色處理	16.5	—	(7.0)	5.4	片	III 20-4
7-9	P.2	D-9	土器器 瓢	口一様：ロクロナデ 底：回転糸切り→手縫ちハラケズリ(縫跡)	ハラミガキ→黑色處理	(18.0)	—	5.2	4.8	片	NB —
7-10	P.2	D-4	土器器 瓢	口一様：ロクロナデ 手縫ちハラケズリ(縫跡)	ハラミガキ→黑色處理	14.4	—	5.3	4.9	片	NB 22-4
7-11	P.2	D-3	土器器 瓢	口一様：ロクロナデ 底：回転糸切り→ハラケズリ(縫跡)	ハラミガキ→黑色處理	14.4	—	5.0	4.7	片	NB 22-3
8-1	床面	D-12	土器器 瓢	口一様：ロクロナデ 底：回転糸切り	ハラミガキ→黑色處理	(13.8)	—	6.1	4.7	片	—
8-2	床面	D-14	土器器 瓢	口一様：ロクロナデ 底：回転糸切り	ハラミガキ→黑色處理	(14.4)	—	6.5	4.9	片	—
8-3	床面	D-13	土器器 瓢	口一様：ロクロナデ 手縫ちハラケズリ(縫跡)	ハラミガキ→黑色處理	—	—	5.8	—	片	—
8-4	床面	D-16	土器器 瓢	口一様：ロクロナデ→ハラケズリ(縫跡)	ロクロナデ→ハラケズリ(縫跡)	22.7	24.0	9.7	32.9	片	II B 24-2

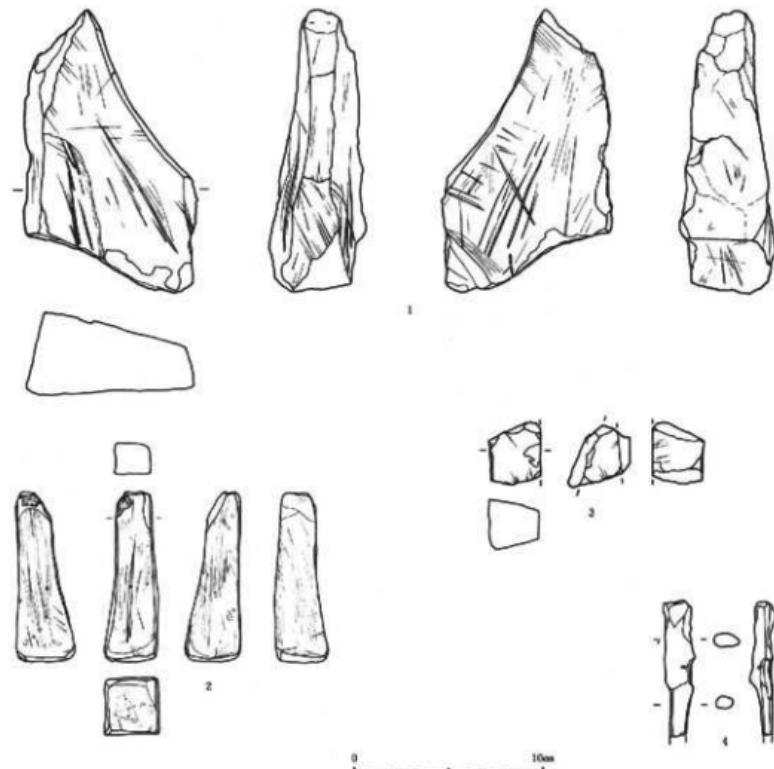
第8図 1号住居跡出土遺物2(土器器)



調査 番号	出 土 地 点	登 録 番 号	種 類	圖		法 量 cm	内 外 は 保 有 状 態	残 存 状 態	分 類	考 古 学 的 意 義	
				外 面	内 面						
1	埴 織 土	D-15	土 器 環	口一縁: ロクロナダ→手拂もヘラケズリ (下下端) 体: ロヨコナダ 底: 回転糸切り	ハラミギタ→黒色地附 (下下端)	13.8	—	5.4	4.5	片 N.B	21-4
2	堆 積 土	C-1	土 器 環	口一縁: ヨコナダ 体: ハケメ 線: 繩狀毛 端	ハケメヨコナダ (口 縁)	17.6	15.7 (9.0)	15.6	5%	I	25-4
3	P-2	D-E-1	赤燒土器 環	口一縁: ロクロナダ 底: 回転糸切り	ロクロナダ (15.0)	—	5.7	4.6	—	—	23-2
4	床 面	D-E-2	赤燒土器 環	口一縁: ロクロナダ 底: ロクロナダヘラケズリ (下)	ロクロナダ	15.0	—	6.3	4.9	片 —	23-3
5	P-2	E-7	須 恵 器 環	口一縁: ロクロナダヘラケズリ (下) 底: ヘラケズリ	ロクロナダ→底?ナダ	—	—	9.2	—	片 —	27-3

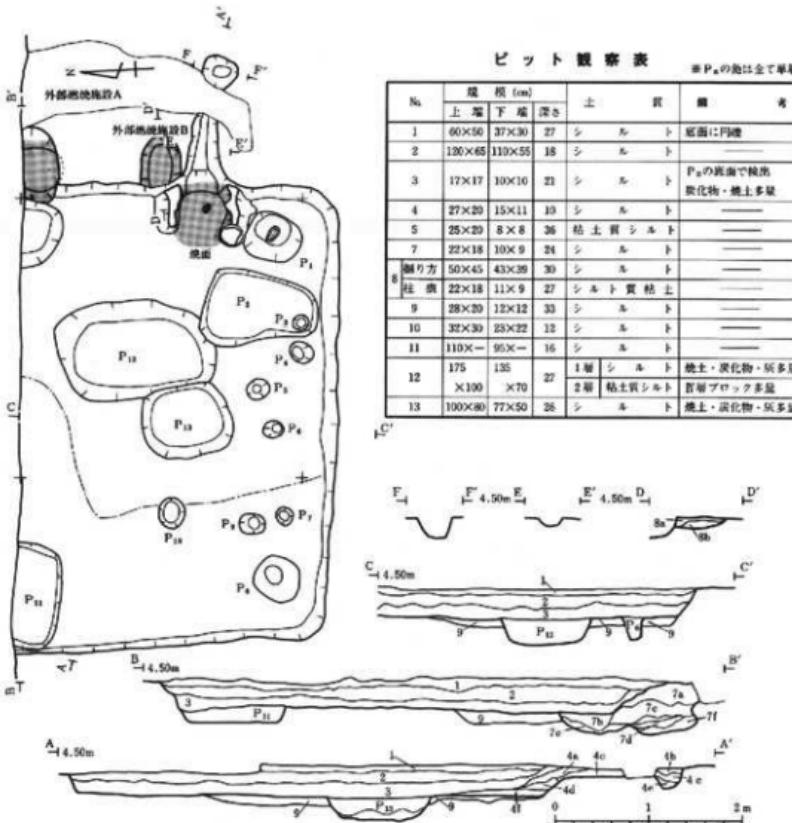
第9図 1号住居跡出土遺物3(土師器・赤焼土器・須恵器)

【カマド】北壁ほぼ中央に位置する。燃焼部はやや凹状となっており、幅40cm、奥行き50~60cmを測る。中央よりやや東側の奥壁寄りには、支脚用の自然礫が直立している。支脚は貼床施工時に埋め込まれている。両袖は粘土のみによる構築である。焚き口から燃焼部及び両袖内側には、強い焼け面が認められる。煙道は先端が29号土壤に切られ、全長が不明であるが、残存長80cm、上端幅17~30cm、横断面U字状である。カマド内堆積土は6層から成り、最下層には多量の灰を含む。尚、カマド本体の貼床直下には、カマドより一まわり大きい長方形の掘り込み（上端規模115×95cm、深さ24cm）が認められた（破線部分）。



図版番号	出土点	地質	種類	法寸cm：内は現存部			考	写真番号
				長	幅	厚		
1	床	K-6	礫石	9.2	9.2	5.2	ほぼ完形。中心的断面4面（表裏面・両側面）表裏面に研磨面。	30-3
2	床	K-5	礫石	9.2	3.2	2.9	完形。断面4面（表裏面・両側面）。表裏・両側面に研磨面。上下面に敲打面。	30-2
3	堆積土	K-4	鉄石	(3.3)	2.8	3.0	上下面・片側面欠失。残存3面。全て敲打面。	—
4	堆積土	N-5	鉄製品	(7.3)	1.4	0.75	欠損品。鉄錆付着著しい。	30-9

第10図 1号住居跡出土遺物4(石製品・鉄製品)



土層記述

層 部	土 色	土 性	結 性	しまり	固 和 物 ・ 像	考 査
1 住居内堆積土 1層	10YR5/6に赤い黃褐色	シルト	無	無	泥化物紋、燒土粒を少見。灰白色火山灰小ブロックを少量。	
2 住居内堆積土 2層	10YR5/6暗 黄褐色	シルト	無	有	有	泥化物紋。
3 住居内堆積土 3層	10YR5/6暗 黄褐色	シルト	有	有	泥化物紋、燒土粒を多量。	
4 カマド内堆積土(1)層	10YR5/6暗 黄褐色	シルト	無	無	燒土粒を細胞状。	
5b カマド内堆積土(2)層	10YR5/6に赤い黃褐色	シルト	無	無	燒土粒を多量。	
4c カマド内堆積土(3)層	10YR5/6赤 黄褐色	シルト	有	有	1cm以上、泥化物ブロック。カマド焼成土。	
4d カマド内堆積土(4)層	10YR5/6赤 黄褐色	シルト	無	無	1cm焼土ブロック。カマド焼成土。	
4e カマド内堆積土(5)層	10YR5/6赤 黄褐色	シルト	無	無	燒土粒を少量。	
4f カマド内堆積土(6)層	10YR5/6赤 黄褐色	シルト	有	有	板、泥化物紋、燒土粒を多量。	
5 カマド支脚構造物(方型土)	2.5 YR5/6暗 黑褐色	シルト質粘土	有	有	板、泥化物紋、燒土粒を少量。	
6 カマド被覆土	10YR5/6灰 黑褐色	粘土	有	有	泥化物、燒土粒を少量。	
7a 外部燃焼施設 A 壁 1層	10YR5/6灰 黑褐色	粘土質シルト	やや有	有	1cm泥化物、燒土ブロック。	
7b 外部燃焼施設 A 壁 2層	10YR5/6灰 黑褐色	粘土質シルト	有	有	泥化物紋、1cm燒土ブロックを多量。	
7c 外部燃焼施設 A 壁 3層	10YR5/6灰 黑褐色	シルト質粘土	有	有	泥化物紋を少見。	
7d 外部燃焼施設 A 壁 4層	10YR5/6灰 黑褐色	シルト質粘土	有	有	泥化物紋、燒土粒。	
7e 外部燃焼施設 A 壁 5層	10YR5/6灰 黑褐色	シルト質粘土	有	有	1~3cm燒土ブロック、1cm泥化物ブロックを多量。	
7f 外部燃焼施設 A 壁 6層	10YR5/6灰 黑褐色	シルト質粘土	やや有	有	泥化物紋、燒土粒。	
8a 外部燃焼施設 B 壁 1層	10YR5/6灰 黑褐色	粘土質シルト	やや有	有	泥化物紋、1cm燒土ブロックを少量。	
8b 外部燃焼施設 B 壁 2層	10YR5/6灰 黑褐色	シルト質粘土	やや有	有	1cm泥化物、燒土ブロックを多量。	
9 住居底力方柱(記録)	10YR5/6灰 黑褐色	シルト質粘土	やや有	有	泥化物紋。	

第11図 2号住居跡平・断面図

〔出土遺物〕土師器、赤焼土器、須恵器、石製品（砥石）、鐵製品（識別不明）、鉄滓が出土した。土器の内、図化されたものは土師器17点（環15点、甕2点）、赤焼土器2点（环）、須恵器1点（甕）であった。この内P2出土のものは、土師器環11点、赤焼土器1点、須恵器甕1点の計13点で、土師器環の内面にはヘラ書きの文様が描かれているものがある（第7図1）。これら出土遺物で当住居跡に伴うと考えられるものは、床面、カマド内、P2出土のものである。

（2）2号住居跡（第11～20図、図版8・9）

1号住居跡の北側、A・B-3・4・5グリッドにまたがって位置する。煙道、外部燃焼施設Aの一部を2号性格不明遺構に切られている。住居跡の（側（全体の約%）は調査区外のため、未調査である。尚、当住居跡は、カマドが改築された可能性が強い。

〔規模・平面形〕南北辺の長さは不明であるが、東西辺は約5mである。平面形は方形を呈するものと思われる。

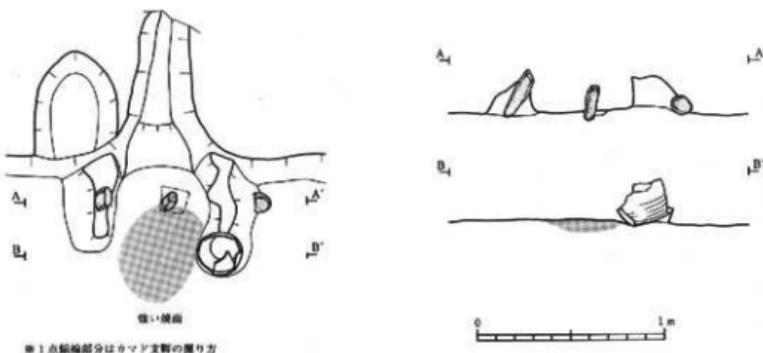
〔堆積土〕3層から成り、自然堆積状況を示す。下層になるに従い、炭化物粒、焼土粒の混入が多くなる。堆積土1層中には灰白色火山灰の小ブロックを少量含む。また、カマド前面を中心とした床面上では、炭化物の広がりが認められた。

〔壁〕床面から急な角度で立ち上り、壁高は良好な部分で約30cmを測る。

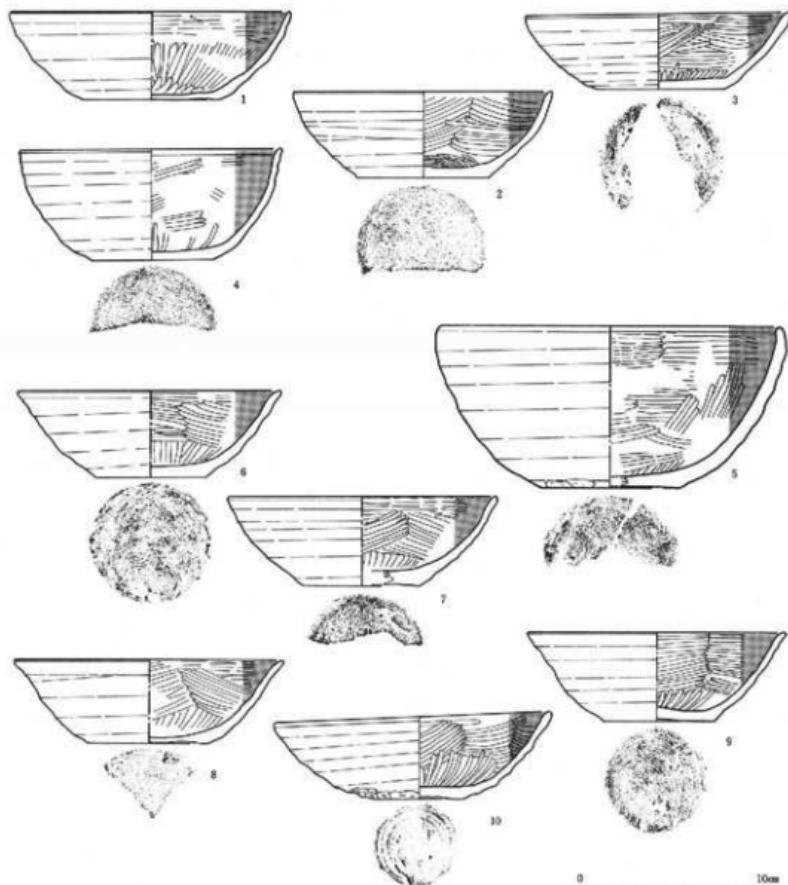
〔床面〕ほぼ平坦である。住居跡東側（破線より東側）は厚さ10cm前後の貼床が施されている。

〔ピット〕13個検出された。この内P1、P8は柱穴と考えられる。柱間距離は3.7mである。P8は柱痕が認められたが、P1では認められなかった。ただし、底面に円礫が1個置かれていた。P2・P12・P13は貯蔵穴状の規模を呈するピットである。それぞれ重複関係を持ち、P12はP2に切られているが、P12・P13の新旧関係は明確にできなかった。これら3ピットの堆積土中には、他のピットと異なり、多量の炭化物・灰が含まれている。

〔カマド〕東壁南側寄りに位置する。燃焼部は床面とほぼ同一レベルで、幅50cm、奥行き55cm

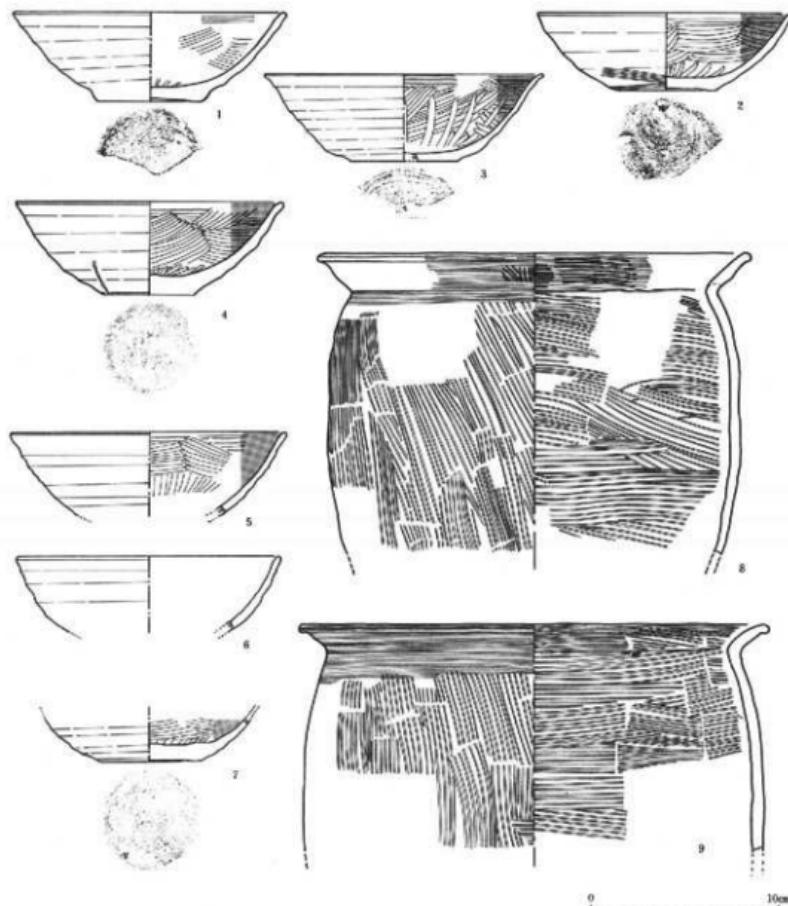


第12図 2号住居跡カマド平・断面図



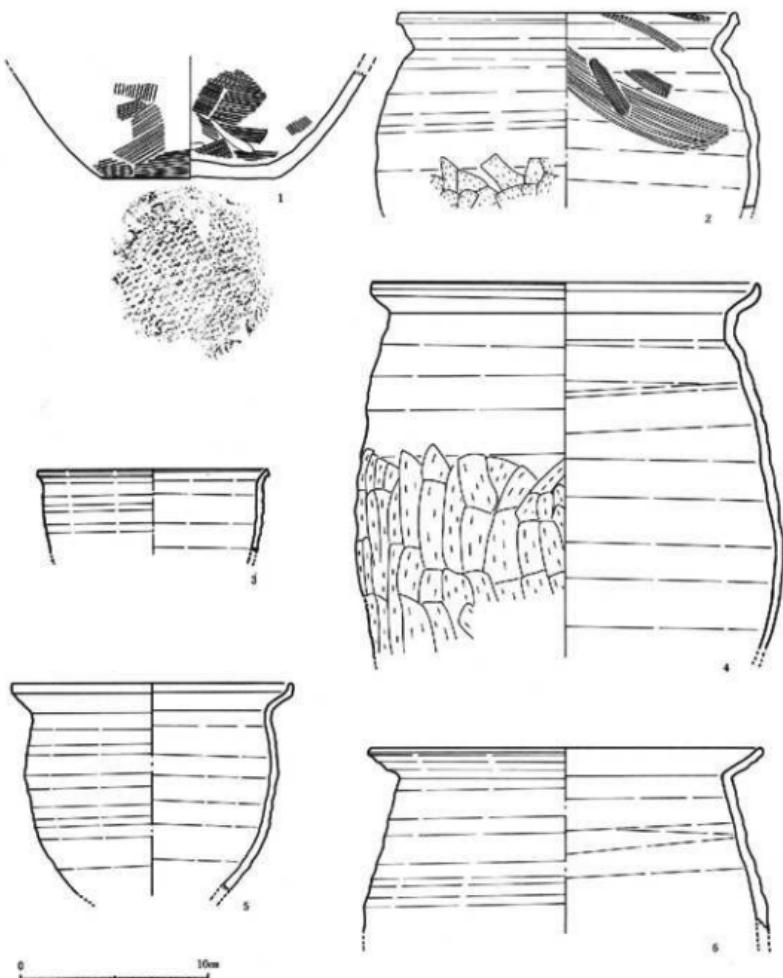
回数 番号	出土地点 番号	文 様 番 号	種 類	圖 形		法 mm (内は復元寸 引 径 幅 高 度)	現 存	分 類	写 真 図 版
				外 面	内 面				
1	P 12	D-29	土師器 环	口一伴 : ロクロナデ 底 : 土師地ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	(14.9) (7.3) 4.7	△	I	—
2	床面	D-23	土師器 环	口一伴 : ロクロナデ 底 : 土師地	ヘラミガキ→黒色処理	(13.8) 6.9 4.6	△	I	—
3	外壁断続 隙波 A	D-22	土師器 环	口一伴 : ロクロナデ 底 : 土師地	ヘラミガキ→黒色処理	14.2 6.7 4.0	△	I	19-2
4	P 2	D-25	土師器 环	口一伴 : ロクロナデ 底 : 土師地	ヘラミガキ→黒色処理	(14.0) (6.5) 5.9	△	II B	—
5	床面	D-27	土師器 环	口一伴 : ロクロナデ 底 : 土師地	ヘラミガキ→黒色処理	(18.6) 7.4 8.7	△	II A	—
6	P 2	D-32	土師器 环	口一伴 : ロクロナデ 底 : 土師地	ヘラミガキ→黒色処理	(14.0) 5.9 4.7	△	II	—
7	P 2	D-30	土師器 环	口一伴 : ロクロナデ 底 : 土師地	ヘラミガキ→黒色処理	(14.3) (6.0) 4.8	△	—	—
8	カマ F	D-31	土師器 环	口一伴 : ロクロナデ 底 : 土師地	ヘラミガキ→黒色処理	(14.3) (6.5) 4.5	△	—	—
9	カマ F	D-34	土師器 环	口一伴 : ロクロナデ 底 : 土師地	ヘラミガキ→黒色処理	(13.8) 5.7 4.8	△	II	21-1
10	床面	D-19	土師器 环	口一伴 : ロクロナデ 底 : 土師地	ヘラミガキ→黒色処理	14.6 4.7 4.5	△	II B	22-1

第13図 2号住居跡出土遺物1(土師器)



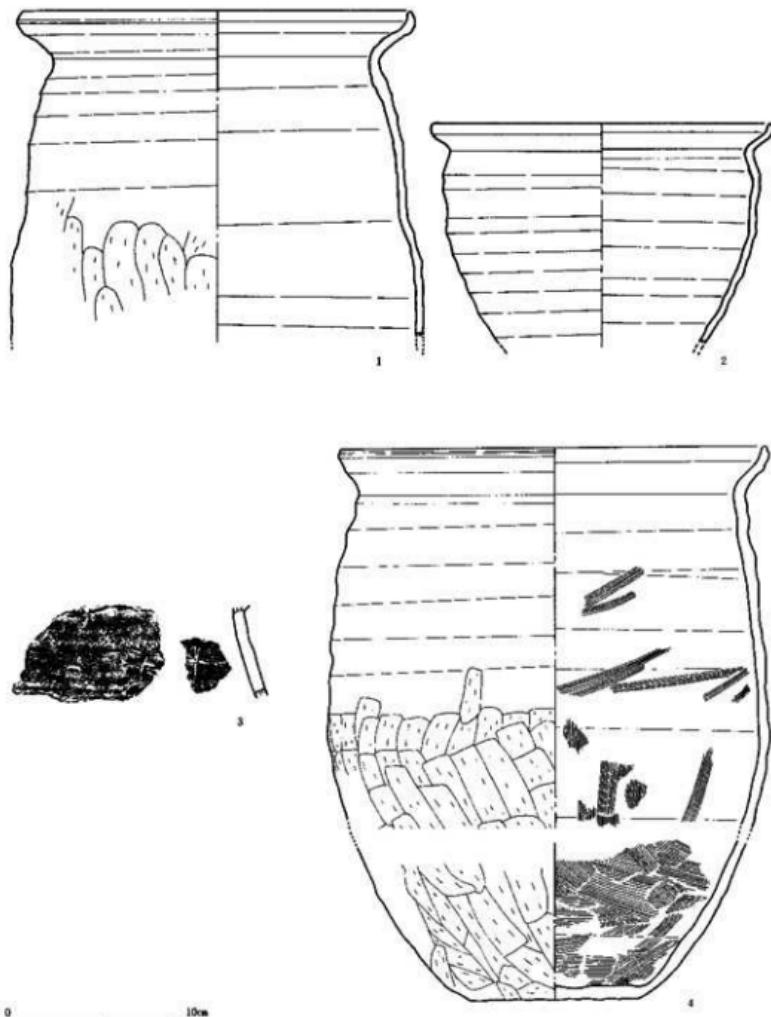
回収番号	出土地点	性別	年齢	種類	測定				法基cm	内は深さmm	残存	分類	写真
					外	内	径	底径					
1 カマド	D-17	土師器	环	口二件：ロクロナデ 瓶：回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理 （二次焼成を受ける）	(14.5)	—	(5.5)	4.8	%	BB	—	
2 P12	D-24	土師器	环	口二件：ロクロナデ→指ナデ（傳下端） 瓶：回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	13.5	—	5.1	4.2	%	BB	22-2	
3 床面	D-25	土師器	环	口二件：ロクロナデ 瓶：回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	(14.8)	—	(5.6)	4.8	%	BB	—	
4 床面	D-20	土師器	环	口二件：ロクロナデ 瓶：回転糸切り→ヘラ脱刀「X」	ヘラミガキ→黒色処理	14.2	—	4.9	5.0	%	BB	23-1	
5 P 2	D-28	土師器	环	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色処理	(14.8)	—	—	—	%	—	—	
6 カマド	D-33	土師器	环	ロクロナデ	不規（二次焼成を受ける）	(14.0)	—	—	—	%	—	—	
7 床面	D-26	土師器	环	ロクロナデ 瓶：回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	—	—	5.5	—	%	—	—	
8 外部焼成 施 付 A	C-2	土師器	瓶	ハケメ→ヨコナデ(口縁)	ハケメ→ヨコナデ(口縁)	(23.1)	(22.0)	—	—	%	I	26-2	
9 P12	C-3	土師器	瓶	口：ヨコナデ 瓶：ハケメヨコナデ(上縁)	ハケメ→ヨコナデ(口縁)	(25.0)	(24.5)	—	—	%	I	26-1	

第14図 2号住居跡出土遺物2(土師器)



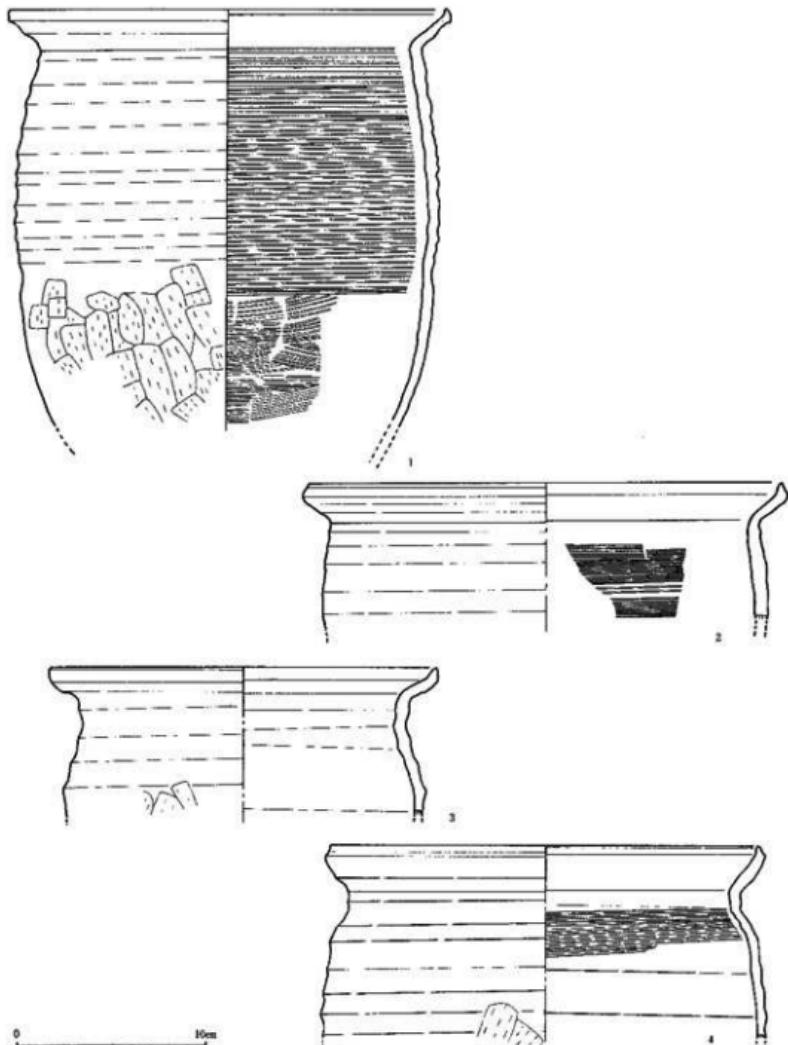
図版 番号	出土地点	登録 番号	種類	鈴		蓋			法螺(1)内は復元圖			現存	分類	参考 図版
				外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面			
1	カマド	C-7	土師器 覆	体:ハナメ	底:刷毛板	ハケヌ	—	—	9.4	有	I	—	—	—
2	カマド	D-36	土師器 覆	ロクロナデ→ヘラケヌリ(体下半)	ロクロナデ→ヘラナデ	(18.5)	(20.4)	—	—	有	II B	—	—	—
3	床面	D-49	土師器 覆	ロクロナデ	ロクロナデ	(12.4)	(11.8)	—	—	有	II C	—	—	—
4	カマド縁	D-47	土師器 覆	ロクロナデ→ヘラケヌリ(体中下半)	ロクロナデ	20.7	22.8	—	—	有	II B	24-3	—	—
5	カマド	D-37	土師器 覆	ロクロナデ	ロクロナデ	(15.0)	(13.6)	—	—	有	II C	—	—	—
6	P12	D-44	土師器 覆	ロクロナデ	ロクロナデ	(21.0)	(21.6)	—	—	有	II B	—	—	—

第15図 2号住居跡出土遺物3(土師器)



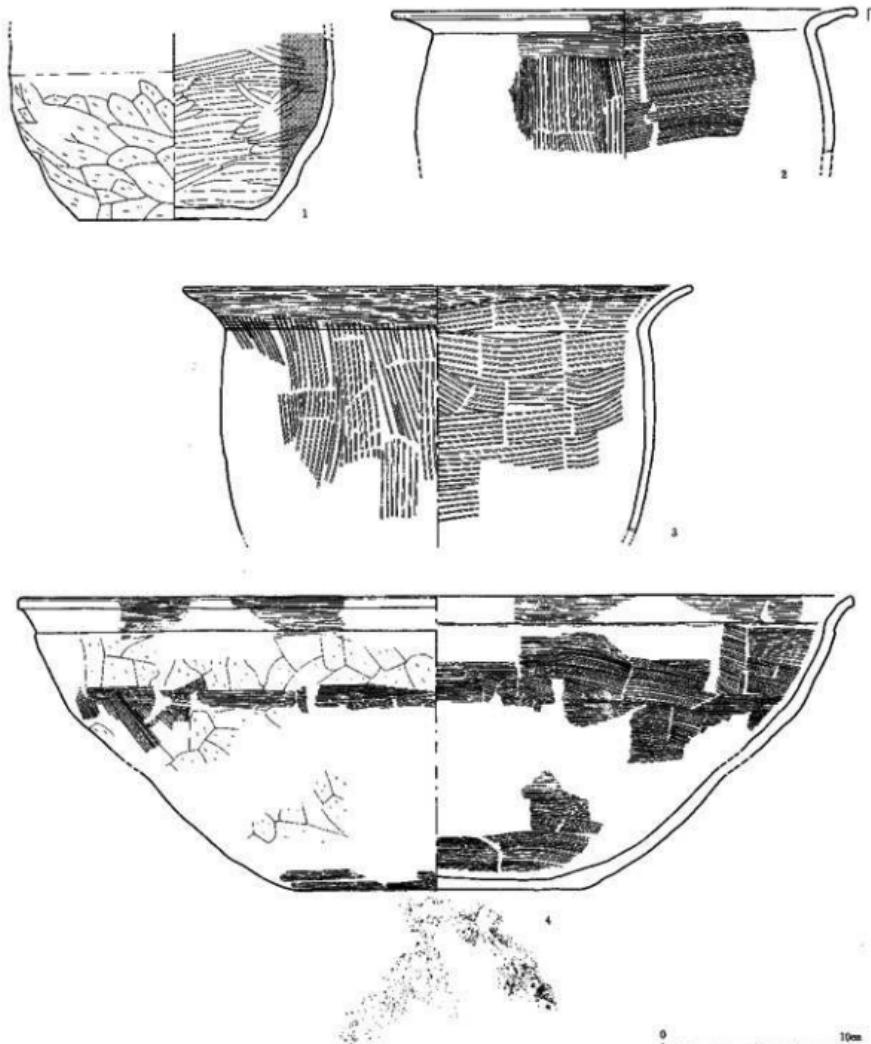
房版 番号	出土地点 番号	性 別	種 類	測 量		法 則cm	内 部 構 造	機 序	分 類	写 真 図
				外 面	内 面					
1	カマF	D-42	土器器 類	ロクロナデ→ヘラケヌリ (内下部)	ロクロナデ	(21.1) (21.8)	—	—	H	II B
2	P12	D-46	土器器 類	ロクロナデ	ロクロナデ	(18.2) (16.9)	—	—	H	II C
3	P13	D-49	土器器 類	ロクロナデ→ヘラヌシ?	ロクロナデ	—	—	—	—	2B-1
4	NE	D-46	土器器 類	ロクロナデ→ヘラケヌリ (内下部)	ロクロナデ→ヘラナデ (内一部)	22.9	23.5	8.9 (29.5) 最深	H	II B 25-2

第16図 2号住居跡出土遺物4(土器器)



測量 番号	出土地点	性 格	種 類	測 量		計 算	内に米元地	残 存	分類	考 證
				外 面	内 面					
1 床面	D-48	土師器	裏	ロクロナデ→ヘラケズリ(体下半)	ロクロナデ→同様ハケメ(体上部) ハケメ(体下部)	23.4 (25.8)	22.4 (23.6)	— 以上	片 II A	25-1
2 カマド	D-51	土師器	裏	ロクロナデ	ロクロナデ→同様ハケメ(体)	(25.8)	—	片 II A	—	—
3 F 2	D-43	土師器	裏	ロクロナデ→ヘラケズリ(体下半)	ロクロナデ	(20.6)	(19.2)	—	片 II A	—
4 地盤土	D-38	土師器	裏	ロクロナデ→ヘラケズリ(体下半)	ロクロナデ→同様ハケメ(体上部)	(25.3)	(23.6)	—	片 II B	—

第17図 2号住居跡出土遺物5(土師器)

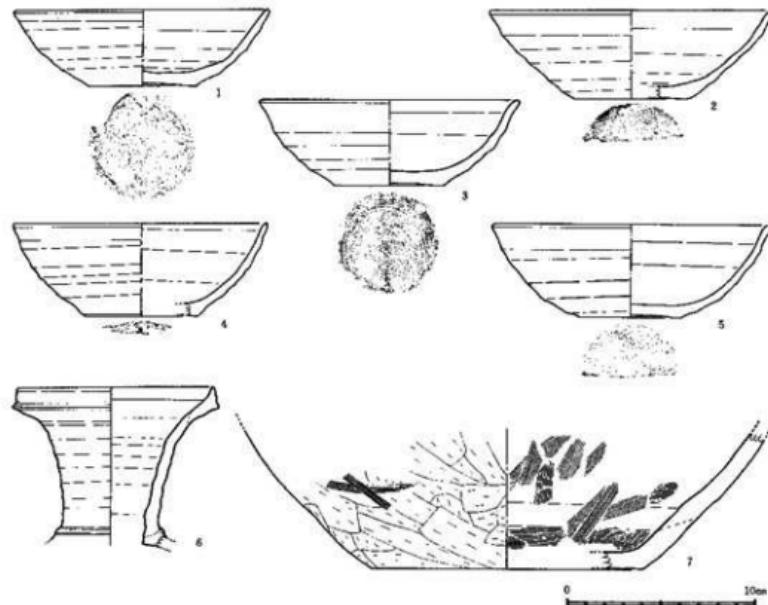


区分 番号	出土地点 番号	径 24 横 16 高 10	種類	調		性	法面cm (内は復元値)	残存	分類	写真 図版
				外 面	内 面					
1	堆積土 D-39	上縁器 壺	神: ワタナベ→ヘラタヌリ(下半) 内: ハラタヌリ		ハラミガキ→黑色処理	— (17.4)	10.0	—	片	Ⅱ D —
2	堆積土 C-4	土師器 壺	神: ワタナベ→ヨコナデ(上縁) 内: ハケメ→ヨコナデ(口縁)		ハテメ→ヨコナデ(口縁)	(24.7)	(22.3)	—	片	I —
3	堆積土 C-5	土師器 壺	ハケメ→ヨコナデ(口縁) 内: ヨコナデ 体: ハタメ→ヘラタヌリ 底: ヘラタヌリ		ハケメ→ヨコナデ(口縁)	(27.2)	(23.1)	—	片	Ⅰ 26-3
4	堆積土 C-8	上縁器 壺		口: ヨコナデ 体~底: ハケメ 底: ヘラタヌリ	口: ヨコナデ 体~底: ハケメ (44.4) — (15.0) (16.0)	—	—	—	片	27-1

第18図 2号住居跡出土遺物6(土師器)

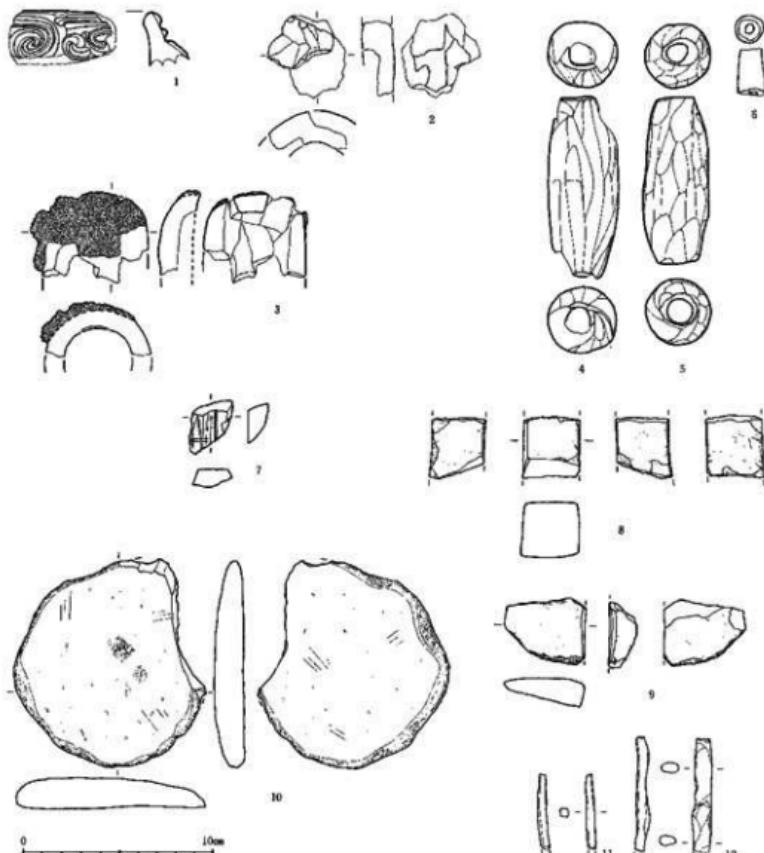
を測る。中央部には支脚用の棒状の自然礫がほぼ直立している。両袖には部分的に自然礫が構築土内に埋め込まれている。加えて、南側袖の先端部には、倒立した土器容器（第15図4）が利用されている。焚き口から燃焼部及び両袖内側には加熱痕が認められ、特に支脚より前面の燃焼部が、強い焼け面となっている。煙道は長さ110cm、上端幅20~50cm、横断面U字状で、先端に底面が15cm下った、上端平面形が橢円形状の溝出し部が付く。カマド内堆積土は大別3層（細別5層）から成る。最下層は多量の灰を含み、一部カマド外の床面まで流出している。

〔外部燃焼施設〕東壁北側（A）、カマド北側袖上（B）に位置する。ともに底面、壁面が焼けている。Aは北側部分が調査区外へ延び未掘のため、幅は不明であるが、上端の長さは70cmを測る。深さは60cm（床面からは-20cm）で、壁面はオーバーハングしている。底面、壁面とも



調査 番号	出土地点	層 番 号	種 類	調 査 場		法 量 cm ³	内 は復元 度	残存	分類	写 真 図版
				外 面	内 面					
1	P 2	D E - 3	赤燒土器 环	口～底：ロクロナデ 底：圓錐条切り	ロクロナデ	(13.6)	5.7	4.0	Ⅳ	—
2	P 2	D E - 4	赤燒土器 环	口～底：ロクロナデ 底：圓錐条切り	ロクロナデ	(15.3)	(6.6)	4.5	Ⅳ	—
3	堆積土	D E - 5	赤燒土器 环	口～底：ロクロナデ 底：圓錐条切り	ロクロナデ	(13.9)	5.9	4.6	Ⅳ	— 23-4
4	P 12	E - 1	須 惠 器 环	口～底：ロクロナデ 底：圓錐条切り	ロクロナデ	(13.5)	(6.0)	5.0	Ⅳ	—
5	堆積土	E - 1	須 惠 器 环	口～底：ロクロナデ 底：圓錐条切り	ロクロナデ	(14.8)	(5.5)	5.0	Ⅳ	—
6	床面	E - 9	須 惠 器 直	ロクロナデ	ロクロナデ	10.3	—	—	Ⅳ	— 23-2
7	P 12	E - 8	須 惠 器 瓢 底：ヘラケシリ→ヘラナデ 底：ヘラケシリ	ロクロナデ→ヘラナデ	ロクロナデ→ヘラナデ	— (14.4)	—	—	—	—

第19図 2号住居跡出土遺物7(赤燒土器・須惠器)



編 番 号	出 土 地 点	整 理 番 号	性 質	法量cm			（内）現存量	備 考	年 代 同 様	
				長	幅(外径)	厚(往復)				
1	堆積土	A-1	陶文土器	—	—	—	LJ部分破片。外側：陶文（溝文）。内側面とも赤色化。	—	—	
2	堆積土	P-8	有口	—	—	—	細片。外側面とも赤色化。	28-9	—	
3	堆積土	P-9	器口	—	5.0?	—	細片。先端部鉋狀付着。	28-10	—	
4	堆積土	P-2	上	縫	9.8	3.7	1.2	瓦残存。外側：オサエ後縫いミガキ。	28-2	—
5	堆積土	P-3	土	縫	8.9	3.5	1.15 ~1.25	ほぼ光面。外側：オサエ後縫いミガキ。	28-4	—
6	堆積土	P-4	下	縫	(2.5)	1.5	0.45	瓦残存。外側：ミガキ。	28-6	—
7	堆積土	K-8	石	(3.00)	(2.2)	(0.9)	小破片。残存1面。研磨面。	—	—	
8	堆積土	K-9	石	(3.2)	2.9	3.0	上・下兩欠失。残存4面。全て暗面。	30-1	—	
9	堆積土	K-7	石	(3.6)	(4.4)	1.4	平面四角形。外側4面。研磨面2面。片面面無色化。	—	—	
10	堆積土	K-1	磨	石	11.0	(10.0)	1.6	一部欠失。全面縦縫。表面凸状。裏面平坦。裏面中央付近に鋸い縫合痕。	—	—
11	P-12	N-3	鉄製品	(4.1)	0.45	0.45	矢頭品。断面正方形。	30-10	—	
12	堆積土	N-4	鉄製品	(6.1)	1.0	0.5	矢頭品。鉄錆付着著しい。	30-5	—	

第20図 2号住居跡出土遺物 8 (縄文土器・土製品・礫石器・石製品・鉄製品)

強く焼けている。住居内には、これと連結する上端長さ80cm、深さ20cmの掘り込みが続く。この掘り込みの底面、壁面には焼け面は認められなかった。堆積土は6層から成り、下層に従い焼土・炭化物が増す。Bは上端幅45cm、上端長さ60cmの平面形舌状形のもので、深さは10cmと浅い。堆積土は2層で、下層には焼土ブロックが詰っており、底面・壁面とも強く焼けている。A・Bとも当住居跡に伴う何らかの燃焼施設と考える。また、堆積土の状況等から人為的に埋め戻されたものと理解する。Aはその規模より、当住居跡の古い段階のカマドとも考えられる。また、Bはその設置場所より、新しいカマドの時期には機能していなかったと思われる。

〔出土遺物〕土師器、赤焼土器、須恵器を中心として、土製品（土鍤、羽口）、石器（礫石器）、石製品（砥石）、鉄製品（識別不明）、鉄滓等が出土した他、縄文土器片（大木9式）が1点（第20図1）が出土している。土器の内、図化されたものは土師器36点（壺17点、甌18点、鉢1点）、赤焼土器3点（壺）、須恵器4点（壺2点、甌1点、斐1点）である。土師器甌の外面には、ヘラ描きの文字？（第16図3）が描かれているものが1点ある。これらの出土遺物で、当住居跡に伴うと考えられるものは床面、カマド（内・袖）、外部燃焼施設A、P2、P12、P13出土のものである。

（3）5号土壤（第21図1、第25図7、図版10-2）

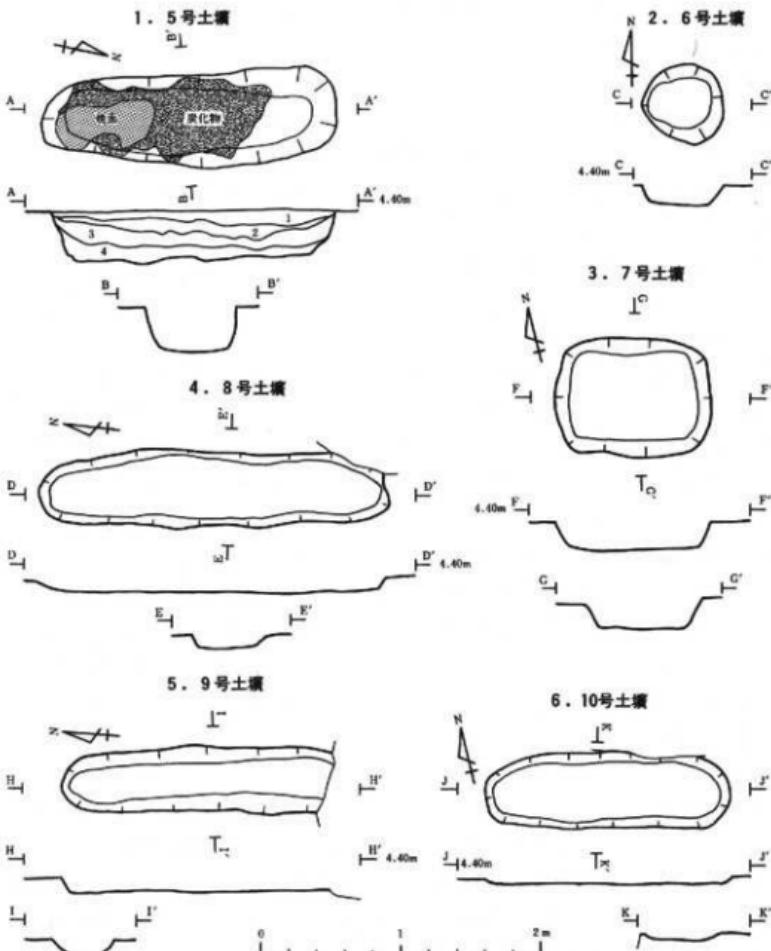
B・C-3グリッドにまたがり位置する。29号土壤、2号性格不明造構の一部を切る。上端・下端平面形とも長楕円形を呈す。上端規模210×70cm、下端規模175×45cmで、深さは約35cmを測る。壁面は強く立ち上り、底面はやや凹凸状となる。堆積土は4層から成り、ほぼレンズ状堆積を示す。堆積土は下層になるほど炭化物粒、焼土粒が多く含む。南端部の底面から壁面は焼けており、これを中心として炭化物のひろが認められた。出土遺物は堆積土3・4層を中心とする堆積土中よりの出土で、土師器片、赤焼土器片、須恵器片が出土した。この内、図化されたものは須恵器壺（第25図7）が1点のみである。

（4）6号土壤（第21図2、図版10-1）

B-3グリッドのほぼ中央に位置する。上端・下端平面形とも不整円形を呈す。上端径約60cm、下端径約40cm、深さ15cmを測る。壁面は緩やかに立ち上り、底面はほぼ平坦である。堆積土は単層で、出土遺物はない。

（5）7号土壤（第21図3、図版11-1・12-1）

A-3グリッド南西隅に位置する。8・9・10号土壤を切る。上端・下端平面形とも隅丸長方形を呈す。上端規模110×85cm、下端規模90×60cmで、深さ15cmを測る。壁面はややきつく



地塊名	層位	土色	土性	粘性	しまり	固形物・腐葉
5号土塊	1	2.5 YR 5/8 均一色	シルト	細	有	炭土粒少量。
	2	2.5 Y 5/8 均一色	シルト	無	有	灰茶色シートを斑点状に多量。
	3	10Y R 5/8 均一色	シルト	有	有	に付い黄褐色シートブロック・炭化物・焼土粒多量。
	4	10Y R 5/8 均一色	シルト	無	有	炭化物・焼土粒多量。
6号土塊	单	10Y R 5/8 均一色	シルト	無	有	炭化物・焼土粒を斑点状。
7号土塊	单	2.5 Y 5/8 均一色	粘土質シルト	有	有	灰セリーブ色シートをブロック状。燒土粒。
8号土塊	单	10Y R 5/8 均一色	シルト	無	有	燒土粒・炭化物少量。
9号土塊	单	10Y R 5/8 ない黄褐色	シルト	無	有	黄褐色シートを斑点状。燒土粒・炭化物較少量。
10号土塊	单	10Y R 5/8 ない黄褐色	シルト	無	有	燒土粒・炭化物少量。

第21図 5~10号土壤平・断面図

立ち上り、底面はほぼ平坦である。堆積土は単層である。出土遺物は堆積土中より、土師器、須恵器の細片が数点出土したのみである。

(6) 8号土壙 (第21図4、図版11-1)

A - 2・3グリッドにまたがり位置し、南東側の一部を7号土壙に切られる。上端・下端平面形とも長楕円形を呈す。上端規模245×50cm、下端規模235×60cmで、深さは10cmと浅い。横断面はひらいたU字状で、底面はやや凹凸状となる。堆積土は単層である。出土遺物は堆積土中より、土師器・須恵器の細片が数点出土したのみである。

(7) 9号土壙 (第21図5、図版11-2)

A - 3グリッドに位置し、南側を7号土壙に切られている。8号土壙と平行し並んでおり、南側を欠くが、ほぼ7号土壙と同規模、同形態のものと思われる。上端・下端の幅は45・25cm、残存部長は185・180cmで、深さは10cmと浅い。横断面はひらいたU字状で、底面はやや凹凸状である。堆積土は単層である。出土遺物は堆積土中より、土師器の細片が数点出土したのみである。

(8) 10号土壙 (第21図6、第25図5、図版12-2)

A・B - 2・3グリッドにまたがり位置し、北壁の一部を7号土壙に切られる。上端・下端平面形とも長楕円形を呈する。上端規模175×50cm、下端規模160×40cmで、深さは5cmと非常に浅い。壁面はゆるやかに立ち上り、底面はほぼ平坦である。堆積土は単層である。出土遺物は堆積土中より、土師器片、赤焼土器片、須恵器片が出土したが、図示できたものは土師器の甕(第25図5)1点のみである。

(9) 11号土壙 (第22図1)

B・C - 4グリッドにまたがり位置し、1号住居跡を切っている。小型の土壙で、上端・下端平面形とも楕円形を呈する。上端規模85×50cm、下端規模70×20cmで、深さ10cmを測る。断面はひらいたU字状で、底面はやや凹凸状である。堆積土は2層から成る。出土遺物は堆積土中より、土師器、須恵器の細片が少量出土したのみである。

(10) 12号土壙 (第22図2、図版13-1)

11号土壙の東側のB・C - 5グリッドにまたがり位置する。これも小型の土壙で、上端・下端平面形とも楕円形を呈する。上端規模70×40cm、下端規模50×20cmで、深さは15cmを測る。断面はひらいたU字状で、底面はやや凹凸状となる。堆積土は単層である。出土遺物は堆積土中



土壤名	層位	土色	土性	粘性	しまり	腐殖物・礫等
11号土壤	1	2.5YR褐色	黄褐色	シルト	無	上部に鐵土ブロックを斑点状。
	2	10YR外に近い黄褐色	黄褐色	シルト	有	鐵土物を斑点状に少量。
12号土壤	单	10YR为強	黄	シルト	有	鐵化物・鐵土粒を斑点状。
13号土壤	单	10YR外に近い黄褐色	黄褐色	シルト	有	有
	1	10YR外褐色	褐色	シルト	有	黃褐色シルトブロック・鐵土粒・炭土物を斑点状。
	2	10YR外褐色	褐色	シルト	有	灰黃褐色シルトブロックを斑点状。
	3a	10YR外に近い黄褐色	黄褐色	シルト	有	—
	b	10YR外に近い黄褐色	黄褐色	シルト	有	鐵化物粒・鐵土粒。
14号土壤	c	10YR为強	黄	粘土質シルト	有	—
	d	10YR外に近い黄褐色	黄褐色	シルト	有	灰黃褐色シルトブロックを斑点状。
15号土壤	单	10YR外に近い黄褐色	黄褐色	シルト	無	明黃褐色シルトブロックを斑点状。
16号土壤	单	10YR外に近い黄褐色	黄褐色	シルト	無	鐵化物少量。
17号土壤	单	10YR外に近い黄褐色	黄褐色	シルト	無	炭化物 (8~10mm)・上部に鐵土ブロック。
18号土壤	单	10YR外に近い黄褐色	黄褐色	シルト	有	灰黃褐色シルトを斑点状。鐵化物 (1cm)。

第22図 11~18号土壤平・断面図

より、土師器・須恵器の細片が数点出土したのみである。

(11) 13号土壙 (第22図3、第25図4)

B・C-5グリッドにまたがり位置する。当土壙の大部分(東側)は、上層検出の3号土壙に切られ、平面形は不明である。上端・下端東西幅75・70cmで、深さは約8cmと浅い。壁はゆるやかに立ち上り、底面はほぼ平坦である。堆積土は単層である。出土遺物は全て堆積土中よりで、土師器・須恵器・識別不明な鉄製品の細片が出土した。この内、岡化できたものは土師器甕1点(第25図4)のみであった。

(12) 14号土壙 (第22図4、図版13-2)

A-6グリッドのほぼ中央に位置し、15号土壙を切っている。上端・下端平面形とも隅丸正方形を呈する。1辺の上端・下端の規模は80・60cm、深さは50cmを測る。壁面は垂直にちかく立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は大別4層(細別6層)から成る。出土遺物は堆積土1・2層中より、土師器・須恵器・識別不明な鉄製品の細片が出土したのみであった。

(13) 15号土壙 (第22図5、図版14-1)

A-6グリッドに位置し、14号土壙に南西壁の一部を切られている。上端平面形は隅丸長方形、下端平面形は長方形を呈す。上端規模120×95cm、下端規模100×70cmで、深さは40cmを測る。壁面は強く立ち上り、底面はほぼ平坦である。堆積土は単層である。出土遺物は堆積土中より、土師器・須恵器の細片が少量出土したのみである。

(14) 16号土壙 (第22図6)

B-7グリッドに位置する。上端・下端平面形とも楕円形を呈す。上端規模110×75cm、下端規模100×60cmで、深さは10cmと浅い。壁面は緩かに立ち上り、底面はやや凹状となる。堆積土は単層である。出土遺物は堆積土中より、土師器・須恵器の細片が数点出土したのみである。

(15) 17号土壙 (第22図7)

C-3グリッドに位置し、南壁の一部は調査区外へ延びる。また南側は排水用の側溝によつて切られている。上端・下端平面形とも楕円形を呈するものと思われる。上端・下端長軸は、推定で約110・90cm、上端・下端短軸は85・70cmで、深さは10cm前後を測る。壁面はやや強く立ち上り、底面は多少凹凸状となる。堆積土は単層から成るが、上面に一部焼土面が認められた。出土遺物は堆積土中より、土師器の細片が数点出土したのみである。

(16) 18号土壙 (第22図8)

B・C・Gグリッドにまたがり位置する。西側を上層検出の3号土壙に切られている。上端・下端平面形とも隅丸長方形を呈すると思われる。上端・下端短辺110・100cmで、深さは7cmと浅い。壁面は緩やかに立ち上り、底面はほぼ平坦である。堆積土は単層である。出土遺物は堆積土中より、土師器・須恵器の細片が少量出土したのみである。

(17) 19号土壙 (第23図1、第25図1)

C・7グリッドに位置し、土壙の東側は調査区外へ延びる。また、東側は排水用の側溝によって切られている。上端・下端平面形とも梢円形を呈すると思われる。上端・下端長軸は推定で230・170cm前後、上端・下端短軸は110・80cm、深さは30cmを測る。横断面はU字状で、底面は凹状である。堆積土は3層から成る。中央部の底面上、壁面を中心として、炭化物のひろがりが認められた。出土遺物は、底面、堆積土中より、土師器片、須恵器片が出土したが、図化できたのは土師器环1点 (第25図1、堆積土出土) のみであった。

(18) 20号土壙 (第23図2、図版14-2)

A・6グリッド北側に位置する。上端・下端平面形とも梢円形を呈す。上端規模130×65cm、下端規模115×45cmで、深さは20cmを測る。壁面はやや強く立ち上り、底面は多少凹状となる。堆積土は単層である。出土遺物はない。

(19) 21号土壙 (第23図3、図版15-1)

A・7グリッドに位置する。上端・下端平面形とも隅丸正方形にちかい不整円形を呈す。上端・下端径50・40cm前後で、深さは20cmを測る。壁面は垂直にちかく立ち上る。底面は強い凹状で、土壙の下端ラインは不明確である。堆積土は単層である。出土遺物は底面より、鉄滓(鐵治滓)が1点 (写真図版31-1) 出土した他は、堆積土中より、土師器片が数点出土したのみである。

(20) 22号土壙 (第23図4)

B・5・6にまたがり位置する。上端・下端平面形とも梢円形を呈す。上端規模110×65cm、下端規模55×20cmで、深さは40cmを測る。西側壁面から南側壁面にかけて、壁中央に段が形成されている。北壁には段は認められず、垂直にちかく立ち上っている。底面はやや凹状となっている。堆積土は単層で、出土遺物はない。

21) 23号土壙 (第23図5)

A・B・7グリッドにまたがって位置する。北側を4号性格不明遺構、西壁の一部を15号ピットに切られている。上端・下端平面形とも長楕円形を呈す。上端規模 120×40 cm、下端規模 110×30 cmで、深さは10cmと浅い。壁面は緩やかに立ち上り、底面はほぼ平坦である。堆積土は単層で、出土遺物はない。

22) 24号土壙 (第23図6、図版15-2)

C・2グリッドに位置する。上端・下端平面形ともほぼ円形を呈する小型の土壙である。上端・下端径 $60 \cdot 30$ cm前後で、深さは20cmを測る。断面はU字状で、下端ラインは不明瞭である。堆積土は単層である。出土遺物は堆積土中より、土師器・須恵器の細片が数点出土したのみである。

23) 25号土壙 (第23図7、図版16-1)

A・2グリッド南東隅に位置し、10号土壙に南東壁の上部を一部切られる。上端・下端平面形とも不整円形を呈す。上端・下端径 $60 \cdot 30$ cm前後で、深さは15cmを測る。壁面は緩かに立ち上り、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層から成り、出土遺物はない。

24) 26号土壙 (第23図8、第25図2)

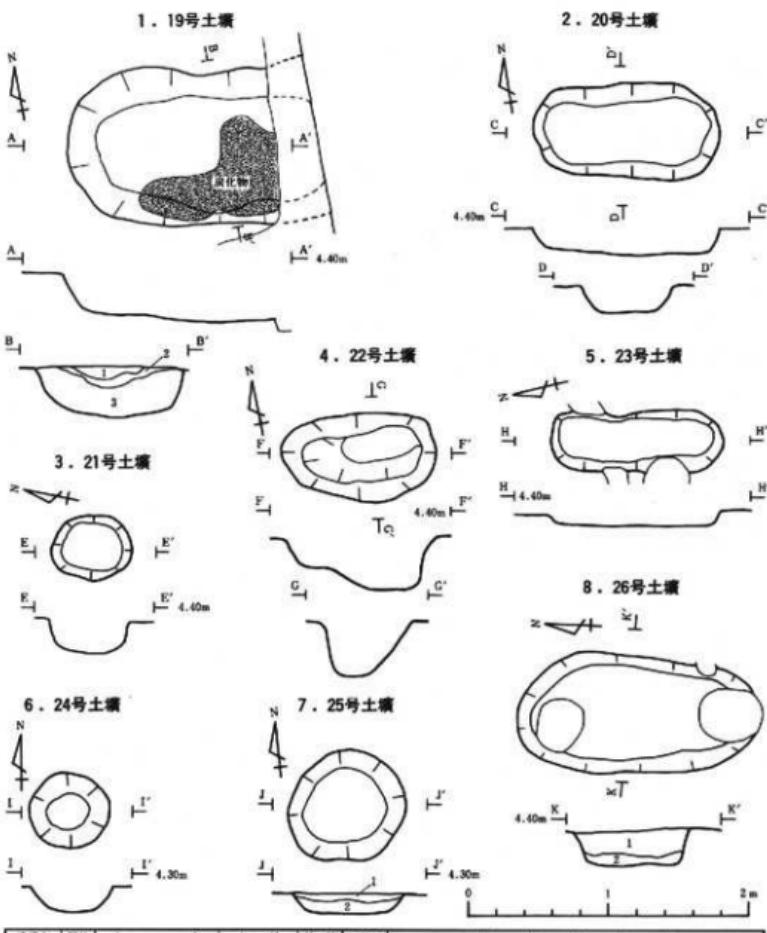
B・C・2グリッドにまたがり位置する。1・2・17号ピットに切られている。上・下端平面形とも楕円形を呈す。上端規模 175×85 cm、下端規模約 160×65 cmで、深さは30cmを測る。壁面はやや強く立ち上り、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層から成る。出土遺物は全て堆積土1層からである。土師器壺1点(第25図2)が焼化された他は、土師器・赤焼土器の細片が数点出土したのみである。

25) 27号土壙 (第24図1)

B・5グリッドに位置する。上端・下端平面形とも楕円形を呈す。上端規模 95×40 cm、下端規模 80×30 cmで、深さは10cmを測る。壁面は緩やかに立ち上り、底面は凹状である。堆積土は単層で、出土遺物はない。

26) 28号土壙 (第24図2)

B・5グリッドに位置する。上端・下端平面形とも不整円形を呈す。上端・下端径 $80 \cdot 60$ cm前後で、深さは5~10cmを測る。壁面は緩やかに立ち上り、底面は中央部が周辺に比べ5cm



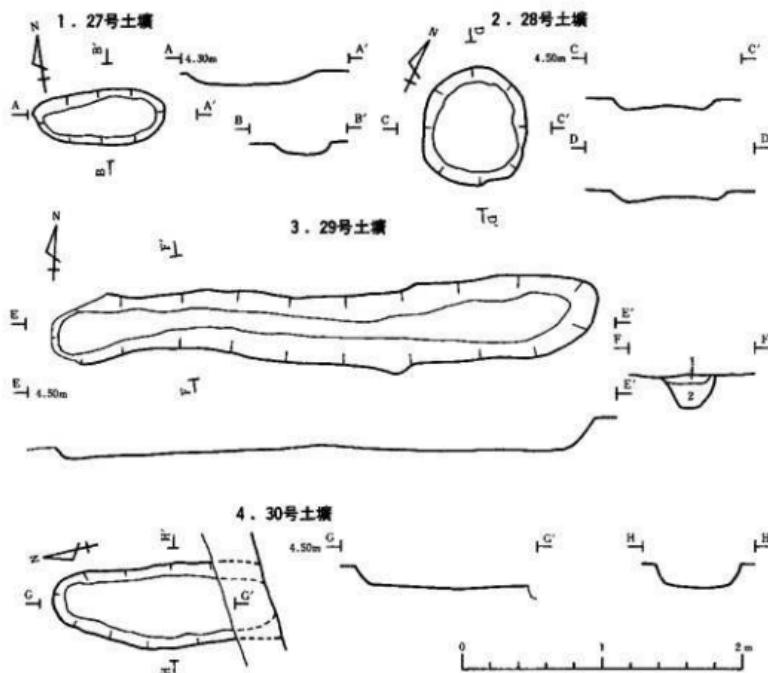
通称名	層位	土壤性状						混和物・備考
		土色	土性	粘性	しまり	有無		
19号土壤	1	10YR5分に近い黄褐色	シルト	ト	有	有	暗褐色シルトを斑点状。	
	2	10YR5分に近い黄褐色	シルト	ト	有	有	浅黄褐色シルトを斑点状。	
	3	10YR5分褐色	色	シルト	ト	有	褐色シルトを斑点状。炭化物粒。	
20号土壤	单	10YR5分褐色	色	シルト	ト	無	有	炭化物を斑点状に多量。
21号土壤	单	10YR5分褐色	色	シルト	ト	無	有	灰黄褐色シルトを斑点状。炭化物粒少量。
22号土壤	单	10YR5分褐色	色	シルト	ト	無	有	10YR5分褐色シルトを斑点状。炭化物粒。
23号土壤	单	10YR5分褐色	褐色	シルト	ト	無	有	褐色シルト少量。
24号土壤	单	10YR5分に近い黄褐色	シルト	ト	無	有	暗褐色シルト・炭化物粒・燒土粒を斑点状。	
25号土壤	1	10YR5分に近い黄褐色	シルト	ト	無	有	暗褐色シルトをブロック状。	
	2	10YR5分褐色	褐色	シルト	ト	有	灰黄褐色シルトを斑点状。	
26号土壤	1	2.5Y5分灰褐色	灰褐色	シルト	ト	無	無	無
	2	10YR5分褐色	褐色	シルト	ト	有	有	無

第23図 19~26号土壤平・断面図

ほど盛り上る。堆積土は単層で、出土遺物はない。

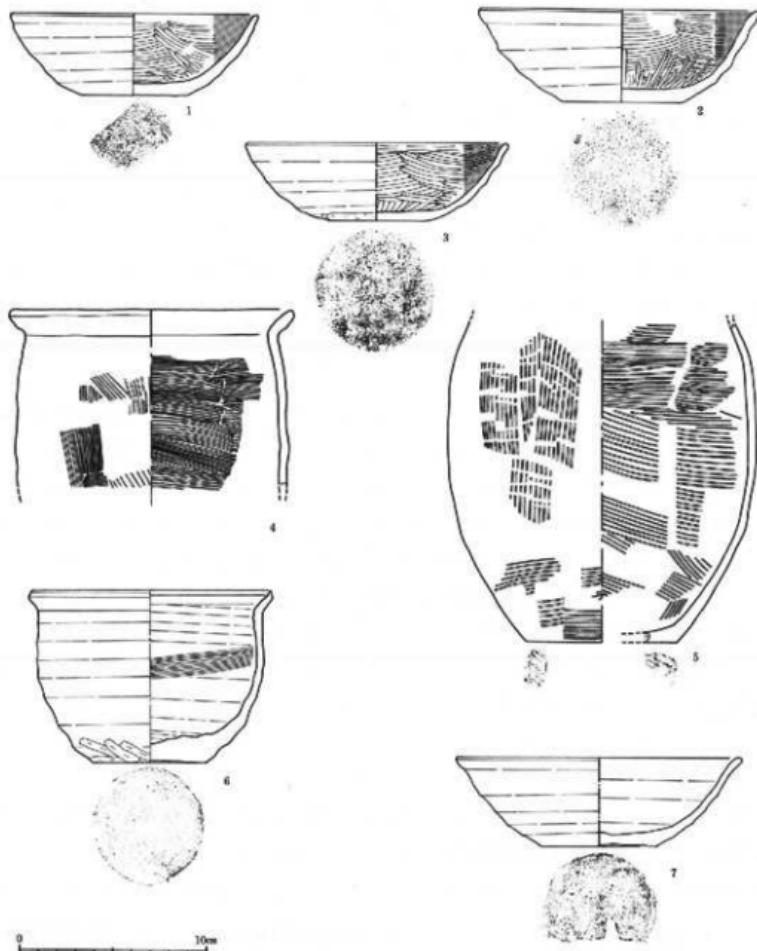
(27) 29号土壤 (第24図3、第25図3・6)

B-3・4にまたがり位置する。東西に細長く伸びる溝状の土壤である。1号住居跡の煙出し部を切っており、土壤北東部は2号住居跡に接している（重複関係なし）。西端部分は、5号土壤に一部切られており、また、2号性格不明遺構とも重複関係があるが、調査では新旧関係を明確にできなかった。上端規模約400×60cm、下端規模約370×30cmで、中央付近では、上端・下端幅とも狭くなり35・15cm前後となる。深さは25~30cmで西側の方が深くなる。底面が凹状のため下端ラインは不明瞭で、横断面はU字状となる。堆積土は2層から成



遺構名	層位	土色	土性	粘性	しまり	測定物・備考
27号土壤	単	10YR5/4	色	シルト	無	有 炭化物粒・燒土粒。
28号土壤	単	10YR5/4	色	シルト	無	有 炭化物粒。
29号土壤	1	2.5YR5/4	色	シルト	有	有 炭化物粒・燒土粒を斑点状。
30号土壤	2	10YR5/4にかい黄褐色	色	シルト	有	有 炭化物粒・燒土粒を斑点状。

第24図 27~30号土壤平・断面図



図版番号	出土地点	要目	縦断面	横断面	測定		法線cm (内側復元量)	保存	分解	写真
					外	内	底径	体積	底径	器高
1	19号土壤 堆土	D-55	土器器 环	口一休:ロクロナデ 底:圓軸条切り	ヘラミガキ→黒色処理	(13.3)	—	(5.6)	4.4	△ B —
2	24号土壤 堆土	D-64	土器器 环	口一休:ロクロナデ 底:圓軸条切り	ヘラミガキ→黒色処理	15.0	—	6.4	5.0	△ B 21-2
3	29号土壤 堆土	D-54	土器器 环	口一休:ロクロナデ手もみハラタヌリ(底下部) 底:圓軸条切り+手持らへハラタヌリ(底脚)	ヘラミガキ→黒色処理	(14.0)	—	5.2	4.2	△ NB —
4	13号土壤 堆土	C-9	土器器 瓢	口:不明(断滅) 体:ハケメ	口:ミガキ?	(15.3)	(14.7)	—	△ I —	
5	堆土	C-6	土器器 瓢	体:ハケメ 底:竪状压痕?	ハケメ	—	(16.5)	(8.0)	△ I —	
6	29号土壤 堆土	D-57	土器器 瓢	口一休:ロクロナデ→ハラタヌリ (底下部) 底:圓軸条切り	ロクロナデ→ヘラタヌリ (底上部)	(13.1)	(12.0)	6.0	9.3	△ C —
7	5号土壤 堆土	E-3	須恵器 环	口一休:ロクロナデ 底:圓軸条切り	ロクロナデ	(15.3)	—	6.2	4.6	△ E —

第25図 5~29号土壤出土遺物(土器器・須恵器)

る。遺物は全て堆積土中よりの出土で、土師器片と須恵器片が出土した。この内、図化されたものは土師器の壺と甕（第25図3・6）が各1点である。

(26) 30号土壤 (第24図4)

C-5グリッドに位置する。土壤の南側の一部は調査区外へ延びる。また、南側は排水用の側溝によって切られている。上端・下端平面形とも長楕円形を呈すものと思われる。上端・下端長軸は推定で200・170cm前後、上端・下端短軸は60・45cm、深さは20cmである。壁面は緩やかに立ち上り、底面は凹状となる。堆積土は単層である。出土遺物は堆積土より、土師器・須恵器の細片が数点出土したのみであった。

(27) 2号性格不明遺構 (第26図1、第27図)

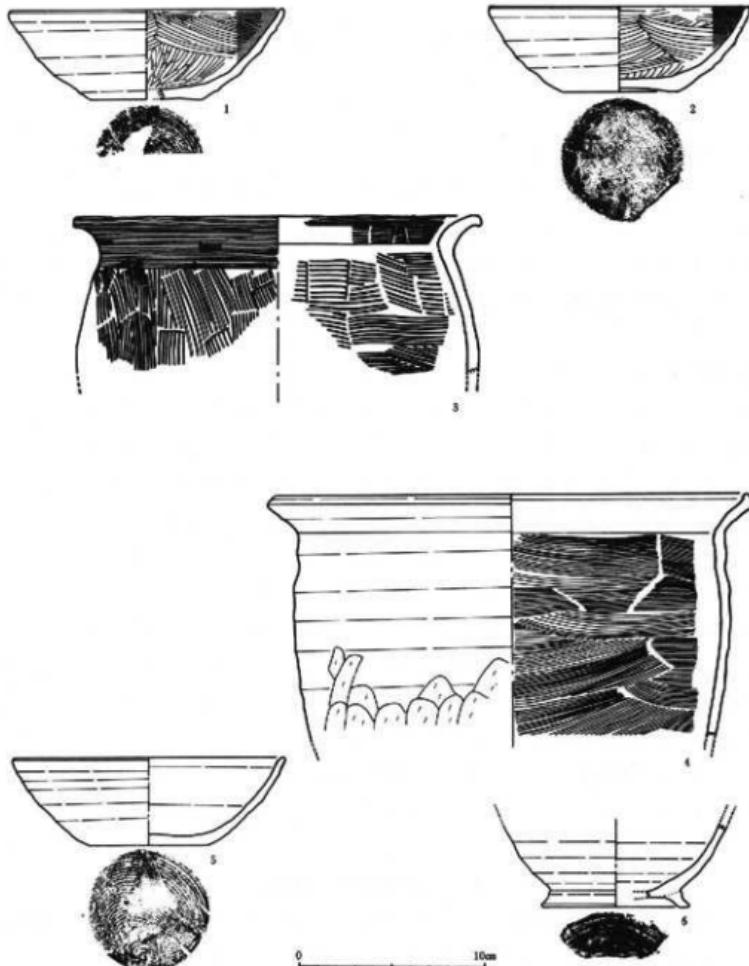
B-2-3グリッドにまたがり位置する。東側は5号土壤に切られ、また29号土壤と重複関係（新旧関係不明）にある。東西に溝状に延びる遺構で、東側の立ち上りは若干認められたが、西側は調査区外へと延びる。上端幅は80～110cm、下端幅は50cm前後で、深さは15～20cmである。横断面はひらいたU字状で、底面はやや凹凸があるが、西から東への緩やかな下り傾斜を示す。堆積土は2層から成る。下層には焼土粒・炭化物粒が多量に含まれていたが、底面・壁面には焼け面は認められなかった。遺物は全て堆積土中よりの出土である。土師器を中心として赤焼土器・須恵器が比較的多く出土したが、全て破片資料であった。他に識別不明な鉄製品が1点出土した。この内図化できたものは、土師器壺2点（第27図1・2）、甕2点（3・4）、赤焼土器壺1点（5）、須恵器甕1点（6）であった。

(28) 3号性格不明遺構 (第26図2)

A-5グリッドに位置し、2号住居跡の煙道及び外部燃焼施設Aの一部を切っている。南北に弧状に延びる遺構で、北側は調査区外に延びる。北側方向に行くに従い、遺構の幅は広がり、深さも増す。これに加え底面は西側へもやや下り傾斜となる。調査区北壁で上端幅80cm、下端



第26図 2～4号性格不明遺構断面図



因数 番号	出 土 地 点	登録 種 類	圖 形		法量cm (内は復元量)	現存	分類	参考 図版
			外 面	内 面				
1 塚積土 D-53	土 師 環	口一休:ロクロナデ 底:回転糸切り ヘラミガキ→黑色処理	(14.7)	—	(5.9) 4.9	△	Ⅲ	—
2 塚積土 D-52	土 師 環	口一休:ロクロナデ 底:回転糸切り ヘラミガキ→黑色処理	(14.0)	—	6.2 4.6	△	Ⅲ	—
3 塚積土 C-10	土 師 環	ハケメーヨコナデ(口一休上端)	ハケメーヨコナデ(12)	(22.0) (21.6)	—	△	Ⅰ	26-4
4 塚積土 D-56	土 師 環	ロクロナデ→ヘラケヌリ(体下平) (休)	ロクロナデ→ヘラナデ (26.1) (23.3)	—	△ BA	—	—	—
5 塚積土 D-E-6	赤燒土器	ロクロナデ 底:回転糸切り	ロクロナデ	14.6	— 6.4 4.7	△	—	—
6 塚積土 E-12	須惠器 高台付壺	ロクロナデ(底:不明)	ロクロナデ	—	— 高台付 (7.9)	—	—	—

第27図 2号性格不明遺構出土遺物(土師器・赤焼土器・須恵器)

幅60cm、深さ20~25cmを測り、壁面はやや強く立ち上る。底面は傾きがあるが、ほぼ平坦である。堆積土は単層である。出土遺物は堆積土中より、土師器・赤焼土器・須恵器・識別不明な鉄製品の細片が数点出土したのみである。カク乱の可能性もある。

(3) 4号性格不明遺構（第26図3）

A-6・7グリッドに位置する。23号土壤を切っている。東西に延びる細長い小溝状のもので、やや弯曲している。全長約3.4m、上端幅20cm前後、下端幅10cm前後、深さ2~10cmで、底面は東から西へ下って行く。横断面はU字状を呈す。堆積土は単層である。出土遺物は堆積土より、土師器・須恵器の細片が数点出土したのみである。カク乱の可能性もある。

(2) ピット（第1・2表）

5ライン以東を中心として、16個のピットが検出された。重複関係では、1号住居跡、13号土壤、23号土壤、26号土壤を4号、7号、15号、1・2・17号ピットが切っている。1~17号ピットでは、上端・下端平面形が（不整）円形、梢円形のいずれかを呈す。上端径（長軸）は25~35cmの間のものが半数を占める。深さは15cm以上のものが多く、30cm以上を越えるものはない。1・9・10・17号では柱痕が認められた。これらピットは、規模、配列において規則性を見い出すことはできなかった。

18号ピットはA・Bとも上記1~17号ピットに比べ、掘り方の規模が大きく（A:75×60×95cm）、平面形も方形を呈する。調査区内には同規模のものが他に検出されなかったため、性格、規模、方向については不明である。ただし、AはBを切っており、建て替えがあったことが考えられる。Aでは柱痕が認められたが、Bでは認められなかった。

1・4・16・18A号ピットの堆積土中、堀り方埋土中からは、土師器・須恵器の細片が数点出土したが、他のピットからの出土遺物はない。

4. IV層上面検出遺構（第4図3）

IIIb層排土後、IVa層上面で検出された遺構である。小溝状遺構と溝跡1条（2号）が検出された。調査の関係上、7ラインのみを完掘し、他は遺構上面の検出にとどめた。

(1) 小溝状遺構（第28図1、図版16-2）

2号溝跡の北側を除く調査区全域で検出された。20~60cmの間隔で、北北東→南南西（N-18°前後-E）方向にはほぼ平行に走る小溝群である。完掘部分、及び調査区壁面観察では、上端幅30~70cm、下端幅10~30cmと溝ごとにばらつきがあり、また各溝自身の内でも一定した幅をも

第1表 ピット観察表

ピット名	地域名	区別	平面形			深度 cm			傾角°	堆積土数	備考
			上端	下端	上端	下端	深さ				
1号	C-2	掘り方	椭円	楕円	50×45	30×25	30	65°~50°	埋土1号	26号土壌を切る。	
		柱	直線	同様	22×22	14×12	28	—	—	—	
2号	C-2	—	椭円	楕円	29×15	8×5	16	75	1号	26号土壌を切る。	
4号	B-4	—	円	円	38×38	12×12	15	70	2号	1号往復路を切る。	
5号	B-C-5	—	椭円	楕円	35×36	24×22	9	60	1号	—	
6号	A-5	—	円	円	35×35	20×16	27	75	4号	—	
7号	B-C-5	—	椭円	楕円	18×16	10×10	11	70°~55°	1号	13号土壌を切る。	
8号	B-6	—	不整円	椭円	18×18	12×10	22	80	1号	—	
		掘り方	不整円	不整円	20×18	16×14	15	75	埋土2号	—	
9号	C-7	柱	直線	円	12×12	12×12	10	—	—	—	
10号	B-6	—	椭円	椭円	20×20	12×12	15	70	埋土1号	—	
		柱	直線	円	10×10	10×10	14	—	—	—	
11号	B-6	—	直線	円	32×28	24×24	10	75	1号	—	
12号	A-7	—	不整円	椭円	28×24	16×13	9	60	2号	—	
13号	A-6	—	不整円	椭円	25×25	10×8	27	75	1号	—	
15号	A-7	—	直線	不整円	34×30	21×18	4	40°~20°	1号	カク乱? 23号土壌を切る。	
16号	A-7	—	椭円	椭円	26×24	20×18	15	75	1号	北側一部未削。	
17号	B-2	掘り方	椭円	椭円	42×38	35×30	35	80	埋土1号	26号土壌を切る。	
		柱	直線	椭円	18×15	12×8	24	—	—	—	
18A号	B-7	掘り方	不整方形	方形	75×60	45×30	95	85	埋土1号	18B号ピットを切る。	
18B号	B-7	掘り方	柱	円	12×12	10×10	70	—	—	—	
		柱	直線	円	—×60	—×40	90	80	埋土1号	18A号ピットに切られる。	

第2表 ピット土層記録表

ピット名	層位	土色	上性	粘性	しまり	侵入物
1号	柱	赤	10YR 5/4 黄褐色	シルト	あり	あり
	柱	柱	10YR 5/4 黄褐色	シルト	あり	あり
	柱	柱	10YR 5/4 黄褐色	シルト	あり	あり
2号	1層	柱	10YR 5/4 黄褐色	シルト	あり	あり
4号	1層	柱	10YR 5/4 黄褐色	シルト	なし	あり
5号	1層	柱	10YR 5/4 に近い黄褐色	シルト	なし	あり
6号	1層	柱	10YR 5/4 に近い黄褐色	シルト	なし	あり
	2層	柱	10YR 5/4 に近い黄褐色	粘土質シルト	あり	あり
	2層	柱	10YR 5/4 に近い黄褐色	粘土質シルト	あり	あり
	3層	柱	10YR 5/4 に近い黄褐色	シルト	あり	あり
7号	1層	柱	10YR 5/4 黄褐色	シルト	なし	あり
8号	1層	柱	10YR 5/4 黄褐色	シルト	なし	あり
	柱	柱	10YR 5/4 に近い黄褐色	シルト	なし	あり
	柱	柱	10YR 5/4 に近い黄褐色	シルト	なし	あり
9号	柱	柱	10YR 5/4 に近い黄褐色	シルト	なし	あり
	柱	柱	10YR 5/4 に近い黄褐色	シルト	なし	あり
	柱	柱	10YR 5/4 に近い黄褐色	シルト	なし	あり
	柱	柱	10YR 5/4 に近い黄褐色	シルト	なし	あり
10号	柱	柱	10YR 5/4 黄褐色	シルト	あり	あり
	柱	柱	10YR 5/4 に近い黄褐色	シルト	あり	あり
	柱	柱	10YR 5/4 黄褐色	シルト	なし	あり
13号	1層	柱	10YR 5/4 黄褐色	シルト	なし	あり
15号	1層	柱	10YR 5/4 黄褐色	シルト	あり	あり
16号	1層	柱	10YR 5/4 黄褐色	シルト	あり	あり
	柱	柱	2.5Y 5/2 黄褐色	シルト	あり	あり
17号	柱	柱	10YR 5/4 黄褐色	シルト	あり	あり
	柱	柱	10YR 5/4 黄褐色	粘土質シルト	あり	あり
	柱	柱	10YR 5/4 黄褐色	粘土質シルト	あり	あり
18号	A	柱	10YR 5/4 黄褐色	シルト	あり	あり
	B	柱	10YR 5/4 黄褐色	シルト	あり	あり

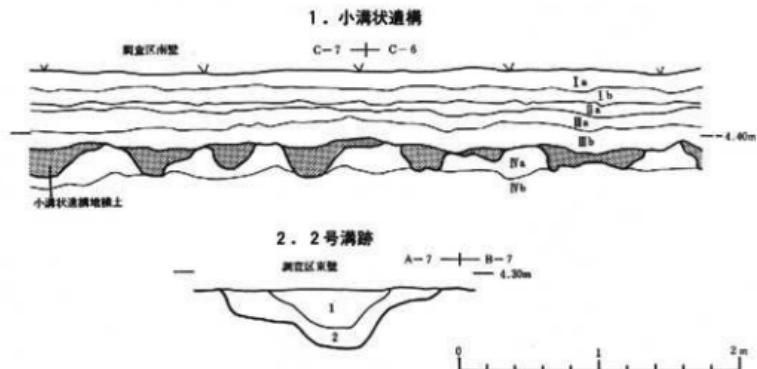
たない。底面にピット状の小穴があり凹凸状が著しく、深さも10~20cmで安定していない。横断面はU字状を呈するものもあるが一定ではない。また全体的に下端ラインは不明瞭である。堆積土は単層で、褐色シルトを主体としてⅣa層ブロックを多量に含む。一部分の完掘であるが出土遺物はない。尚、2号溝跡の北側には、Ⅲb層とⅣa層の間に厚さ10cm程の不安定な褐色シルト層（小溝状造構堆積土と類似？）が認められたが、小溝状造構は検出されなかった。

(2) 2号溝跡（第28図2、図版17）

A-4~7グリッドを西北西→東南東方向 (N - 80° - W) に走る溝跡である。小溝状造構を切るような状態で、ほぼ直交している。上端幅150cm前後、下端幅約50cmで、壁中央で段が付く。中段幅は約70cmで、北側の方が明確な段が付く。深さは40cmで、底面はやや凹状となる。堆積土は2層から成る。1層は褐色粘土質シルト、2層は黒褐色シルト質粘土で、ややグライ化している。一部分の完掘であったが、出土遺物はない。

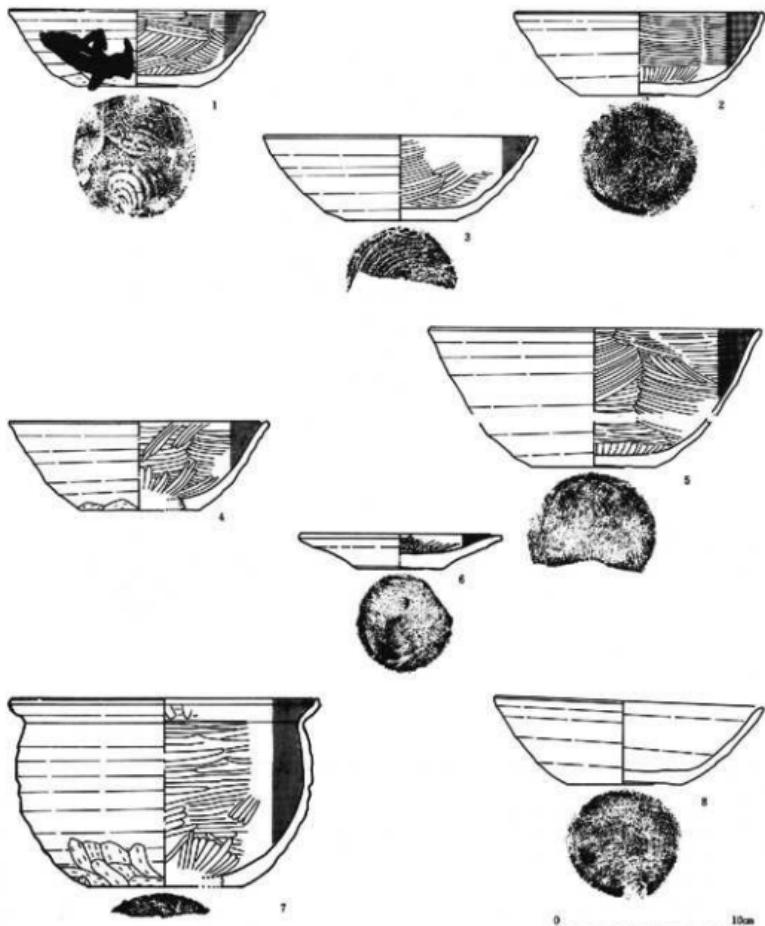
5. その他の出土遺物（第29~32図）

基本層位より出土した遺物である。Ⅲa層よりの出土が最も多く、Ⅳ層以下では出土遺物はない。土師器、赤焼土器、須恵器、陶器、磁器、土製品（土錐、羽口）、石製品（磨石）、鉄製品（鐵鎌、釘等）、鐵澤がある。いずれも破片資料のものが多く、図化できたものはわずかである。



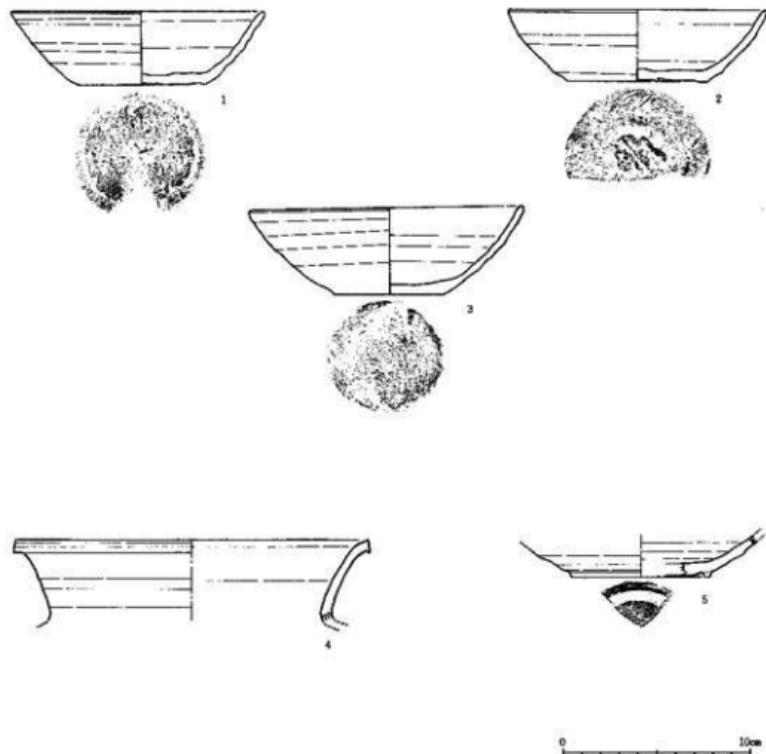
小溝状造構	土色	土性	粘性	しまり	固和物
堆積土	10YR 4/6	シルト	無	有	に多い黄褐色シルトを斑点状。多量のⅣa層ブロック（下部）。

第28図 小溝状造構・2号溝跡断面図



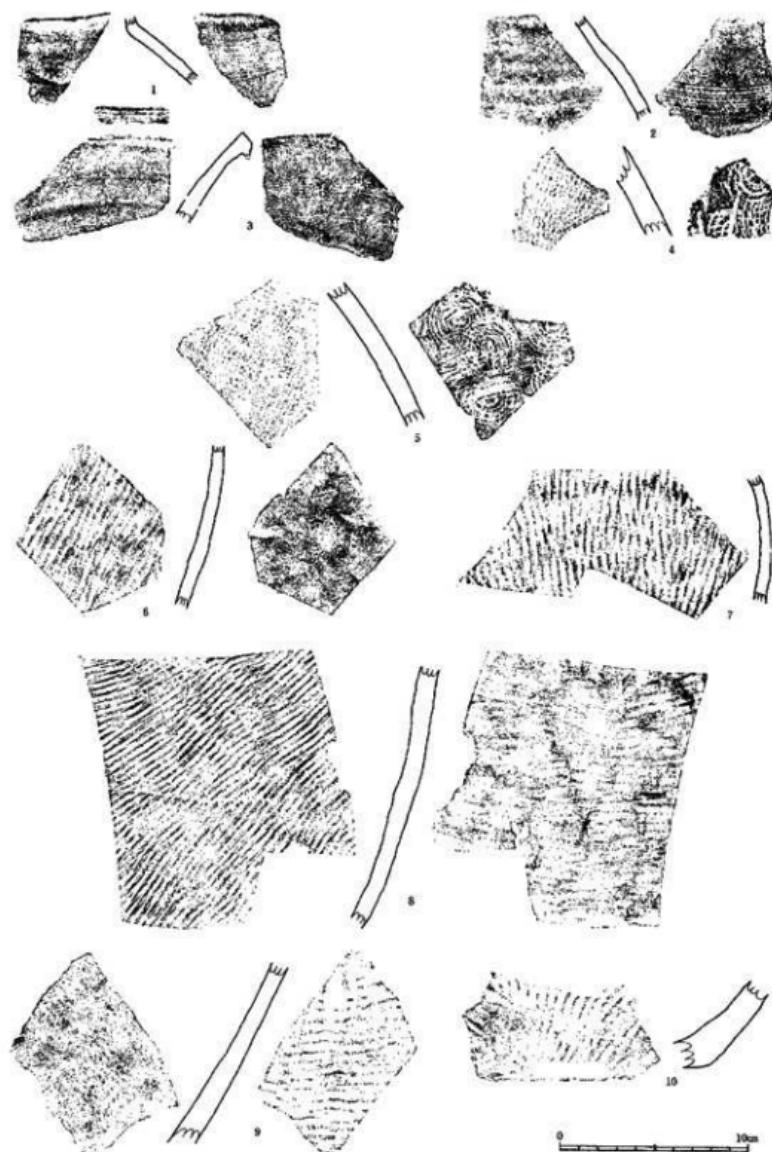
探査 番号	出土地点	登録 番号	種類	量				法量cm (3つは複元量)	残存 分量	写真 図版
				外 面	内 面	底	器高			
1 A-2	土師器	D-47	上 鋼 環	口～体：ロクロナダ 底：回転糸切り	ハラミガキ→黒色処理	13.7	—	6.5 (13.5)	4.1 (6.0)	I III
2 B-2	土師器	D-62	土 師 器 环	口～体：ロクロナダ 底：回転糸切り	ハラミガキ→黒色処理	14.7	—	6.3 (14.7)	4.5 (6.0)	I
3 A-7	土師器	D-41	土 師 器 环	口～体：ロクロナダ 底：回転糸切り	ハラミガキ→黒色処理	13.8	—	6.0 (13.8)	4.6 (6.3)	III
4 C-6	土師器	D-45	土 師 器 环	口～体：ロクロナダ 底：回転糸切り	ハラミガキ→黒色処理	17.8	—	6.6 (17.8)	4.8 (6.6)	III
5 C-6	土師器	D-66	土 師 器 环	口～体：ロクロナダ 底：回転糸切り	ハラミガキ→黒色処理	10.9	—	4.6 (10.9)	1.9 (4.6)	IIA
6 B-7	土師器	D-60	土 師 器 直	口～体：ロクロナダ 底：回転糸切り	ハラミガキ→黒色処理	16.7	—	10.1 (16.7)	ED (10.1)	25-3
7 B-7	土師器	D-58	土 師 器 斜	口～体：ロクロナダ→ハラケズリ (埋立直)	ハラミガキ→黒色処理	14.5	—	6.0 (14.5)	4.5 (6.0)	—
8 C-7	土師器	D-E-7	赤燒土器	口～体：ロクロナダ 底：回転糸切り	ロクロナダ	—	—	—	—	—

第29図 基本層位出土遺物1(土師器・赤焼土器)

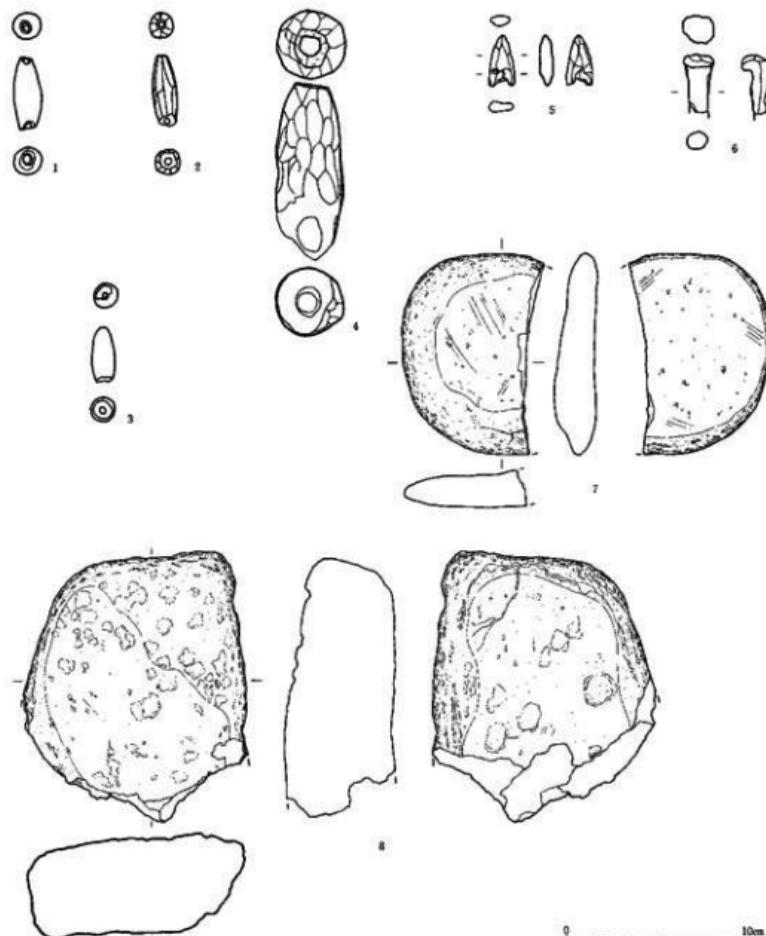


因数 番号	出土地點	登録 番号	種類	測定			底径cm	(内)深元幅	高さ	分類	年表 層面
				外 面	内 面	L1径					
33-1	A-5	直b層	E-6	須恵器 环	口一様：ロクロナデ、火ダスク 底：粘土胎材(中空)→手持ちハラケズリ(焼締)	ロクロナデ、火ダスク	13.5	6.8	4.0	36	I 24-1
33-2	B-7	直a層	E-4	須恵器 环	口一様：ロクロナデ 底：粘土胎材(中空)→手持ちハラケズリ(焼締)	ロクロナデ	(13.8)	7.4	3.9	36	I -
33-3	B-7	直a層	E-5	須恵器 环	口一様：ロクロナデ 底：回転系切り	ロクロナデ	14.7	6.0	4.6	36	II -
33-4	B-6	直a層	E-13	須恵器 罐	ロクロナデ	ロクロナデ	(19.1)	-	-	36	-
33-5	A-2	直a層	E-14	須恵器 罐	全体一様：ロクロナデ→火(高台焼締) 底：回転系切りナデ(高台焼締)	ロクロナデ	-	(7.4)	...	36	-
34-1	B-3	直b層	E-15	須恵器 罐	ロクロナデ	カキ目?	-	-	-	-	-
34-2	B-7	直a層	E-16	須恵器 罐	ロクロナデ	カキ目?	-	-	-	-	-
34-3	B-7	直b層	E-17	須恵器 罐	ロクロナデ	カキ目?	-	-	-	-	-
34-4	C-5	直b層	E-18	須恵器 罐	手打叩き目	同心円押え目	-	-	-	-	-
34-5	直	鉢	E-19	須恵器 鉢	手打叩き目	同心円押え目	-	-	-	-	-
34-6	B-6	直a層	E-20	須恵器 鉢	平行叩き目	ナデ	-	-	-	-	-
34-7	B-7	直a層	E-21	須恵器 鉢	平行叩き目	-	-	-	-	-	-
34-8	C-4	直a層	E-22	須恵器 鉢	平行叩き目	平行押え目	-	-	-	-	-
34-9	A-7	直a層	E-23	須恵器 鉢	平行叩き目	平行押え目	-	-	-	-	-
34-10	A-7	直a層	E-24	須恵器 鉢	体：平行叩き目 底：ハラケズリ	ハラナデ	-	-	-	-	-

第30図 基本層位出土遺物2 (須恵器)



第31図 基本層位出土遺物3(須恵器)



図版番号	出土地点	基層番号	種類	法長cm			備考	著者	参考文献
				幅	高(外径)	厚(孔径)			
1	B-2 目a層	P-5	土器	3.9	1.5	0.4	ほぼ完形。外面磨滅。		28-7
2	B-2 目b層	P-6	土器	(3.9)	1.3	0.3	欠損存。外面：オサエ？縁：ガキ。		28-6
3	A-6 目a層	P-7	土器	(2.9)	1.3	0.3	欠損存。外面磨滅。		28-5
4	C-5 IIa層	P-3	土器	(9.5)	3.7	1.2	欠損存。外面：オサエ？縁：ガキ。		28-3
5	A-3 目a層	N-1	鉄鏃	2.8	1.4	0.6	鉄鏃付着しない。		30-4
6	C-6 IIa層	N-2	鉄剣	(3.1)	1.0	0.9	欠損品。斜面方錐？。鉄鏃付着しない。		30-7
7	B-7 目b層	K-2	磨石	10.8	7.0	2.2	欠損品。全面磨き。表面凹凸状。裏面圓状。		-
8	B-7 目b層	K-3	磨石	(14.2)	12.0	6.9	欠損品。表面磨き。表面平坦。裏面凹状。二次加工痕。		-

第324図 基本層位出土遺物4（土製品・礫製品・鉄製品）

第IV章 出土遺物の検討

1. 繩文土器

1点出土した（第20図1）。深鉢形土器の口縁部資料である。外面には隆線による溝文が施されている。内外面とも磨滅が激しい。繩文時代中期（大木9a式）に位置づけられる。

2. 土師器

70点が図化された。器種には壺、皿、甌、鉢がある。

(1) 分類

壺

全て製作に際してロクロが使用されている。内面はヘラミガキの後、黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は、底部付近が放射状、体部へ口縁部が斜め及び横方向である。これらは底径／口径（底口比）、器高／口径（高口比）によりI～IV類に分類され、さらに口径の法量により細分される。

I類：底口比が47%以上で、高口比が30%前後のもの

全体的に底径が大きいもので5点ある。底口比は47～50%、高口比は33%以下で、内には28%と全体的に器高が低いものもある。口径は13.5～15.0cmの間である。体部から口縁部の器形には、丸味をもって外傾するもの、体部が丸味をもって外傾し、口縁部がやや外反するものがある。体部の弯曲度は、他の類に比べ小さいものがある。底部の切り離し技法が明確なものは、全て回転糸切りである。底部の切り離し後は、再調整が施されるものと無調整のものがある。再調整のものは、全て手持ちヘラケズリで、底部全面、体部下端から底部周縁に施される。

II類：底口比が40～46%のもので、高口比が40%以上のもの

全体的に器高の高いもので、塊状の器形を呈するものである。口径の法量により、さらにA・Bに細分される。

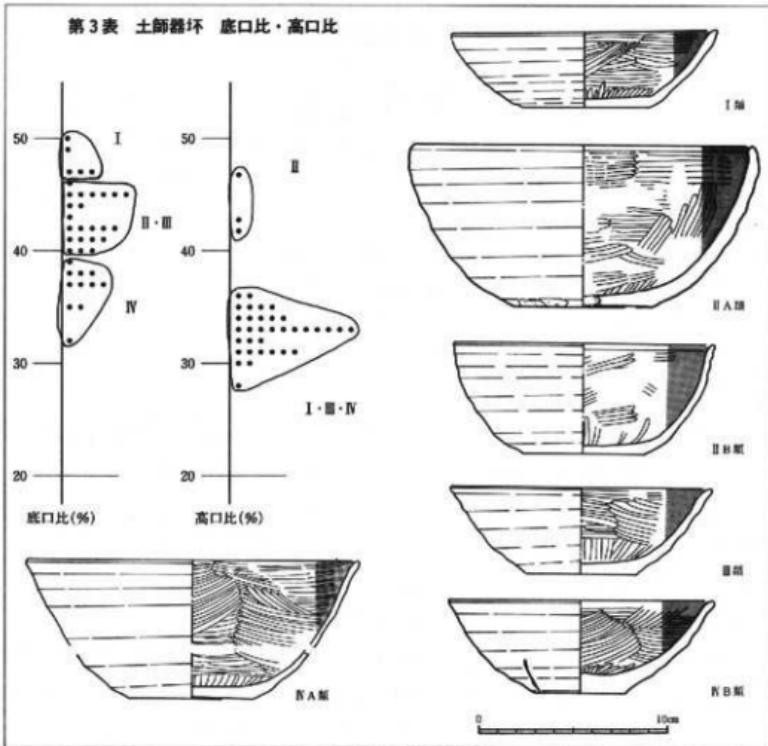
II A類：口径が17cm以上にもなる大型のもの

1点ある。底口比40%、高口比47%で、口径は18.6cmである。体部が丸味をもって外傾し、口縁部が内弯する器形である。底部の切り離し技法は回転糸切りである。底部の切り離し後は、体部下端に手持ちヘラケズリによる再調整が施されている。

II B類：口径が14cm以下のもの。

2点ある。底口比が45%前後、高口比42%前後で、口径は13.0～14.0cmの間である。体部から口縁部の器形には、丸味をもって外傾するもの、体部が丸味をもって外傾し、口縁部が外反す

第3表 土師器坏 底口比・高口比



第33図 土師器坏類別資料

るものがある。底部の切り離し技法は全て回転糸切りである。底部の切り離し後は、再調整が施こされるものと無調整のものがある。再調整のものは手持ちヘラケズリで、体部下端に施こされる。

Ⅲ類：底口比が40～46%のもので、高口比が40%未満のもの

19点あり、坏の内では最も多いためで50%の割合を占める。底口比は42～45%のものが多く、高口比は31～36%で、33%のものが多い。口径は13.0～16.5cmの間である。体部から口縁部の器形には、丸味をもって外傾するもの、体部が丸味をもって外傾し、口縁部が（やや）外反するものがある。底部の切り離し技法が明確なものは、全て回転糸切りである。底部の切り離し後は、再調整が施こされるものと無調整のものがあるが、無調整のものは全体の約90%を占める。再調整のものは、全て手持ちヘラケズリで、体部下端に施こされる。

Ⅳ類：底口比が30%台のもので、高口比が40%未満のもの

全体的に底径が小さいもので、口径の法量により、さらにA・Bに細分される。

IV A類：口径が17cm以上にもなる大型のもの

1点あるが、破片資料である。口径比37%、高口比40%近くのもので、全体的に器高がやや高いものである。口径17.8cmである。体部が丸味をもって外傾し、口縁部が外反する器形である。底部の切り離し技法は回転糸切りで、無調整である。

IV B類：口径が17cm以下のもの

10点ある。口径比は37・38%のものが多く、高口比は30~35%である。口径は13.5~15.0cmの間である。体部から口縁部の器形には、丸味をもって外傾するもの、体部が丸味をもって外傾し、口縁部が（やや）外反するものがある。底部の切り離し技法は全て回転糸切りである。底部の切り離し後は、再調整が施されるものと無調整のものがある。再調整のものは、全て手持ちヘラケズリで、底部全面、底部周縁、体部下端から底部周縁、体部下端に施される。

III

1点のみである。製作に際してロクロが使用されている。口径10.9cmの小型のもので、体部から口縁部にかけて外反気味に外傾する器形である。内面はヘラミガキの後、黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は环と同様である。底部の切り離し技法は回転糸切りで、無調整である。

II

製作に際してのロクロの使用、不使用によりI・II類に分類され、さらに法量、内面調整の有無により細分される。

I類：製作に際してロクロを使用しないもの

9点ある。口径が器高より大きい資料1点を除き、他は全て破片資料である。最大径を口縁部にもつ。口径が25cm前後の大型のものと、15cm前後の小型のものがある。口縁部は強く外反し、体部が長胴形あるいは鉢形状を呈する器形である。調整は外面が縦位のハケメ、内面が横位のハケメの後、口縁部内外面ともヨコナデが施されている。外面底部には窓状圧痕、網代圧痕が認められる。

II類：製作に際してロクロが使用されているもの

口径と器高の大小、最大径の部位、内面調整の有無により、さらにA~Dに細分される。

II A類：口径が器高より小さく、最大径を口縁部にもつもの

4点ある。口径は全て20cm以上のもので、最大のものでは26cmを測る。口縁部が外反し、体部が長胴形を呈する器形である。口縁部端部は全て上方へ摘み出されている。外面調整はロクロナデの後、体部中央部以下にヘラケズリが施されている。内面調整はロクロナデの後、体部にヘラナデや体部上半に回転ハケメ・体部下半にハケメが施されているものもある。

II B類：口径が器高より小さく、最大径を体部にもつもの

7点ある。口径は20~25cmの間のものが多く、最小のものでも18cmである。口縁部は外反し体部は紡錘形状を呈する器形である。口縁部端部は上方へ摘み出されるものとそうでないものとがあるが、前者が圧倒的多数を占める。外面調整はⅡA類と同様である。内面調整はロクロナデの後、口縁部から体部上半の一部または体部下半から底部の全面にヘラナデや、体部上半の一部に回転ハケメが施こされているものもある。

ⅡC類：口径が器高より大きく、最大径を口縁部にもち、内面にほとんど調整が施されたるもの

4点ある。口径が15cm前後の小型のもので、最小のもので12cm、最大のものでも18cmである。口縁部は外反し、体部は鉢形状を呈する器形である。口縁端部は全て上方に摘み出されている。外面調整はロクロナデの後、体部下端にヘラケズリが施こされている。内面調整はロクロナデのみのものがほとんどであるが、ロクロナデの後、体部の一部にヘラナデが施こされているものもある。底部の切り離し技法は回転糸切りで、底部には調整は施こされていない。

ⅡD類：口径が器高より大きく、最大径を口縁部にもち、内面全面に調整が施されたるもの

2点ある。口径の判るものは17cmとやや小型のものであるが、他の1点は20cm前後になるものと思われる。口縁部は外反し、体部は鉢形状を呈する器形であるが、ⅡC類に比べ全体的にやや器高が低い。口縁端部はⅡC類と同様である。外面調整はロクロナデの後、体部下半にヘラケズリが施こされている。内面調整は全面ヘラミガキの後、黒色処理が施こされている。底部の切り離し技法が明確なものは回転糸切りである。底部には調整が施こされていないものと底部全面にヘラケズリによる再調整が施こされるものがある。

鉢

製作に際してロクロを使用しないものである。破片資料が1点ある。口径が44cmもある大型のものである。体部はゆるやかに内弯しながら外傾し、口縁部が強く外反する。調整は外面体部が横位、縦位のハケメの後、ヘラケズリ、内面体部から底部が横位のハケメで、口縁部内外面はヨコナデが施こされている。外面底部には竪状压痕？が認められる。

(2) 所属年代

これら出土土師器の内、製作に際してロクロが使用されているものは、東北地方南部の土師器編年では「表杉ノ入式」（氏家：1957）に比定され、平安時代に位置づけられる。また、製作に際してロクロ未使用の甕（I類）・鉢の内、甕に関しては2号住居跡で、ロクロ使用の土師器と共に作られており、ロクロ使用の土師器と同時期のものと考えられる。鉢に関してても甕とほぼ同様な調整方法であること、加えて当調査区出土の土師器には「表杉ノ入式」より前形式のものを含まないことより、やはり同時期のものと思われる。

第4表 土師器・赤焼土器・須恵器類別資料(図化資料)出土地点

出土地点	土器										赤焼土器										須恵器			
	环					底	壺					底	壺					I	II	底	壺			
	I	IIA	IIB	III	IVA	VBD	不明	I	IIA	IIIB	IIIC	IID	底	I	II	底	壺							
田 a 所	-	-	-	1	1	-	-	1	-	-	-	-	1	-	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1号住居跡	-	-	1	9	-	3	1	-	-	-	1	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	1
1号住居跡	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2号住居跡	3	1	1	4	-	5	3	-	3	3	5	3	-	-	3	-	1	1	1	1	-	-	-	-
2号住居跡上	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	1	1	1	-	1	1	1	1	-	-	-	-
5号住居跡	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
10号住居跡	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
13号住居跡	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
19号住居跡	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
26号住居跡	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
29号住居跡	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2号住居跡	-	-	-	2	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	1
田 b 所	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-

当遺跡ではこれら土師器が一括り出土した遺構は、1・2号住居跡である。ただし、1号住居跡出土のものは、全て2号住居跡出土のものに包括されている。従って、2号住居跡出土のもの(図化資料)を中心として、またその内でも环に限定して、若干の検討を加えてみたい。

2号住居跡における环(17点)の特徴、土師器以外の环との共伴関係は以下のようになる。

1. I~IV類までの全ての類があるが、その内でも底口比の大きいI類は少なく(21%)、底口比が徐々に小さくなるIII~IV類が主体となる。底口比平均は42%である。

2. 口縁部から体部にかけての器形は a:全体的に丸味をもって外傾するもの(I~IV類)
b:体部が丸味をもって外傾し、口縁部が内湾するもの(II類) c:体部が丸味をもって外傾し、口縁部が(やや)外反するもの(II~IV類) のa~cまである。bはIIA類のみにみられ、全体に占める割合も6%と少なく、主体的なものはa~cの器形である。cはI類にはみられないが(2号住居跡以外ではあり)、全体に占める割合は50%である。

3. 底部の切り離し技法の明確なものは、全て回転糸切りである(I~IV類)。

4. 底部切り離し後の再調整は全て手持ちヘラケズリで、底部全面(I類)、体部下端(II~IV類)に施こされている。

5. 再調整のもの(I~IV類)は全体の20%で、無調整のもの(I~IV類)が80%と主体を占める。

6. 赤焼土器环、須恵器环と共に共伴関係にあり、环全体に対する割合は土師器85%、赤焼土器10%、須恵器5%である。

丹羽茂氏は最近、宮城県南部の集落跡における表杉ノ入期の資料を、土師器环の器形や器面調整技法などの特徴より、宮前遺跡第20号住居跡→青木遺跡第21号住居跡・台ノ山遺跡第8号

住居跡→東山遺跡土器溜→家老内遺跡第2号住居跡・宮前遺跡第54号住居跡→安久東遺跡第2号住居跡の順に並べている（丹羽：1983）。この変遷の中で最も特徴的のは、土師器壺の底口比が大きいものから小さいものへという推移が認められることである。また、これに呼応し壺の底部切り離し後の調整も再調整のものから無調整のものへと変化している。

第5表は本遺跡1・2号住居跡出土土器壺を宮城県南部の藏王町東山遺跡土器溜（真山悟1981）、白石市家老内第1・2号住居跡（真山悟：1981）、仙台市南小泉遺跡第6次調査1号住居跡（渡部弘美：1983）、仙台市安久東遺跡第2号住居跡（土岐山武：1981）出土土器（図化資料）と比較したものである。これによると東山遺跡土器溜出土土器と安久東遺跡第2号住居跡出土土器との間では、底口比、底部切り離し後の調整の差異の他に

1. 東山遺跡土器溜出土土器では当遺跡Ⅰ・Ⅲ類が主体を占めるのに対して、安久東遺跡2号住居跡出土土器ではⅣ類が主体（90%以上）を占める。
2. 口縁部から体部の器形は、体部が丸味をもって外傾し、口縁部が（やや）外反するもの-c-が、東山遺跡土器溜出土土器では50%以下であるのに対し、安久東遺跡第2号住居跡出土土器では100%となる。
3. 法量平均の内、口径・器高は安久東遺跡第2号住居跡出土土器では大きくなり、底径はその逆に小さくなる。
4. 土師器、赤焼土器、須恵器の間の組成では、ともに土師器が主体ではあるが、安久東遺跡第2号住居跡出土土器では赤焼土器の占める割合が増加し、反対に須恵器の占める割合が減少^{註1}している。

という差異が看取される。また、本遺跡1・2号住居跡、家老内遺跡第1・2号住居跡、南小泉遺跡第6次調査1号住居跡出土土器は、東山遺跡土器溜出土土器と安久東遺跡第2号住居跡出土土器との中間的な様相を示している。この内、家老内遺跡第1号住居跡出土土器を除く4資料は、表に掲げた項目の内、若干の差・欠落を除き、ほぼ同様な器形・法量（比）、成形技法である。従って当遺跡1・2号住居跡、家老内第2号住居跡、南小泉遺跡第6次調査1号住居跡出土土器は、東山遺跡土器溜出土土器と安久東遺跡第2号住居跡出土土器との中間的なものであり、しかも、ほぼ同時期のものとして捕えられる。

さて、2号住居跡出土土器の絶対年代であるが

1. 東山遺跡土器溜より9世紀中葉に比定される灰釉陶器が出土している。
2. 安久東遺跡第2号住居跡床面付近より10世紀後半に比定される灰釉陶器が出土し、この住居跡出土土器が、これとほぼ同時期のものとされている。
3. 2号住居跡出土土器土師器壺は、東山遺跡土器溜出土土器と安久東遺跡第2号住居跡出土

第5表 土師器環の各遺跡における比較(宮城県南部の集落遺跡)

項目	遺跡名		東山遺跡	家老内道跡	家老内道跡	高木森遺跡(6次)	今吉原中道跡(2次)	中井原中道跡(1次)	安久東遺跡
	大慈源	第1号住居跡	第2号住居跡	第2号住居跡	1号住居跡	2号住居跡	1号住居跡	2号住居跡	
(●は主作)	I	●	○	○	○	○	○	—	—
	II	○	—	—	○	○	○	○	—
	III	●	●	●	●	●	●	○	—
	IV	○	—	●	●	●	●	●	●
	その他	○	○	○	○	—	—	—	—
口縁一件部器形C 出現率%	50cm以下	50cm以上	50cm以上	50cm以上	50cm以上	50cm以上	50cm以上	100	
	47	44	41	42	42	41	41	36	
底口比平均%	(赤燒土器)	—	—	—	(42)	(41)	(40)	(37)	
	(須恵器)	(49)	—	—	(41)	(44)	—	(37)	
	33	34	33	34	34	34	34	33	
高口比平均%	(赤燒土器)	—	—	—	(33)	(37)	(32)	(31)	
	(須恵器)	(31)	—	—	(32)	(31)	—	(32)	
	13.6	13.8	14.5	14.4	14.5	14.5	14.5	14.7	
口径平均cm	(赤燒土器)	—	—	—	(14.2)	(14.4)	(15.0)	(14.0)	
	(須恵器)	(13.3)	—	—	(14.4)	(13.5)	—	(14.7)	
	6.4	6.1	6.1	6.0	6.0	6.0	6.0	5.3	
底径平均cm	(赤燒土器)	—	—	—	(6.0)	(5.9)	(6.0)	(4.9)	
	(須恵器)	(6.5)	—	—	(6.0)	(6.0)	—	(5.2)	
	4.5	4.7	4.6	4.9	5.0	4.9	4.9	4.9	
唇高平均cm	(赤燒土器)	—	—	—	(4.7)	(4.4)	(4.4)	(4.5)	
	(須恵器)	(4.0)	—	—	(4.6)	(5.0)	—	4.9	
底部切り離し技法	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	
	(須恵器)	(へ・赤)	—	—	(赤)	(赤)	—	(赤)	
再調査技法	回へ・手へ	リヘ	手へ	リヘ	手へ	手へ	手へ		
	(須恵器)	(回へ・手へ)	—	—	(手へ)	—	—		
再調査:無調査%	既:18	46:54	37:43	37:73	20:80	43:57	0:100		
(須恵器)	(18:82)	—	—	(9:91)	(0:100)	—	(0:100)		
土師器:赤焼土器:須恵器%	69:0:33	100:0:0	100:0:0	85:1:14	85:10:5	87:18:0	50:37:13		

赤:底部切り離し技法 リ:回転ヘリ切り技法 手:紡錘形切り技法

再調査技法(底部切り離し後) 回へ:回転ヘリカツリ 手へ:手持ちヘリカツリ

これら比較資料の法量は、各報文中の法量計測値及び回転資料より抽出したものである。従って、回転資料抽出のものには、右下の誤差が生じている可能性もある。

土器の中間的なものである。

4. 1・2号住居跡堆積土1層及び基本層位Ⅲa層中(住居跡検出面Ⅲb層上面)に、10世紀前半に降下したと考えられる灰白色火山灰(白鳥:1980)が小ブロック状に含まれていた。

以上の1~4により、2号住居跡出土上器の絶対年代は、9世紀中葉以降から10世紀前半以前の年代が与えられる。

註記

- 第5表掲載の割合は、報文資料に基づいている。しかし、その後、東山遺跡土器出土土器は宮前遺跡の報文中(丹羽:1983)で、安久東遺跡第2号住居跡出土土器は鹿島遺跡、竹之内遺跡の報文中(佐々木:1984)で須恵器としたものの内には、赤焼土器が含まれているという訂正がなされている。従って、実際には両遺跡の赤焼土器環の割合は、もっと高くなるものと思われる。

2. 安久東遺跡報文中では、この灰釉陶器の年代を11世紀頃としたが、その後、廣島遺跡、竹之内遺跡の報文中で、10世紀後半頃に訂正している。

3. 赤 焼 土 器

器種は环のみで、7点図化された。

环

全て製作に際してロクロが使用されている。土師器环III・IV B類と同様な器形を呈するものである。底口比は38~44%、高口比は29~33%である。口径は13.5~15.5cmの間である。体部から口縁部の器形は、丸味をもって外傾するもの、体部が丸味をもって外傾し、口縁部が（やや）外反するものがある。底部の切り離し技法は回転糸切りで、無調整である。

これら赤焼土器は、遺構内で土師器环と共に伴関係を持つことにより、土師器环とほぼ同年代が考えられる。

4. 須 惠 器

12点が図化された。器種には环、壺、甕がある。

环

底口比によりI・II類に分類される。

I類：底口比が50%以上のもの

全体的に底径が大きく、器高が低いもので2点ある。底口比は50~54%、高口比は30%前後で、口径は13.5cm前後である。体部から口縁部の器形は、丸味をもって外傾するもの、体部が丸味をもって外傾し、口縁部がやや外反するものがある。底部の切り離し技法は不明で、中央部に粘土が貼り付け（補強？）られた後、周縁部に手持ちヘラケズリによる再調整が施されている。

II類：底口比が40%前後のもの

土師器环III・IV B類と同様な器形を呈するもので、4点ある。底口比は37~44%、高口比は31~37%で、口径は13.5~15.5cmの間である。体部から口縁部の器形は、丸味をもって外傾するもの、体部が丸味をもって外傾し、口縁部が（やや）外反するものがある。底部の切り離し技法は回転糸切りで、無調整である。

壺

全て破片資料で、口縁部資料が1点、体部下端～底部資料が2点である。口縁部資料は長頸のもので、口縁部端部は上方へ摘み出されている。頸部下端には幅の狭いリング状の突帯が1条めぐる。体部下端～底部資料はいずれも小型のもので、付高台のものである。この内1点は、底部の切り離し技法が回転糸切りである。

甕

全て破片資料で、口縁部資料が1点、体部～底部資料が2点である。口縁部資料は外反するもので、口縁部端部は上・下方へそれぞれ摘み出されている。体部～底部資料はともに外面は体部下端から底部がヘラケズリ、内面は部分的にナデが施されている。

これら須恵器の内、環I類を除く環II類・壺・甕は、遺構内で土師器環と共に伴関係を持つことより、土師器環とほぼ同年代が与えられる。環I類は基本層位（IIIa・IIIb層）よりの出土であるが、出土層及び出土遺物中の土師器が全て「表杉ノ入式」に属することにより、平安時代に位置づけられる。

5. 陶 磁 器

陶器が10点、磁器が2点の合計12点が出土した。全て細片で図化できたものはない。遺構内（2号土塙）、基本層位から出土した。

陶器（図版29-1～4・7～11）

灰釉陶器（2～4）

3点出土している。胎土はいずれもわずかに砂粒を含むが、精製されたもので、須恵器の胎土とは異なる。また、いずれも堅く焼きしまっている。基本層位IIIa～IIIb層よりの出土である。
瓶（2・3）：いずれも体部資料である。2は外面に3条以上の横位直線文がめぐっており、把手？の剝離痕が認められる。また、外面には全面にオリーブ灰白色の釉がかけられている。胎土は灰白色である。器厚は7～10mmである。3は釉が認められないが、胎土の点より灰釉陶器に属すると思われる。内外面とも灰白色で胎土は灰オリーブ色を呈する。器厚は6mmである。
皿？（4）：高台付のもので、底部～高台部の資料である。底部内面全面に刷毛塗りによるオリーブ灰色の釉がかけられている。胎土は灰白色である。器厚は4～6mmである。

これらの灰釉陶器は平安時代に属するものであるが、詳しい年代については小破片資料のため不明である。

綠釉陶器（1）

瓶が1点出土している。基本層位IIa層より出土した。外反する口縁部資料である。胎土は

ほとんど砂粒を含まず、精製されたもので、堅く焼きしまっている。内外面には暗緑灰色の釉がかけられている。胎土は灰色である。器厚は3mmと薄い。

所属年代は、灰釉陶器とほぼ同年代のものと思われる。

その他の陶器（7～11）

6点出土した。7が2号土壤より出土した他は、全て基本層位Ⅱa層出土である。7～10は常滑産の甕の体部資料である。7・8は外面に自然釉がかかっている。器厚は9が9mmとやや薄手であるが、他は13mm前後である。11は产地不明のもので、壺か甕の体部破片である。内外面とも鉄釉がかかっている。器厚は7mmである。

7～10は鎌倉時代後半から南北朝頃のものと思われる。また、11は近世頃のものであろうか。

磁器（図版29—5・6）

白磁

1点出土した。皿？の口縁部資料で、基本層位Ⅲa層より出土した。中国産のものと思われる。内外面とも灰白色を呈する。器厚は3mmと薄い。

所属年代は平安時代末頃から鎌倉時代にかけてのものと考えられる。

青磁（6）

1点出土した。瓶類の体部資料で、基本層位Ⅱa層より出土した。これも中国産のものと思われる。内外面とも灰オリーブ色で貫入が認められる。器厚は4～8mmである。

所属年代は鎌倉時代と考えられる。

6. 土 製 品

遺構内（2号住居跡）、基本層位（Ⅱa・Ⅲa・Ⅲb層）より10点出土した。内訳は土錘が7点、羽口が3点である。

土錘（第20図4～6、第32図1～4、図版28—2～8）

大きさには長さが8cmを越す大型のものと5cm以下の小型のものがある。また形態的には、中央部に膨みをもつ紡錘状のものと、中央部がやや膨む円筒形状のものがある。大型のものは3点ある（第20図4・5、32図4）。全て紡錘状のもので、外径3.7cm前後、孔径は1.2cm前後を測る厚手のものである。外面にはオサエ痕が残り、その後軽いミガキ痕が施されている。小型のものは4点ある。紡錘状のもの（第32図1～3）と円筒状のもの（第20図6）がある。いずれも外径1.4cm前後、孔径0.4cm前後を測る。磨滅しているものが多く外面調整が明確に認められるものは少ないが、6はていねいな磨きが認められる。

これらの内、住居跡内及び基本層位 IIIb 層出土のものは、平安時代に属する。また、他の基本層位出土のものの多くも同時代に属するものと思われる。

羽口（第20図2・3、図版31-3）

3点出土した。いずれも細片である。第20図3の外径は推定で5cm前後?と思われるが、他に関しては外径・孔径とも不明である。第20図3、写真図版31-3とも先端部のもので、鉄津の付着が著しい。炉装着部と思われる。2は二次加熱で赤色化している。

第20図2・3は2号住居跡堆積土よりの出土で、平安時代に位置づけられるものと思われる。他の1点は基本層位 IIa 層よりの出土で、所属時期は不明である。

7. 石器、石製品

遺構内（1・2号住居跡）、基本層位（IIIa・IIIb層）より9点出土した。この内石製品6点は全て住居内出土である。石器は全て磨石、石製品は全て砥石である。

磨石（第20図10、第32図7・8）

全て欠損品である。10・7は扁平な小円礫で、全面磨かれている。10は表面中央部に弱い敲打痕が認められる。8は大型のやや扁平な礫で、表裏面が磨かれている。尚、二次加熱を受け赤色化している。

所属年代に関しては、当調査で縄文土器片も出土している点より、出土層位（III層）、出土遺構（2号住居跡）から年代を限定することはできない。

砥石（（第10図1～3、第20図7～9、図版30-1～3）

細片のものが多く、1・2がほぼ現形をとどめているのみである。形状には先細りの長方体のもの（2）、扁平なもの（9）、不定形なもの（1）がある。砥面は上下面を除く表裏面・両側面のものが多いが、内には裏面が自然面となるもの（7）もある。砥面は平坦なもの、やや凹状となるもの、反対にやや凸状となるものがある。やや凹状となるもの多くは研磨溝が認められる（1・2・7）。また上下面を残す資料には敲打痕がみられる。（2・9）。

これらは全て1・2号住居跡より出土しており、住居跡の所属年代より平安時代に属するものと考える。

8. 鉄製品、鉄 淚

遺構内、基本層位より38点出土した。この内鉄製品は31点であったが、破片資料の上、腐植が激しく、識別不能なものがほとんどであった。

鉄製品（第10図4、第20図11・12、第32図5・6、図版30—4～11）

わずかに2点が識別されたのみである。第32図5・6は鉄鎌・釘である。ともに鉄鎌の付着が著しく原形を明確に把握することはできない。5は現状では三角形で、逆刺が付く。茎の有無は不明である。6は頭部が曲り幅広になった釘の破片資料である。現状では断面が丸味を帯びているが、角釘と思われる。

これらは、出土層位、出土遺構の点より、多くは平安時代に所属するものと思われる。

鉄涙（図版31）

7点出土した。いずれもⅢb層上面検出遺構、基本層位Ⅲ層より出土した。大型のものから小型のものまでみられる。1・2はともに明褐色を呈する楕円形涙である。粗鬆なもので、下面には粘土が付着している銀冶涙と考えられる。

これらは、出土層位、出土遺構の点より、多くは平安時代に所属するものと思われる。

第V章 検出遺構の検討

1. 所属年代

(1) IIb層上面検出遺構

1号溝、1号性格不明遺構が検出された。重複関係はなく、遺構に伴う出土遺物はない。検出層 IIb層は、分布域が限られていた層のためか、出土遺物は少ない。また、堆積年代を推測する遺物の出土もない。従って IIIa層上面検出遺構の年代より、IIb層上面検出遺構の所属年代は中世後半以後と考えられる。

(2) IIIa層上面検出遺構

1～4号土壤が検出された。重複関係はなく、遺構に伴う出土遺物はない。検出層 IIIa層中には、10世紀前半の降下と考えられる灰白色火山灰の小ブロックが含まれている。また、IIIa層中で最も新しい出土遺物は、平安時代末頃から鎌倉時代に位置づけられる中国産の白磁片である。加えて、2号土壤堆積土中より、鎌倉時代後半から南北朝頃の陶器片（常滑産）が出土していることより、IIIa層上面検出遺構の所属年代は中世前半頃と考える。

(3) IIIb層上面検出遺構

1・2号住居跡、5～30号土壤、2～4号性格不明遺構、1・2・4～13・15～18号ピットが検出された。各遺構間の重複関係は比較的多く認められた。最も重複が多かったのは7・10・25号土壤間で、(古)25号→10号→7号(新)という重複関係をもつ。遺構に伴う遺物は、全て両住居跡よりの出土で、この出土遺物より両住居跡は平安時代（9世紀中葉以降、10世紀前半以前）に位置づけられた。IIIb層中出土土師器は両住居跡より新しいものは含まず、平安時代より古いものも含まない。さらに IIIa層上面検出遺構の所属年代を加味すれば、IIIb層上面検出遺構は、平安時代（9世紀中葉以降）に位置づけられる。ただし、遺構に重複関係がみられること、その内でも、灰白色火山灰層を含む1号住居跡堆積土1層を切るピット（4号）が存在することより、各遺構間に時期差が認められる。

1・2号住居跡は、その出土遺物一土師器环一よりほぼ同時期のものとした遺構である。しかし、両遺構間には重複関係は認められないものの、両者の配置関係からは同時存在は認め難い。両者の出土遺物（図化資料）の内、比較的出土量の豊富な土師器について、再度対比してみると

1・2号住居跡では环は、I～IV類までの全てを出土するのに対し、1号住居跡では全体的に底径の大きいI類を欠落する。

2. 2号住居跡では壺は、底部切り離しの後、再調整するものが20%に対し、1号住居跡では57%と半数以上を占める。

3. 2号住居跡では甕は、Ⅰ・Ⅱ類を出土するのに対し、1号住居跡では製作に際してロクロを使用しないⅢ類を欠落する（ただし、2号住居跡の甕の主体はⅡ類）。

以上のような1～3の相違点が認められる。この内、3に関してであるが、甕Ⅰ類すなわち、製作に際してロクロを使用せず、内外面がハケメ調整の甕は、宮城県南部の集落跡で、2号住居跡とほぼ同時期とした家老内遺跡第2号住居跡、南小泉遺跡第6次調査1号住居跡出土遺物には認められない。また、これ以降と明確に断定される遺跡よりも、現在のところ出土をみていない。甕Ⅰ類とほぼ同様な器形及び内外面調整のものは、白石市青木遺跡（小川：1980）第21号住居跡に類例が求められる。青木遺跡第21号住居跡出土土器は、東山遺跡土器溜出土土器の前段階に位置づけされているもの（丹羽：1983）、この住居跡では甕は、製作に際してロクロを使用しないものが主体を占める。また、外面調整が異なるが、家老内遺跡1号住居跡からも製作にロクロを使用しない甕が出土している。家老内遺跡1号住居跡出土の土師器壺は、器形・成形技法・法量等より東山遺跡土器溜出土土器と安久東遺跡第2号住居跡出土土器との中間的なものである（第Ⅳ章 2. 土師器）。しかし、当遺跡2号住居跡に比べ、底口比平均が大きく、口径平均も小さく、古い様相を呈している。このように1・3の相違点に基づけば、2号住居跡の方が、1号住居跡より古いものとしての位置づけが可能である。ただし、2の相違点に着目するならば、その逆も成り立つとも考えられる。従って、現段階では、両住居跡の同時存在は認められないものの、明確にその前後関係をおさえることはできなかった。しかしながら、両住居跡間の時間的差異がさほど大きくなかったであろうことは、出土遺物より推測される。

(4) IVa層上面検出構

小溝状造構、2号溝跡が検出された。この両遺構は、後述するように（第V章2）、両者一体として機能していたと考えられる遺構である。両遺構及び堆積土よりの出土遺物はない。また、IVa層以下よりの出土遺物もない。従って、上層のⅢb層出土遺物、Ⅲb層上面検出遺構の所属年代より、両遺構の所属年代は平安時代（10世紀前半）以前に位置づけられる。1次調査では、1次調査基本層位IV・V・VI層の各上面で遺構が検出されている。この内、IV・V層上面検出遺構は平安時代、VI層上面検出遺構は古墳時代前期（埴輪期）、後期（栗葉期）に属するものであった（青沼・長島：1983）。1次調査と2次調査の基本層位の対応関係は明確にできなかった。しかし、2次調査Ⅲb層上面検出遺構及びⅢa・b層出土遺物は、1次調査IV・V層上面検出遺構出土遺物及び基本層位出土の平安時代の遺物とほとんど変わりなく、両調査地点

第6表 遺物出土地点

出土遺物 出土地点	漢文 土 器	土師器 土 器	漆 器	須惠器	灰 陶 陶 陶	綠 陶 陶 陶	中 世 陶 陶	近世? 陶 陶	白 陶	青 陶	土質品	石 器	石製品	陶製品	鐵 洋
II a層	○	○	○		○	○	○	○	○	○				○	
1号土礪堆積土	○	○	○											○	
II b層	○	○	○											○	
1号土礪堆積土上	○		○												
2号土礪堆積土	○		○				○								
3号土礪堆積土	○		○												
4号土礪堆積土	○		○												
II a層	○	○	○	○					○	○	○		○	○	
1号住居跡	○	○	○										○	○	
1号住居跡堆積土	○	○	○										○	○	
2号住居跡	○	○	○										○	○	
2号住居跡堆積土	○	○	○	○								○	○	○	○
5号土礪堆積土	○	○	○												
7号土礪堆積土上	○		○												
8号土礪堆積土	○		○												
9号土礪堆積土	○														
10号土礪堆積土	○	○	○												
11号土礪堆積土	○		○												
12号土礪堆積土	○		○												
13号土礪堆積土	○		○										○		
14号土礪堆積土	○		○										○		
15号土礪堆積土	○		○												
16号土礪堆積土	○		○												
17号土礪堆積土	○														
18号土礪堆積土	○		○												
19号土礪															
19号土礪堆積土	○		○												
21号土礪															
21号土礪堆積土	○														○
24号土礪堆積土	○														
26号土礪堆積土	○	○													
29号土礪堆積土	○		○												
30号土礪堆積土	○		○												
2号性不地積土	○	○	○											○	
3号性不地積土	○	○	○											○	
4号性不地積土	○		○												
1号ピット埋積土	○														
4号ピット埋積土	○		○												
16号ピット埋積土	○														
18 A号ピット埋積土	○														
II b層	○		○	○								○	○	○	○

の平安時代の遺構はほぼ同時期のものとすることができる。このように1次調査の結果を踏まえるならば、2次調査 IVa層上面検出遺構の所属年代を、古墳時代後期、あるいは前期に位置づけることも可能である。

2. 小溝状遺構と中田畠中遺跡の時代的変遷

(1) 小溝状遺構について

IVa層上面で小溝状遺構が検出されている。小溝状遺構は、20~60cm間隔で同方向に並ぶ上端幅30~70cm、深さ10~20cmの溝幅が不安定な、浅い、底面の凹凸が激しい小溝群である。また、溝方向をほぼ真北方向にとっている。

このような小溝群は、仙台市内では他に、安久東遺跡（仙台市教育委員会：1977）、南小泉遺跡（結城・工藤：1978 工藤：1983）、六反田遺跡（田中：1981）、山口遺跡（田中：1984）、下ノ内遺跡（篠原：1982・1983 渡辺忠彦：1984）、下ノ内浦遺跡（吉岡：1984）、後河原遺跡（佐藤：1984）、伊古田遺跡（金森・渡辺：1985）等で検出されている。これらの内には、同一方向のものだけではなく、直交方向のものが認められる例もある。

これら小溝群は、形状、規模が類似することは基より、以下のような共通点が認められる。

1. 立地が微高地上である。
2. 溝方向が真北方向、あるいはその直交方向であるものが多い。
3. 堆積土中に、検出面下の基本層位をブロック状に含んでいる。

これらより、このような小溝群の性格を畠の畝に関連するものではないかとする見解も出されている（田中：1981 佐藤：1984）。しかしながら、現在のところこれを明確に断定するに至る材量は、仙台市内の各遺跡からは得られていない。今後、良好な遺跡の存在、あるいは関連諸科学による分析により、小溝状遺構の性格は吟味されていくべきであろう。従って、当遺跡検出の小溝状遺構の性格は、畠の可能性もあることを指摘するにとどめたい。

2号溝跡は、小溝状遺構とほぼ直交する遺構である。この溝跡の南側は、小溝状遺構と同一面であるIVa層上面で検出された。しかし、北側では、IIIb層とIVa層の中間層一小溝状遺構堆積土に類似するが、IVa層ブロックを含まない層。厚さ10cm程度の上面で検出されている。狭い範囲での調査ではあったが、この中間層の上面、あるいは直下のIVa層上面からは、小溝状遺構は検出されなかった。また、2号溝跡と小溝状遺構の重複関係をみると、2号溝跡の方が新しいか、両者同時存在のいずれかが考えられる。

このような2号溝跡と小溝状遺構の遺構配置、検出面、重複関係を総合すると、両者が同時存在であったことが推察される。しかも、1. 小溝状遺構とほぼ直交する。2. 2号溝跡を境にし、小溝状遺構が分布を示さなくなる という遺構配置に、より視点を置くならば、2号溝跡は、小溝状遺構を画する機能を有する遺構として理解される。

同じような小溝状遺構と溝跡との関係は、前述、後河原遺跡でも認められている。しかし、後河原遺跡に関しても、両者の関係の一端を垣間見たにすぎず、溝跡が、小溝状遺構全体の分布域の中で、どのように配置されるかは、なお不明である。今後、小溝状遺構と溝跡の関係の全体像が把握できる資料に期待したい。また、その段階をむかえれば、小溝状遺構の性格解明

もより進展するものと思われる。

(2) 中田畠中遺跡の時代的変遷について

中田畠中遺跡1・2・3次調査結果に基づき、当遺跡の時代的変遷について若干ふれておきたい。1次調査は昭和57年度(青沼・長島:1983)、3次調査は昭和59年度調査(田中:1985)を基にしている。いずれも遺跡範囲の北側部分が調査地点となっており、本文の時代的変遷は北半部分のみという限定条件の下である。便宜上、1次調査区を「西側」、2次調査区を「中央」、3次調査区を「東側」という名称で呼ぶこととする。

古墳時代

現在までの調査では、当遺跡を人間が居住域として利用し始めるのは、この時代になってからである。すでに、前期には「西側」には集落が形成されている。その後、集落が地点を変え継続したか、あるいは廃絶したかは不明であるが、この時代の後期には再び「西側」に集落が形成されている。しかし、全時期を通じて、「中央」・「東側」には居住域はひろがってはいない。この両地区には、この時代に始まったかは明確に断定できないが、生産域一畠一の可能性もある小溝状造構がひろがっていたことも想定される。

奈良時代

この時代には「中央」・「東側」はもとより、「西側」にも居住域が形成された痕跡は残っていない。遺跡範囲内で居住域が移動したか、この地が当時の居住域としては適さなかったのであろうか。

平安時代

9世紀中葉以降になると再び北半部分に集落が形成され始める。しかも、「西側」・「中央」・「東側」全てに居住域がひろがる。古墳時代に比べると、広範囲にわたって集落一居住域一が拡大したことが窺える。

中世以降

その後も、この地は生活の場として引き継がれる。しかし、前時代に比べ、造構密度が極端に減少する。明確にこの時代の造構と認定できるものは、「中央」・「西側」で検出されているが、これらが居住域に伴う造構であるかについては明らかではない。

以上のように、中田畠中遺跡の北半部分では、古墳時代の前期には集落が形成された。その後の平安時代には、生産域?の部分にまで広範囲に集落が拡大した。だが、中世以降になると集落は衰退し、様相が一変する。しかし、この地がその後の土地利用の方法はともかく、現代まで、何らかの人間の営みの痕跡を受けてきたことは明確である。

第VI章 ま　と　め

1. 中田畠中遺跡は、名取川右岸の標高約5mの自然堤防上に位置する。
2. 検出遺構及び基本層位Ⅱ～Ⅲ層より、縄文土器・土師器・赤焼土器・須恵器・陶磁器・土製品・石器・石製品・鉄製品が出土した。これらの内、最も出土量が多かったのは土師器である。これら土師器は、全て「表杉ノ入式」に比定される。
3. 検出遺構は、基本層位Ⅱb層、Ⅲa層、Ⅲb層、Ⅳa層の各上面より検出された。
4. 各基本層位上面検出遺構は、Ⅱb層：溝跡1条、性格不明遺構1基 Ⅲa層：土壙4基 Ⅲb層：住居跡2軒、土壙26基、性格不明遺構3基、ピット16個 Ⅳa層：小溝状遺構、溝跡1条である。
5. 各基本層位上面検出遺構の所属年代は、Ⅱb層：中世後半以降 Ⅲa層：中世前半 Ⅲb層：平安時代 Ⅳa層：平安時代以前（古墳時代？）が想定される。
6. Ⅲb層上面検出遺構の内、両住居跡（1・2号）の所属年代は、出土土師器环の他遺跡（宮城県南部の集落跡）との比較より、9世紀中葉以降、10世紀前半の時代に位置づけられた。
7. Ⅳa層上面で検出された小溝状遺構と溝跡は、畠に間連する遺構の可能性もある。
8. 1～3次調査の結果より、遺跡北半部では、集落が形成されたのは古墳時代の前期で、しかも古墳時代には集落は西側に限定され、中央及び東側には生産域？一畠？一がひろがっていた可能性もある。しかし、平安時代になると集落は、東側まで拡大している。だが、中世以降になると、逆に集落は衰退する傾向を示している。

今回の調査では、土地所有者 佐藤幸一郎氏には並々ならぬ御便宜、御援助を賜わり、大変感謝しております。文末にはなりましたが、御礼申し上げます。

引用・参考文献

- 青沼一民・長島榮一 1983 「中田畠中遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第53集
- 阿部義平 1953 「東国の土師器と須恵器」『帝塚山考古学』
- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯
- 小笠原好彦 1976 「東北地方における平安時代の土器についての二三の問題」『東北考古学の諸問題』
- 岡田茂弘・桑原滋郎 1974 「多賀城周辺における古代环形土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究研究紀要』I
- 小川淳一 1980 「青木遺跡—東北自動車道遺跡調査報告書IV」『宮城県文化財調査報告書』第71集
- 金森安孝・渡辺誠 1985 「伊古田遺跡一年報6」『仙台市文化財調査報告書』第83集
- 工藤哲司 1983 「南小泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第52集
- 桑原滋郎 1969 「ロクロ土師器环について」『歴史』第39輯
- 経済企画庁 1967 「地形・表層地質・土じょう 仙台」
- 佐々木和博 1984 「鹿島遺跡 竹之内遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第101集
- 佐藤甲二 1984 「後河原遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第71集
- 篠原信彦 1982 「下ノ内遺跡—仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報I」『仙台市文化財調査報告書』第40集
- 篠原信彦 1983 「下ノ内遺跡—仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報II」『仙台市文化財調査報告書』第56集
- 庄子貞雄・山田一郎 1980 「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡 昭和54年度発掘調査概報』
- 白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要』Ⅸ
- 仙台市教育委員会 1977 第1図・第2図「安久東遺跡現地説明会」資料
- 田中則和 1981 「六反田遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第34集
- 田中則和 1984 「山口遺跡II」『仙台市文化財調査報告書』第61集
- 田中則和 1985 「中田畠中遺跡一年報6」『仙台市文化財調査報告書』第83集
- 土岐山武 1980 「安久東遺跡—東北新幹線関係遺跡調査報告書4」『宮城県文化財調査報告書』第72集
- 丹羽 茂 1983 「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第96集
- 真山 悟 1981 「東山遺跡—東北自動車道遺跡調査報告書V」『宮城県文化財調査報告書』第81集
- 真山 悟 1981 「家老内遺跡—東北自動車道遺跡調査報告書V」『宮城県文化財調査報告書』第81集
- 結城慎一・工藤哲司他 1978 「南小泉遺跡範囲確認調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第13集
- 吉岡泰平 1984 「下ノ内浦遺跡—仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報III」『仙台市文化財調査報告書』

第69集

渡部弘美 1983 「南小泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第55集

渡辺忠彦 1984 「下ノ内遺跡—仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ」『仙台市文化財調査報告書』

第69集

写 真 図 版



1. 遺跡全景(南西より)



2. 調査対象区全景(西より)

図版 1 遺跡全景



1. IIIa層上面検出遺構
完掘全景(西より)

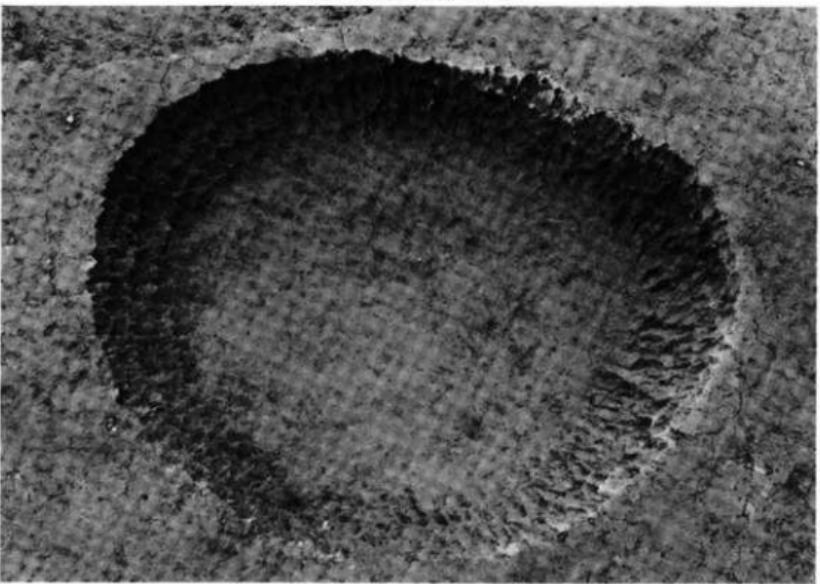


2. 1号溝跡完掘状況
(南より)

図版2 IIb層上面検出遺構、
IIIa層上面検出遺構1

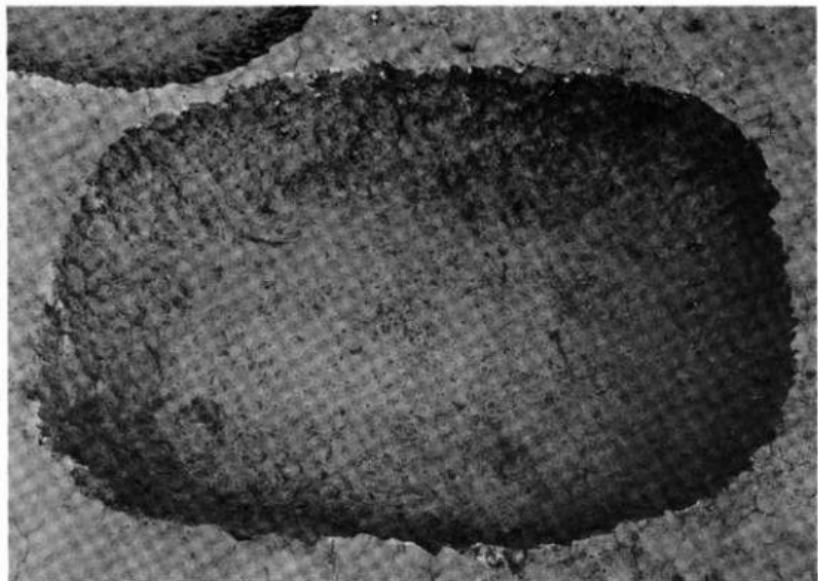


1. 1号土壤完掘状況(南より)

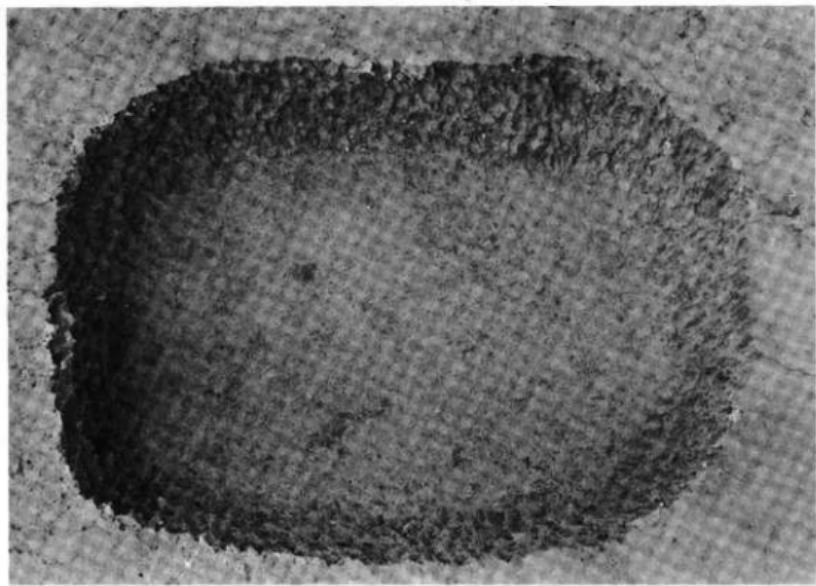


2. 2号土壤完掘状況(東より)

図版3 IIIa層上面検出遺構2

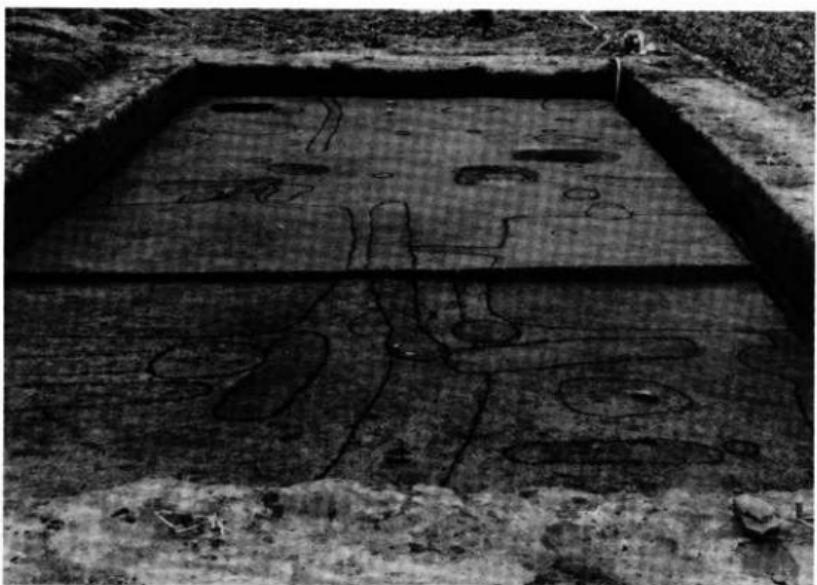


1. 3号土壤完掘状況(西より)

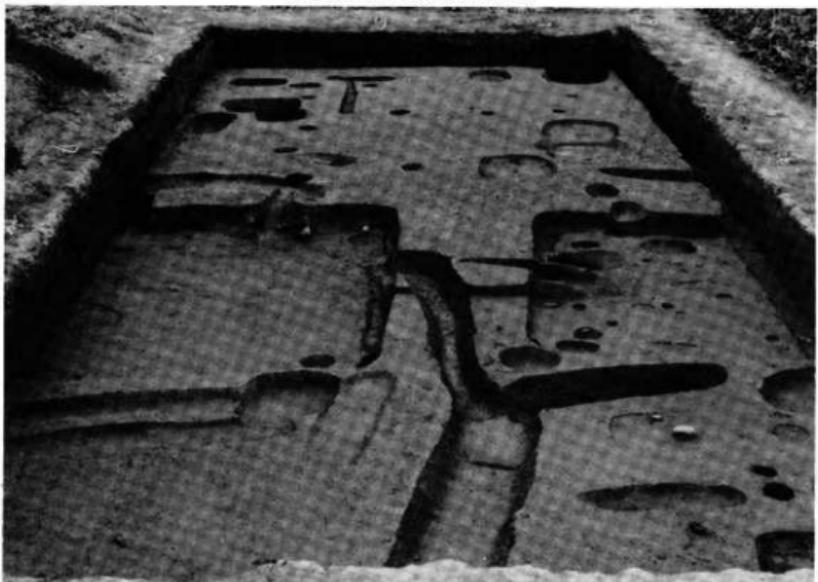


1. 4号土壤完掘状況(南より)

図版4 IIIa層上面検出造構 3

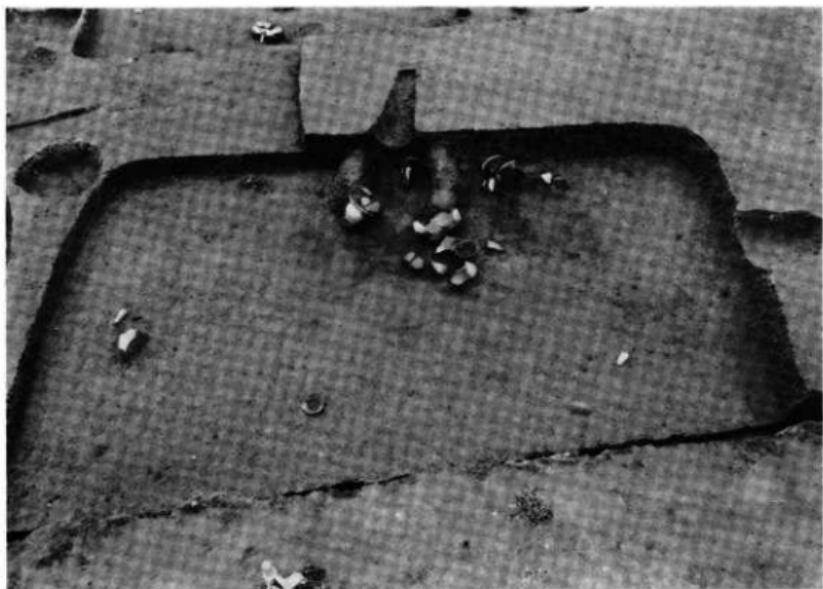


1. IIIb層上面遺構検出状況(西から)

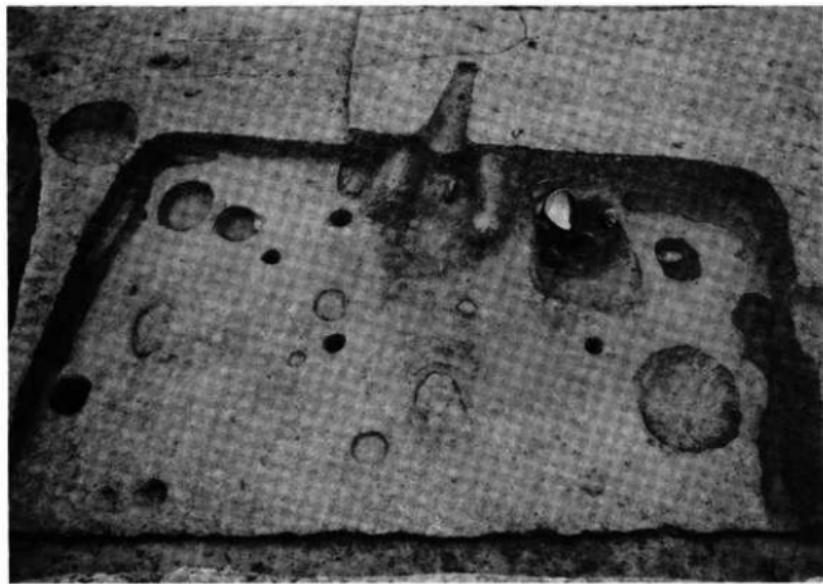


2. IIIb層上面検出遺構完掘全景(内から)

図版5 IIIb層上面検出遺構 1



1. 1号住居跡遺物出土状況(南より)



2. 1号住居跡完掘状況(南より)

図版6 IIIb層上面検出遺構 2



1. 1号住居跡 P 2 遺物出土状況 1 (南東より)



2. 1号住居跡 P 2 遺物出土状況 2 (南より)

図版 7 IIIb層上面検出遺構 3



1. 2号住居跡カマド検出状況(西より)

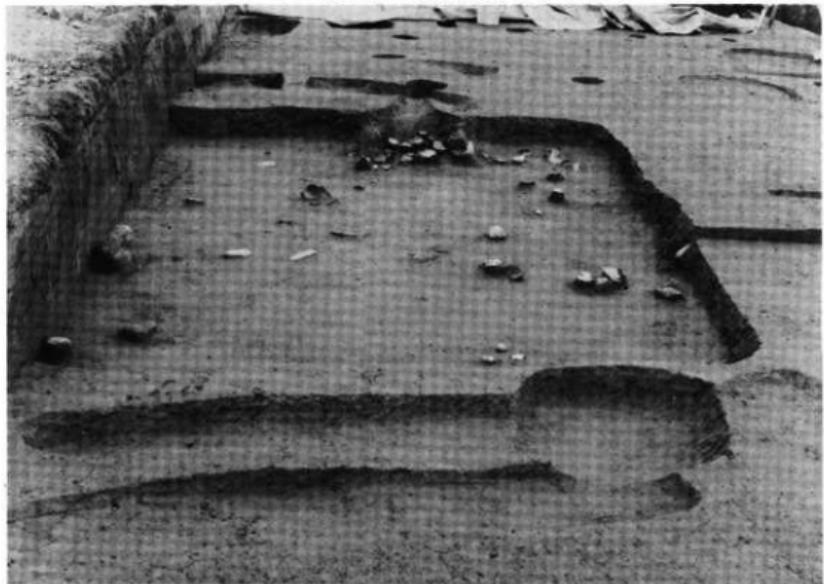


2. 2号住居跡カマド内遺物出土状況(西より)

図版 8 IIIb層上面検出造構 4

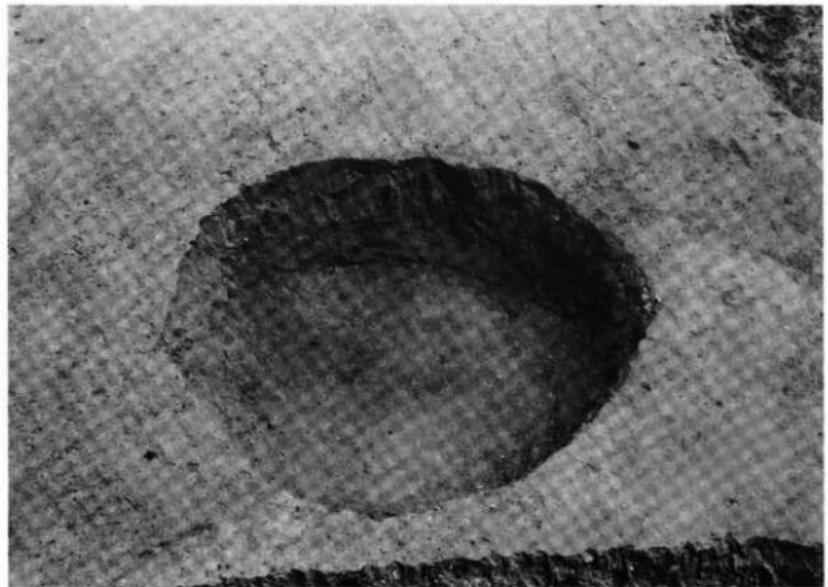


1. 2号住居跡カマド完掘状況(西より)



2. 2号住居跡遺物出土状況(西より)

図版9 IIIb層上面検出遺構5

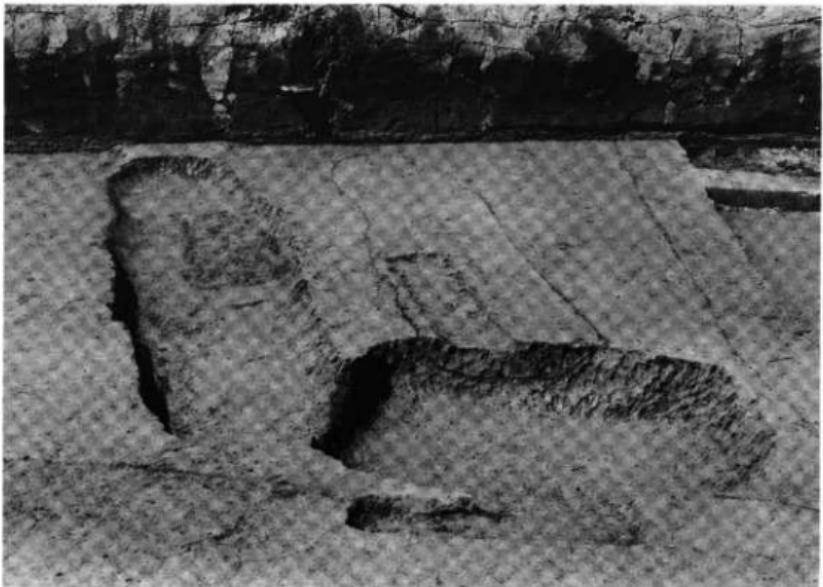


1. 6号土壙完掘状況
(西より)

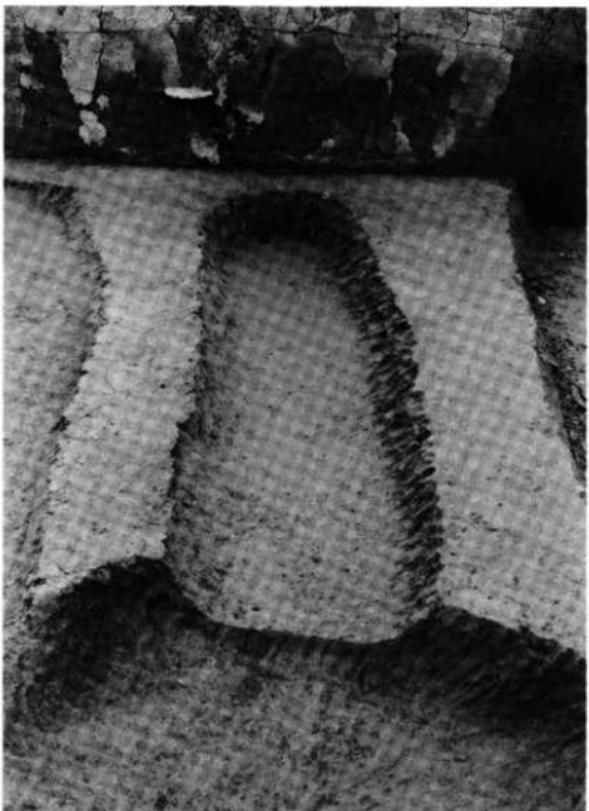


2. 5号土壙遺物出土状況
(南より)

図版10
IIIb層上面検出遺構 6



1. 7・8(左)号土壤完掘
状況(南から)



図版11
Ⅲb層上面検出遺構7

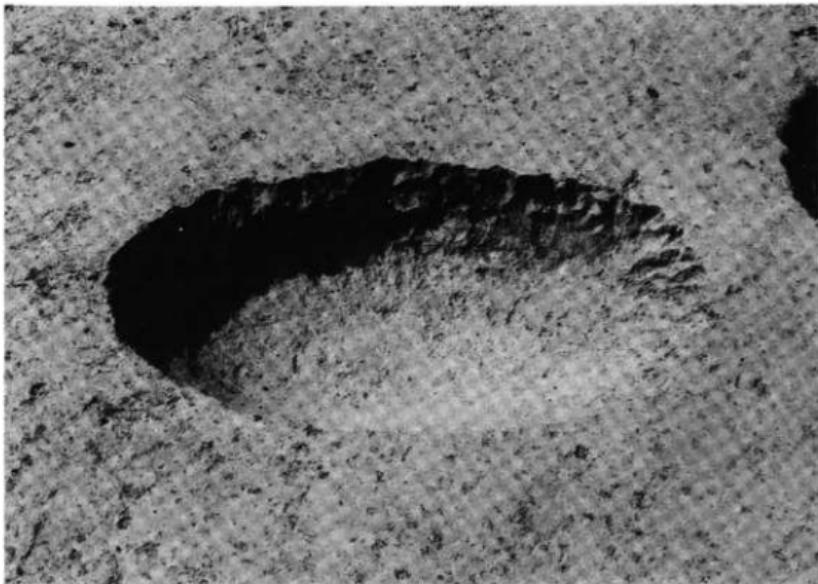


1. 7号土壠完掘状況
(南より)

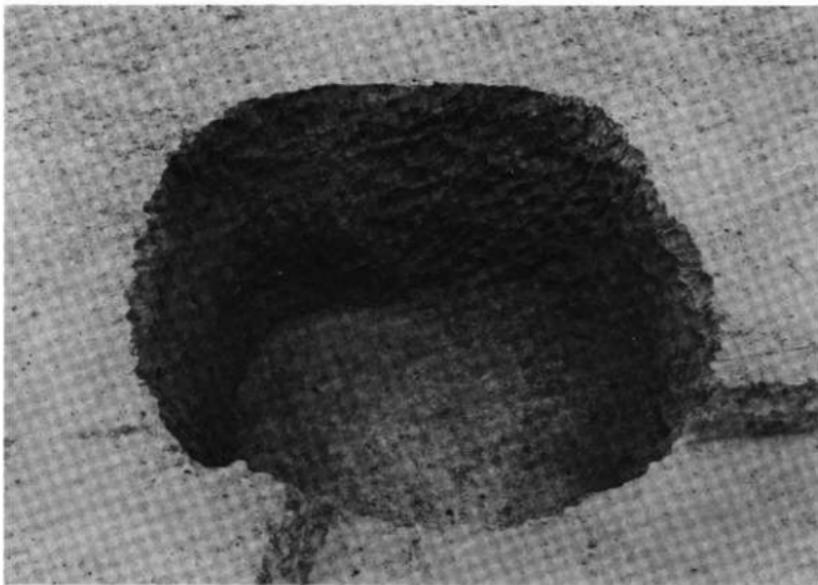


2. 10号土壠完掘状況
(南東より)

図版12
IIIb層上面検出遺構 8

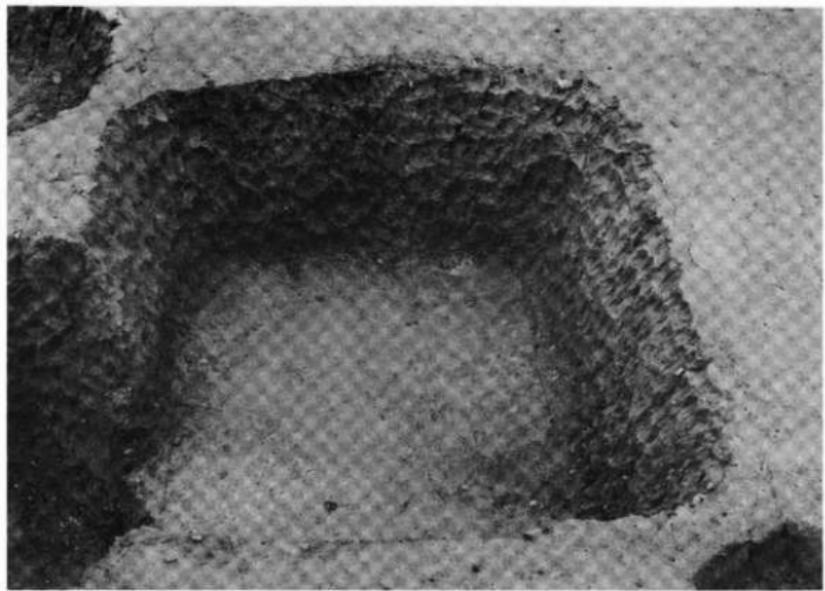


1. 12号土壤完掘状況(北から)

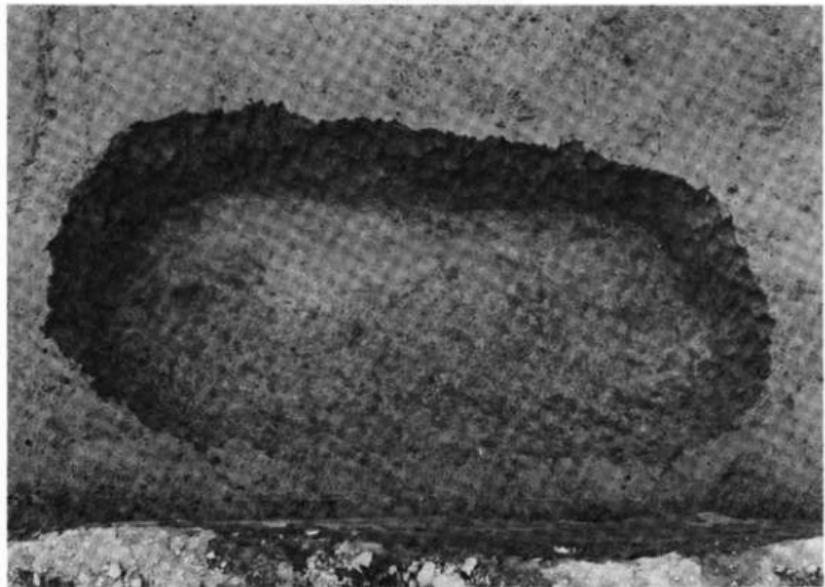


2. 14号土壤完掘状況(東から)

図版13 IIIb層上面検出造構 9

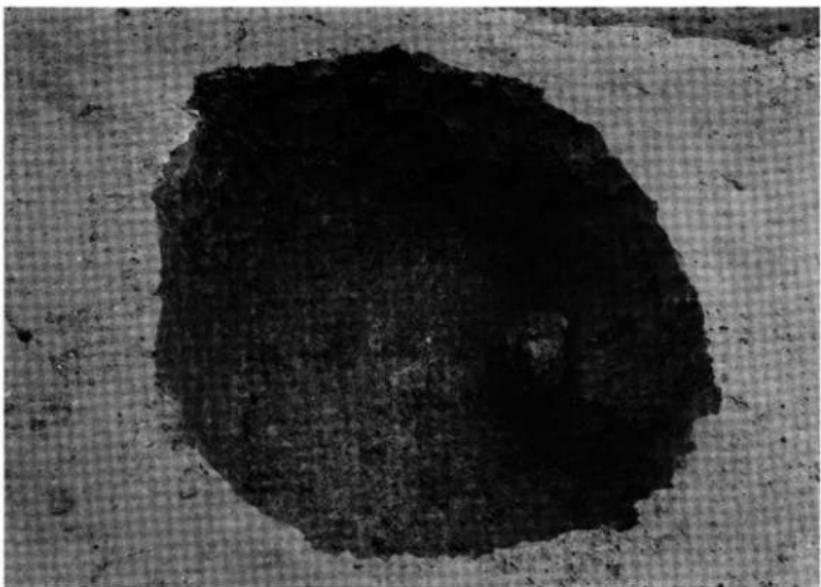


1. 15号土壤完掘状況(南から)

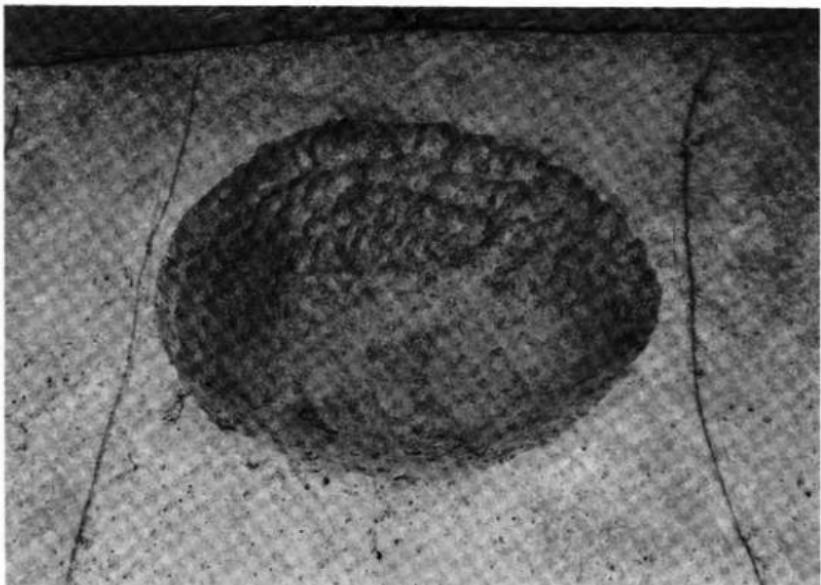


2. 20号土壤完掘状況(北から)

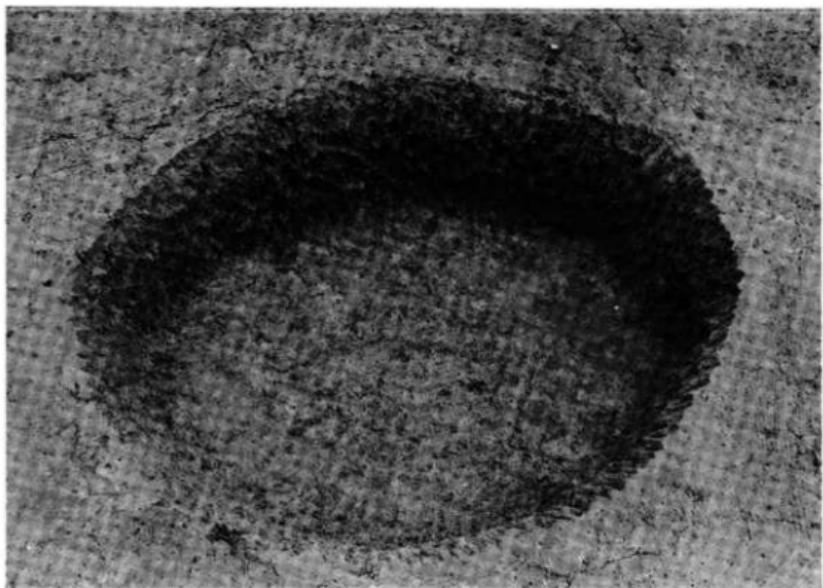
図版14 IIIb層上面検出遺構10



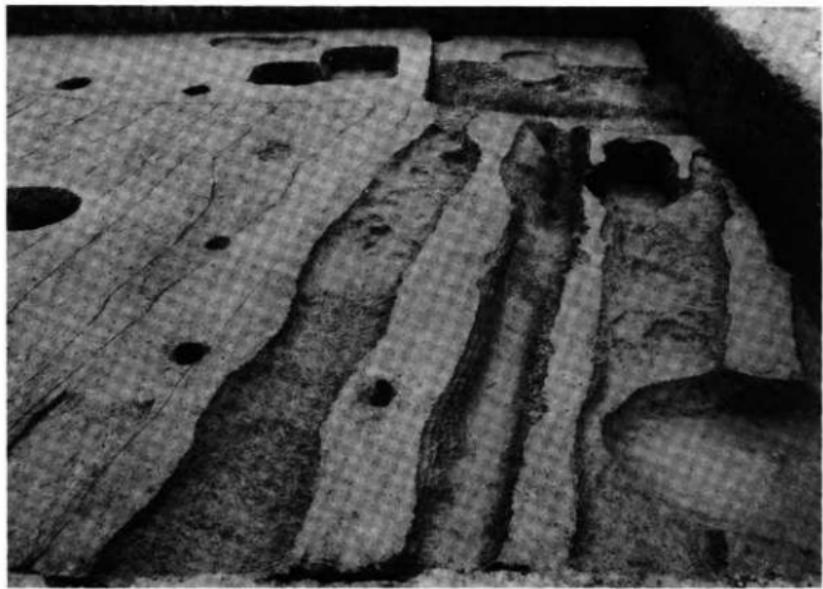
1. 21号土壙遺物出土状況(南より)



2. 24号土壙完掘状況(北より)
図版15 IIIb層上面検出遺構11

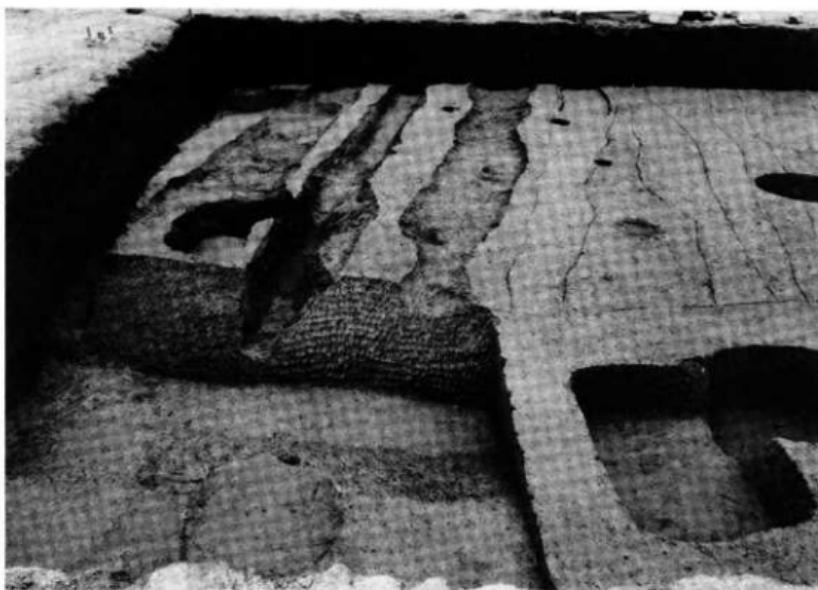


1. 25号土壤完掘状況(南から)



2. 小溝状連構完掘状況(7ライン 南より)

図版16 IIIb層上面検出造構12, IVa層上面検出造構1

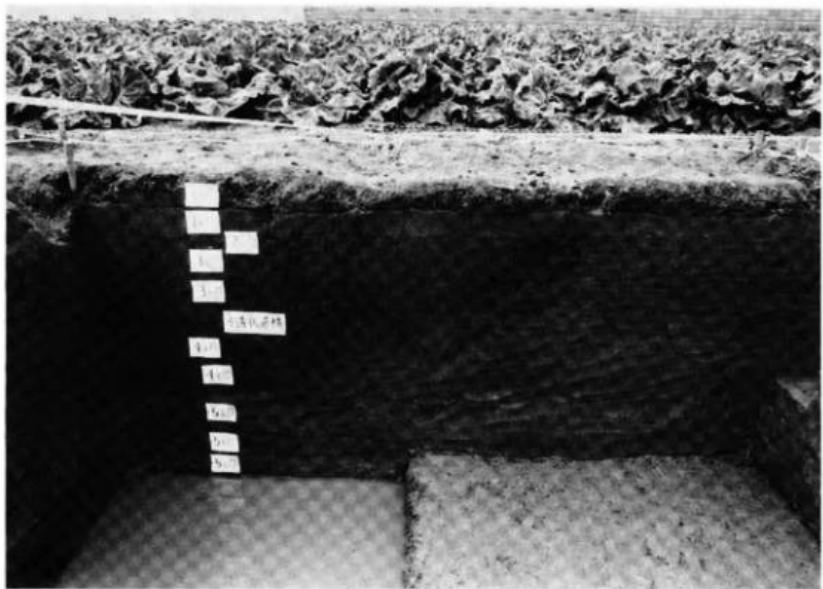


1. 小溝状遺構・2号溝跡完掘状況(7ライン 北より)



2. 2号溝跡完掘状況(A-7 東より)

図版17 IVa層上面検出遺構 2



1. C-7 南壁セクション



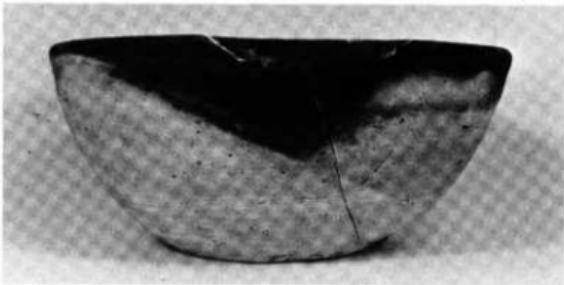
2. 四郎丸小学校遺跡見学風景
図版18 基本層位



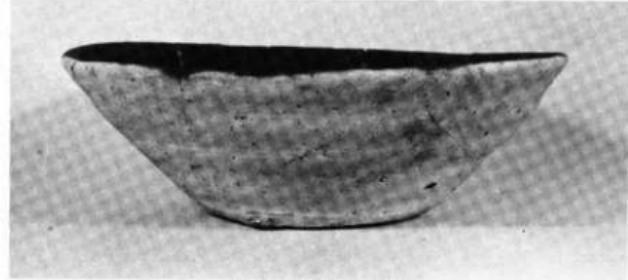
1. Ⅲb層(第29図1)



2. 2号住居跡(第13図3)



3. 1号住居跡(第7図1)



4. 1号住居跡(第7図3)

図版19 土師器壊1



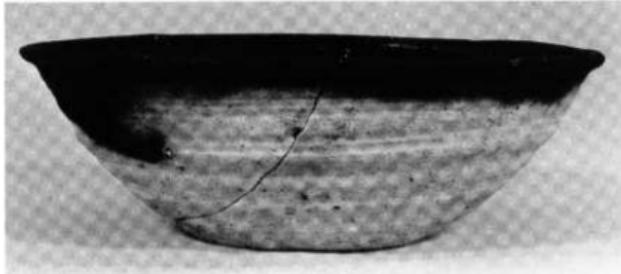
1. 1号住居跡(第7図5)



2. 1号住居跡(第7図6)

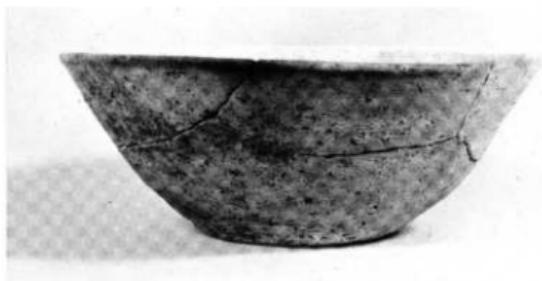


3. 1号住居跡(第7図7)



4. 1号住居跡(第7図8)

図版20 土師器坏2



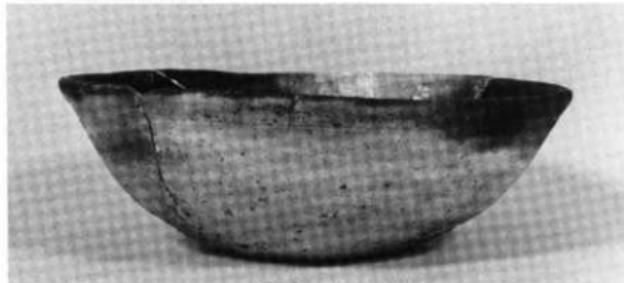
1. 2号住居跡(第13図9)



2. 26号土器(第25図2)



3. 1号住居跡(第7図2)

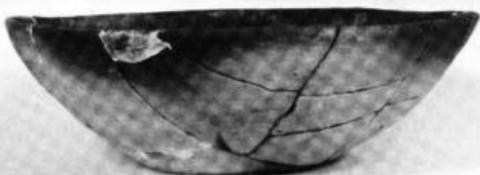


4. 1号住居跡(第9図1)

図版21 土器器坏3



1. 2号住居跡(第13図10)



2. 2号住居跡(第14図2)

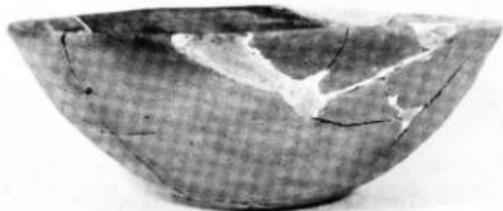


3. 1号住居跡(第7図11)



4. 1号住居跡(第7図10)

図版22 土師器壊4



1. 2号住居跡(第14図1)



2. 1号住居跡(第9図3)

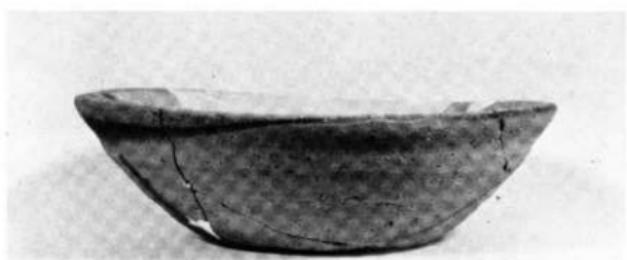


3. 1号住居跡(第9図4)

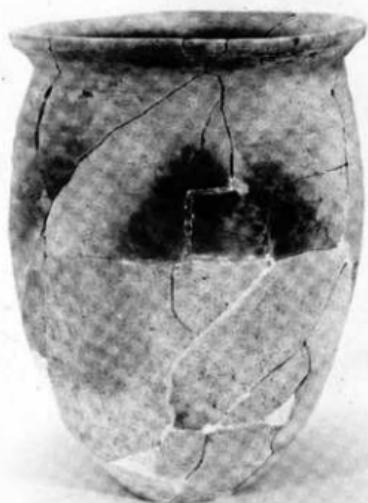


4. 2号住居跡(第19図3)

1：土師器 2～4：赤焼土器



1. 目b層(第30図1)



2. 1号住居跡(第8図4)



3. 2号住居跡(第15図4)

図版24 須恵器壊、土師器壊1



1. 2号住居跡(第17図1)



2. 2号住居跡(第16図4)

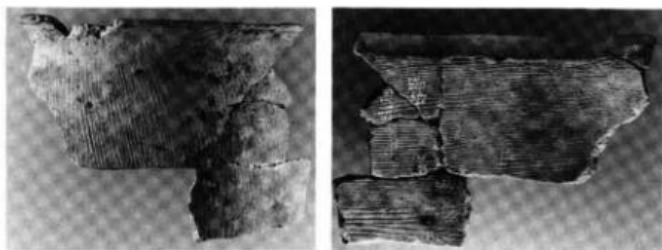


3. Ⅲa層(第29図7)

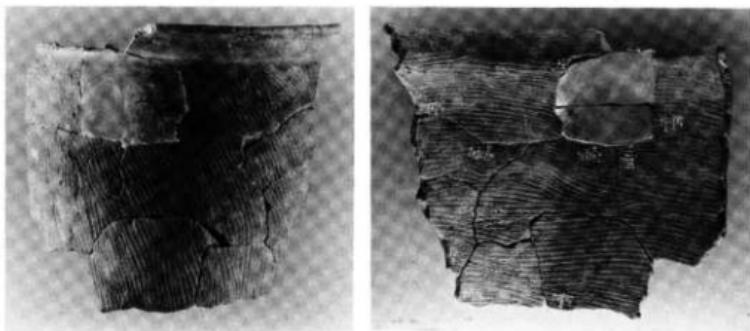


4. 1号住居跡(第9図2)

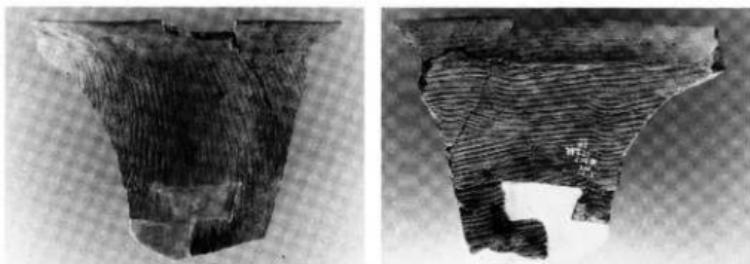
図版25 土師器甕2



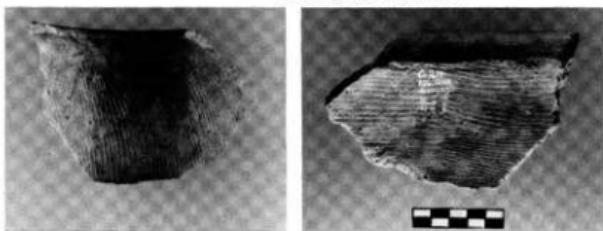
1. 2号住居跡(第14図9)



2. 2号住居跡(第14図8)

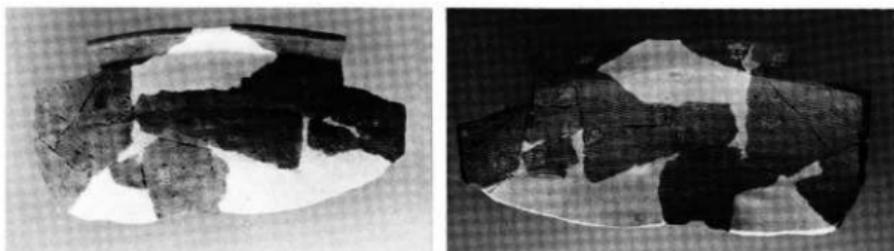


3. 2号住居跡(第18図3)



4. 2号性格不明遺構(第27図3)

図版26 土師器類 3



1. 2号住居跡(第18図4)



2. 2号住居跡(第19図6)



1:土師器
2~3:須恵器壺

3. 1号住居跡(第9図5)

図版27 土師器壺4, 須恵器壺・甕



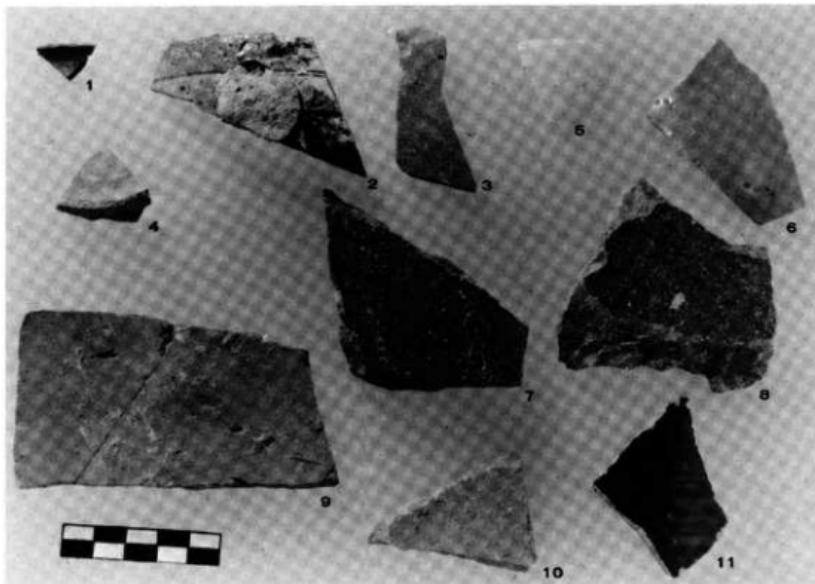
ヘラ文字?土器(土師器 壺) 2号住居跡(第16図3)



土製品(土壙 2~8, 羽口 9、10)

2 - 2号住居跡(第20図5) 3 - IIa層(第32図4) 4 - 2号住居跡(第20図4) 5 - IIIa層(第32図3) 6 - 2号住居跡(第20図6)
7 - IIIa層(第32図1) 8 - IIIb層(第32図2)

図版28 ヘラ描き文字?土器, 土製品



1:绿釉陶器 2~3:灰釉陶器 5:白磁 6:青磁 7~10:中世陶器 11:近世陶器?



1 - IIa層 2 - IIIb層 3 - IIIa層 4 - IIIa層 5 - IIIa層 6 - IIa層 7 - 2号土被 8 - IIa層 9 - IIa層 10 - IIa層
11 - IIa層

図版29 陶磁器



石製品(燧石)

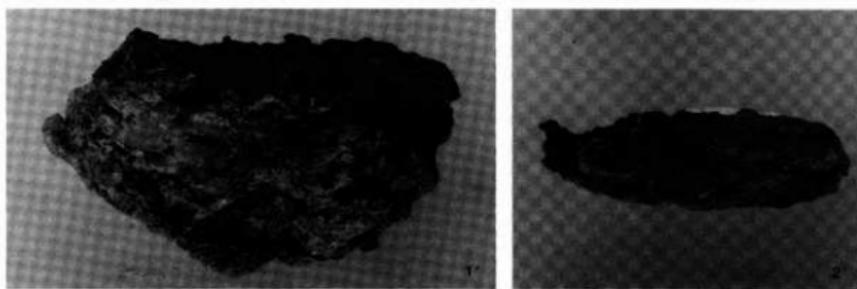
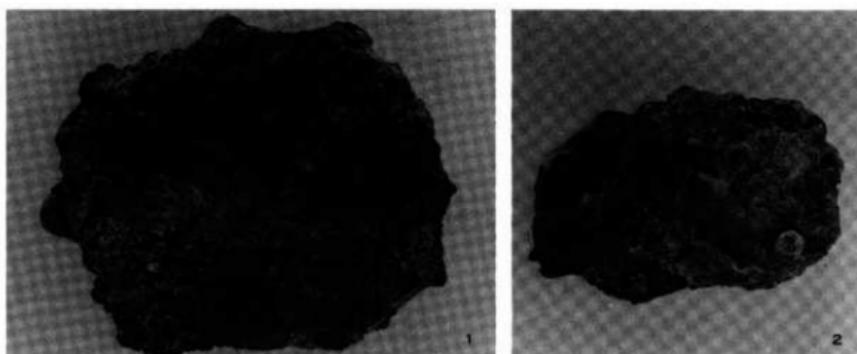
1~2号住居跡(第20図8) 2~1号住居跡(第10図2) 3~1号住居跡(第10図1)



鐵製品(鐵1 鉄7)

4~Ⅱa層(第32図5) 5~2号住居跡(第20図12) 6~2号住居跡 7~Ⅱa層(第32図6) 8~2号住居跡 9~1号住居跡(第10図4)
10~2号住居跡(第20図11) 11~Ⅲb層

図版30 石製品、鐵製品



1 - 21号土模 2 - 2号住居跡 3 - IIa層 4 - 2号住居跡 5 - 1号住居跡 6 - 2号住居跡 7 - 1号住居跡
鉄津 1・2・5～7 羽口13 炉壁4

図版31 鉄津, 羽口, 炉壁

職 員 錄

社会教育課

文化財調査係

課長	阿部 達	係長	佐藤 降	主事	吉岡恭平
主幹	早坂春一	主事	田中 則和	タ	工藤哲司
		タ	結城 慎一	タ	渡部弘美
		教諭	菅原 和夫	教諭	渡辺 滉
		主事	木村 浩二	主事	主浜光朗
係長	佐藤政美	タ	篠原 信彦	タ	斎野裕彦
主事	岩沢克輔	教諭	小野寺和幸	タ	長島榮一
タ	山口 宏	タ	佐藤美智雄	タ	及川 格
		主事	佐藤 洋	教諭	千葉 仁
		タ	金森 安孝	タ	松本清一
		タ	佐藤 甲二	派遣職員	高橋勝也

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物靈灰下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）
- 第2集 仙台城（昭和42年3月）
- 第3集 仙台市燕沢善光寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
- 第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
- 第5集 仙台市南小泉法螺塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
- 第6集 仙台市荒巻五本松立跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
- 第7集 仙台市宮代町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
- 第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
- 第9集 仙台市根岸町京極寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
- 第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
- 第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
- 第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
- 第13集 南小泉遺跡—範囲確認調査報告書一（昭和53年3月）
- 第14集 粟造跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
- 第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
- 第16集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
- 第17集 北星遺跡（昭和54年3月）
- 第18集 桥江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
- 第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
- 第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
- 第21集 仙台市周辺関係遺跡調査報告書（昭和55年3月）
- 第22集 経ヶ原（昭和55年3月）
- 第23集 年報I（昭和55年3月）
- 第24集 今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
- 第25集 三神塚遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
- 第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
- 第27集 史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）

- 第28集 年報 2 (昭和56年 3月)
第29集 郡山遺跡 I -昭和55年度発掘調査概報一 (昭和56年 3月)
第30集 山田上ノ台遺跡発掘調査概報 (昭和56年 3月)
第31集 仙台市開発関係道路調査報告 II (昭和56年 3月)
第32集 湊ノ里遺跡発掘調査報告書 (昭和56年 3月)
第33集 山山遺跡発掘調査報告書 (昭和56年 3月)
第34集 六反田遺跡発掘調査報告書 (昭和56年12月)
第35集 南小泉遺跡 -都市計画道路建設工事関係第 1次調査報告 (昭和57年 3月)
第36集 北前遺跡発掘調査報告書 (昭和57年 3月)
第37集 仙台平野の遺跡群 I -昭和56年度発掘調査報告書一 (昭和57年 3月)
第38集 郡山遺跡 II -昭和56年度発掘調査概報一 (昭和57年 3月)
第39集 燕沢遺跡発掘調査報告書 (昭和57年 3月)
第40集 仙台市高速鉄道関係道路調査概報 I (昭和57年 3月)
第41集 年報 3 (昭和57年 3月)
第42集 郡山遺跡 -宅地造成に伴う緊急発掘調査一 (昭和57年 3月)
第43集 乗越跡 (昭和57年 8月)
第44集 湊ノ里遺跡発掘調査報告書 (昭和57年12月)
第45集 茂庭一茂庭住宅用地造成工事地内遺跡発掘調査報告書一 (昭和58年 3月)
第46集 郡山遺跡 II -昭和57年度発掘調査概報一 (昭和58年 3月)
第47集 仙台平野の遺跡群 II -昭和57年度発掘調査報告書一 (昭和58年 3月)
第48集 史跡足見塚古墳群と57年度環境整備予備調査概報 (昭和58年 3月)
第49集 仙台市文化財分布調査報告 I (昭和58年 3月)
第50集 岩切畠中遺跡発掘調査報告書 (昭和58年 3月)
第51集 仙台市文化財分布地図 (昭和58年 3月)
第52集 南小泉遺跡 -都市計画道路建設工事関係第 2次調査報告 (昭和58年 3月)
第53集 中山畠中遺跡発掘調査報告書 (昭和58年 3月)
第54集 神明社窯跡発掘調査報告書 (昭和58年 3月)
第55集 南小泉遺跡 -青葉女子大学移転新校工事地内調査報告 (昭和58年 3月)
第56集 仙台市高速鉄道関係道路調査概報 II (昭和58年 3月)
第57集 年報 4 (昭和58年 3月)
第58集 今泉城跡 (昭和58年 3月)
第59集 下ノ内浦遺跡 (昭和58年 3月)
第60集 南小泉遺跡 -倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書一 (昭和58年 3月)
第61集 山口遺跡 II -仙台市体育馆建設予定地一 (昭和59年 2月)
第62集 燕沢遺跡 (昭和59年 3月)
第63集 史跡陸奥国分寺昭和58年度発掘調査概報 (昭和59年 3月)
第64集 郡山遺跡 IV -昭和58年度発掘調査概報一 (昭和59年 3月)
第65集 仙台平野の遺跡群 III -昭和58年度発掘調査報告書一 (昭和59年 3月)
第66集 年報 5 (昭和59年 3月)
第67集 富沢水田遺跡 -第一番 -一泉崎前地区 (昭和59年 3月)
第68集 南小泉遺跡 -都市計画道路建設工事関係第 3次調査報告 (昭和59年 3月)
第69集 仙台市高速鉄道関係道路調査概報 III (昭和59年 3月)
第70集 戸ノ内遺跡発掘調査報告書 (昭和59年 3月)
第71集 後河原遺跡 (昭和59年 3月)
第72集 六反田遺跡 II (昭和59年 3月)
第73集 仙台市文化財分布調査報告書 II (昭和59年 3月)
第74集 郡山遺跡 V -昭和59年度発掘調査概報一 (昭和60年 3月)
第75集 仙台平野の遺跡群 (昭和60年 3月)
第76集 仙台城 二ノ丸跡発掘調査報告書 (昭和60年 3月)
第77集 山田上ノ台遺跡 -昭和59年度発掘調査報告書一 (昭和60年 3月)
第78集 中山畠中遺跡 -第 2次発掘調査報告書一 (昭和60年 3月)
第79集 欠ノ上 I 遺跡発掘調査報告書 (昭和60年 3月)
第80集 南小泉遺跡 -第12次発掘調査報告書一 (昭和60年 3月)
第81集 南小泉遺跡 -第13次発掘調査報告書一 (昭和60年 3月)
第82集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報 IV (昭和60年 3月)
第83集 年報 6 (昭和60年 3月)
第84集 仙台市文化財分布調査報告書 III (昭和60年 3月)

仙台市文化財調査報告書第78集

中田畠中遺跡

— 第2次発掘調査報告書 —

昭和60年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市墨田町3-7-1
仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 共新精版印刷

仙台市日の出町2-4-2
TEL 36-7181

